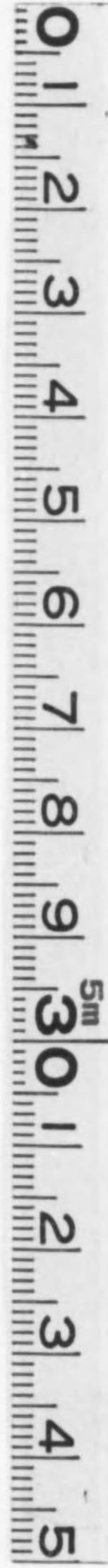


901-Tab6-2ウ



\*1200800858565\*



始





作友錄

文學總論

特書房刊

901  
Ta66  
27

題簽 竹軒先生



I種  
W



### 序

この序文はここに公にしようとする『文學總論』第二分冊のために筆を執つたのであるから『總論』の完成と共に書く筈になつてゐる序文が出来上つた時には自然取除かるべきものである。

第二分冊と第三分冊には主として古代文學の宗教的背景を取扱ふことになつた。文學論に於ける宗教考察の意義については第十三章に述べたことでもあるから、ここには再説しないことにする。ロンギノスの風格の論より直ちに中世に入り、文藝復興を経て近代の文學論を概観することは容易であるのみならず、これまでの類書が一般に踏襲する所の研究方法であるが、そこにこれまでの文學論の缺陷があつたとも考へ得るであらう。「詩學」「修辭學」といふやうな文學理論の推移を辿るだけの文學論では十分なものであると言ふことが出来ない。理論の對象となつてゐる文學そのもの、及び文學の内容を規定するところの背景を考察する

序

一

ことに依り、文學の外形のみならず内容を理解することも亦、その重大な任務の一つである。第一分冊[第一章]に於いて述べたやうに、希臘に於ける文學理論の萌芽ともいふべきものは紀元前五世紀の末葉になつて現れたのであるが、文學はその前より存在し、文學を規定する所の精神的背景——古代文學に於いては殆んど常に宗教と稱へ得る所のもの——は、更にその前より存在してゐた。第二分冊にはその最も原始的な所より理論討究の始まる直前に至るまでの時代に於いて、このやうな精神的背景の中を流れる二つの思想潮流、オリュムポスの精神とオルフェウムとが、どのやうに文學の内容を規定して行つたかといふことを考察した。技術(Art)と自然(Nature)、精神文化に於ける男性的原則と女性的原則の對立と交渉を究明することは、中世といふ重大な一つの時期を隔てて新しい轉向を示した歐羅巴の文學を貫徹する組織系統を明瞭にすることであると共に、長い時代に涉る精神文化の背景を有つたいづれの國の文學にも適用し得べき普遍的な原則を明瞭にすることにもなるであらう。第一分冊の最後[第十二章]に「幽玄」の論を考察したやうに、第三分冊の最後にはこのすべての考察に並行する事例を日本文學の中に

求めたいと思ふ。その上で「總論」の「古代篇」を完結したいと考へてゐる。

昭和八年仲秋

竹友藻風

## 例言

- 一 「文學總論」は「文學各論」に對する一般原則の論述であり、この書物は「總論」の第二分冊である。これは第一分冊の序文の中に述べて置いた通りである。
- 二 引用文に英譯を用ゐる事や外國語の名詞の書き方等は「第一分冊」の例に従つた。
- 三 希臘語の發音は長短を書き現すことが出来るけれども、高低を書き現すことは出来ない。リの音を示す爲の假名書きは第一分冊の「ユウ」を改めて「ビュタゴラス、オリム波斯」等の例に従つた。
- 四 その他、第一分冊には訂正すべき點が多い。とりあへず卷後の「訂正と正誤」の中に改めて置いたけれども、改版の際には、もう一度本文に筆を加へたいと思つてゐる。
- 五 索引は總論が完成した時に作製したいと思つてゐる。

目次

序 例言

第十三章 宗教 (一) ..... 三七八〇

文學論に於ける宗教考察の意義 ..... 三七八〇

宗教と藝術との對立的關係 ..... 三七八〇

宗教に於ける禁遏と局限 ..... 三七八〇

ギリヤスン ..... 三七八〇

藝術に於ける局限の必要 ..... 三七八〇

中世及び近代文學に於ける宗教的局限 ..... 三七八〇

ボウサンクエット ..... 三七八〇

中世と近代 ..... 三七八〇

古代、近代、中世、文藝復興期、近世 ..... 三七八〇

近代文學に於ける典型的な女性 ..... 三七八〇

『永遠に女性なるもの』(ギョエテ) ..... 三七八〇

グレエトヘンとペアトリイツエ ..... 三七八〇

フォッスラア ..... 三七八〇

アラウニング——ジオオジエリオット ..... 三七八〇

ブギユエエ ..... 三七八〇

古代文學に於ける典型的な女性 ..... 三七八〇

目次 ..... 三七八〇

七

希臘悲劇に描かれた女性…………… 三六一—三六四  
 Euripides…………… 三六一  
 ハイダ…………… 三六一—三六二  
 ジイ・エム・サアジェント…………… 三六三—三六四  
 古代文化と近代文化〔女性に現れた精神的要素の相違〕…………… 三六四—三六五  
 ホメエロスの女性…………… 三六四—三六五  
 希臘の宗教と中世の宗教…………… 三六五  
 アテエナと聖母瑪利亞…………… 三六五  
 アンティゴネエとペアトリイツェ…………… 三六五  
 希臘の宗教に於ける男性的要素と女性的要素——その基督教との關係…………… 三六五—三六七  
 希臘神話の概観…………… 三六七—三八〇  
 オリユムボスの神神…………… 三六七—三七八  
 希臘多神教…………… 三六七—三六九  
 天の神神——明るい神神…………… 三六九—三七〇  
 人間——萬物の靈長…………… 三七〇  
 オリユムボス以外の神神…………… 三七〇—三七七  
 テイタネス…………… 三七〇—三七七  
 サテュロス、パン、メドゥウサ、ミノタウロス、その他の神神と神靈…………… 三七七—三七九  
 オリユムボスの神神との關係…………… 三七九—三八〇  
 原始宗教の痕迹…………… 三八〇—三八一  
 神神の由來…………… 三八一—三八二  
 ヘロドトス…………… 三八二—三八三  
 ホメエロス、ヘシオドス以前の神神…………… 三八三—三八六

第十四章 宗教 (二)

クレエテエの宗教…………… 三八三—三八四  
 萬有母神…………… 三八三—三八四  
 母神の支配する動物…………… 三八四—三八六  
 牡牛——牡牛の勢威…………… 三八六—三八八  
 母神と子神…………… 三八八—三九〇  
 社会的背景——母系制度…………… 三九〇—三九一  
 ギルバアト・マレエ…………… 三九一  
 クレエテエに於ける女の地位…………… 三九一  
 一婦多夫…………… 三九一  
 マリノフスキイの研究——〔トロリアンド群島に於ける家族制度〕…………… 三九二—三九四  
 ヘロドトスその他の文献に現はれた母系制度の社會…………… 三九四—三九七  
 プラトオン——『母なる國』…………… 三九七  
 母系制度とクレエテエの宗教…………… 三九八  
 オリユムボスの宗教…………… 三九八—四〇三  
 アカイア族の思想統制…………… 三九八—四〇〇



ヘルレエネス……………三九二

バイシストラトス……………三九二

パンアテナイア——ホメエロス……………三九二

フェイデアイアスとホメエロス……………四〇〇

社会的背景——父系制度……………四〇〇—四〇一

女神に對する男神……………四〇一

父系制度……………四〇一—四〇二

フォイニックス〔イリアス第九卷〕……………四〇一—四〇二

父系制度の事實……………四〇二

ヘルラス……………四〇二

理性主義……………四〇六—四〇七

ヘロドトス——『希臘人の知力』……………四〇七

一夫一婦の状態に於ける父系制度……………四〇七

擬人觀 (anthropomorphism)……………四〇八—四〇九

オリュムポスの神神の人間性……………四〇八—四〇九

酋長或は貴族階級の理想的典型——ゼウス……………四〇八—四〇九

父の職能……………四〇八—四〇九

〔中庭のゼウス〕……………四〇九

家族、親族、氏族、種族……………四〇九

希臘人の主神……………四〇九

社會意識……………四一〇—四一一

ファアネル——都市の宗教……………四一〇

男性的原則……………四一一

希臘精神 (Olympian spirit)……………四一一

ギンケルマン——『高貴なる純一と沈靜なる雄大』……………四一一—四一二

オリュムポスの宗教に依る喪失……………四一二

宗教が宗教として存在する所のもの……………四一二

禁忌の觀念……………四一二—四一三

原始宗教の宗教的意義……………四一三

オリュムポスの神神に於ける原始宗教の痕迹……………四一二—四一三

ゼウス……………四一三—四一四

アカイア族の神……………四一四

ペラスゴイの神……………四一四

ギルバアト・マレエの説……………四一四—四一五

エウリピデエス……………四一五—四一六

アポロロン……………四一六—四一八

καρπος……………四一八

極北民族の神——アポロロオンの「神路」……………四一七

レンデル・ハリス……………四一八

ヘエラ……………四一八—四二〇

ペラスゴイの神……………四一八—四一九

ジェイン・ハリスの説……………四一八

ゼウスとヘエラ……………四一九

ディオオネエとヘエラ……………四一九

歳の精……………四一九

デアエエテエル……………四二〇

Gemeter..... 四一〇

「大地」..... 四一〇

アルテミス..... 四一〇

野獣の神(クレエテエの母神)..... 四一〇

アポロロオンとの双生関係..... 四一〇

アフロダイテエ..... 四一〇

多島海の女神..... 四一〇

季節の神..... 四一〇

母神の屬性..... 四一〇

アテエナ..... 四一〇—四一一

女神の中オリュムポスの精神に最も近いもの..... 四一〇

アテエナイの *kyber*..... 四一一

ヘシオドスの神話體系..... 四一一

「神統記」——神神の系譜..... 四一一

「労働と光陰」——五つの時代..... 四一一

ヘシオドスの境遇とその世界観..... 四一一

抽象的な女神..... 四一一

總括——抽象的觀念と母神時代の原始的な女神..... 四一一

希臘多神教に於ける父系制度と母系制度..... 四一一

父神の征服..... 四一一

母神の反抗..... 四一一

母神崇拜の痕迹..... 四一一

「島の祭女」の連綿..... 四一一—四一二

「エウメニエエス」に於ける祭女の祈禱..... 四二二—四二六

オリュムポスの宗教に於ける母神の地位..... 四二五—四二九

他界觀念..... 四二六—四二八

ホメエロス..... 四二六

來世觀..... 四二六

「オデュッセイア」第十一卷——アキルレウス——その説明..... 四二七

「イリアス」第十七卷..... 四二八

ヘシオドス..... 四二八—四二九

「蕪まれた者の島」..... 四二八

「奈落」..... 四二八

賞罰の觀念..... 四二八—四二九

希臘思想に於ける文化主義の潮流..... 四二九—四三三

クセノファネエス..... 四二九—四三一

オリュムポスの宗教に於ける擬人觀の批評..... 四二九—四三〇

クセノファネエスの思想..... 四三〇—四三一

文化主義..... 四三〇

汎神論..... 四三〇—四三一

希臘哲學に於ける非宗教的要素..... 四三一—四三三

物的考察——宗教との關係..... 四三一

客觀的考察——オリュムポスの精神..... 四三一—四三三

ツエラア..... 四三三

希臘哲學の主流に並行する思想潮流..... 四三三—四三三

父系制度の宗教に對する母系制度の宗教..... 四三三—四三三

文化主義、理性尊重に對する神祕主義、自然崇拜  
第十五章 宗教 (三)

オルフィズム.....四五六—四六九

オルフィック教徒.....四五六

オルフェウス.....四五六—四三八

ディオニュソスの宗教.....四三八—四四九

ディオニュソス.....四三八

ホメエロスに於ける言及.....四三八—四三九

小亞細亞、多島海の宗教.....四三九—四四四

母神教.....四四九

korpos——ヘルセフォネエとの關係.....四四九

祭女(Bakcha)——エウリピデエス.....四五九

希臘劇の起原.....四五九

オリュムポスの宗教との比較.....四五九

オリュムポスの宗教に於ける理性的精神——「節制」.....四五九—四六〇

ディオニュソスの宗教に特殊なる宗教的意義.....四六〇—四六八

熱狂——恍惚——離脱.....四六〇—四六八

神になる事.....四六八—四六九

ディオニュソスの宗教に於ける神人の合一.....四六八

オルフェウス即ディオニュソス.....四六八

一つの神——ジエウス.....四六八—四六九

オルフィック教徒の宇宙觀.....四六九—四五三

開闢說.....四五〇—四五二

ジエウス——ディオニュソス——ザグレウス.....四五二—四五三

オルフィック教徒に於ける靈魂の觀念.....四五三—四五六

オルフィック書牒の詩.....四五三—四五六

靈魂の由來.....四五四—四五六

肉體牢獄(アラトオン).....四五六—四五七

「クラテュロス」.....四五七—四五八

「ゴルギアス」.....四五八—四五九

輪廻.....四五九—四六〇

「純潔」と「聖別」.....四六〇—四六九

三つの行事.....四六〇—四六九

「生食のまつり」.....四六〇—四六九

ディオニュソスの宗教とオルフィック教徒の信仰とを結合する樞軸.....四六〇

神を裂き、神を食べる事.....四六一

生食と勢威.....四六一

聖餐——基督教とオルフィズム.....四六一—四六三

「箕を運ぶまつり」.....四六三—四六六

箕 (Akraon).....四六三

ジエイン・ハリスンの解釋——蔽ひ.....四六三

cornucopia.....四六三

ディオニュソス・リクニテエス.....四六四—四六六

テュイアデエス.....四六四

行事の狀景.....四六四—四六五

誕生.....四六六

「聖婚」.....四六六—四六九

典據.....四六六

クレエメエスその他.....四六六

「婚の床或は部屋」.....四六六

蛇——ツェウスとの結婚.....四六六

サバチオスの密儀.....四六六—四六七

「しるし」.....四六八

他界観念との結合.....四六八—四六九

幽界に於ける結婚.....四六八

「コハネ黙示録」の一節.....四六九

エレウシスの密儀.....四六九—四七〇

エレウシス縁起.....四六九—四七〇

ホメエロスの讃歌——アエメエテエル.....四七〇

密儀の存在.....四七一

母神アエメエテエル.....四七一

イアムマエ.....四七一—四七二

クレエメエス——パウボオ.....四七二

ディオニュソスの宗教とオルフィズム.....四七二

神秘思想.....四七二

アテエナイの行事.....四七二

密儀の内容.....四七二—四七六

小密儀.....四七二

大密儀.....四七二—四七六

聖物移轉.....四七三

宣言.....四七三

海水浴.....四七三

聖物運搬——イヤッコス.....四七三

「初穂のたむげ」.....四七三

「しるし」(クレエメエス).....四七三

断食.....四七三

キュケオオン.....四七三

聖物.....四七三

その他の儀式.....四七三

密儀の宗教的意義.....四七三—四七六

アリストテレエス——「心もち」.....四七三—四七六

「純潔」と「聖別」に依つて到達し得べき生命の體驗.....四七三—四七六

ピンダロス.....四七三—四七六

ソフォクレエス.....四七三

「永生」と「死後の幸福」.....四七三

エレウシス以外の密儀.....四七三

カペイロイの祭事.....四七三

母神教——*or Xoboria*.....四七三

希臘宗教思想に於けるオルフィズムの影響.....四七三—四八二

ピュタゴラス學徒.....四七三—四八二

ヘロドトス——オルフィズムとピュタゴラス學徒.....四七三—四七八

目次.....四七八

ピュタゴラスとその學徒……………四七九

ピュタゴラスの教説に於ける宗教生活に關する方面……………四八〇

『ピュタゴラス風の生活様式』(プラトオン)……………四八〇

禁慾——禁忌……………四八〇

輪廻——人間と動植物との血縁關係……………四八〇

靈魂——空中の微塵……………四八〇

ピュタゴラス學徒の教説とオルフィズムとの區別……………四八〇

オルフィック教徒の行事を踏襲しない事……………四八〇

儀禮——内觀の生活を助ける爲の法則……………四八一

眞理の追求……………四八一

『神に従ふこと』……………四八一

靈魂の存在……………四八一

オルフィック教徒——行事に依る離脱の體驗……………四八一

ピュタゴラス學徒——默想或は哲學……………四八一

ジョン・バアネット……………四八一

哲學即生活の様式……………四八一

オルフィズムとの相違の點——ナリウムボスの精神との結合……………四八一

ピュタゴラス學徒の哲學思想……………四八一

倫理上の思想——秩序と調和……………四八一

宇宙論——秩序と調和……………四八一

「數」……………四八一

「奇數」——「限定するもの」……………四八一

「偶數」——「限定せられざるもの」……………四八一

對立的現象と調和……………四八二

「數」は概念でなく實驗である事……………四八二

「限定するもの」の尊重——「自然」に對する、文化或は技術の尊重……………四八二

「對立の系列」……………四八二

音樂……………四八二

靈魂の淨化(アリストクセノス)……………四八二

κιβωπιςとの關係……………四八二

「數」への還元……………四八二

秩序と調和……………四八二

「限定」に依る「無限」の統一……………四八二

音樂と哲學——節制、禁慾……………四八二

エムペドクレエス……………四八二

「淨め」に現れた宗教思想……………四八二

「轉生」(transmigration)……………四八二

「轉生」の「淨め」……………四八二

オルフィズム或はピュタゴラス學徒の影響……………四八二

宇宙論と四元素の説……………四八二

詩人に於ける宗教思想の發達……………四八二

ピンドロス……………四八二

ピンドロスとオルフィズム……………四八二

ピンドロスに於けるオリュムポスの精神……………四八二

國民詩人——ヘルシア戦争……………四八二

頌詩 (epithalms)……………四八二

目次……………四八二

國民的競技…………… 四九〇

神事…………… 四九一

莊麗體…………… 四九一

祝詞…………… 四九一

オリュムポスの宗教…………… 四九一—四九五

人間と神との關係…………… 四九一—四九三

擬人觀…………… 四九三

神話の修正——理性的精神…………… 四九五—四九六

神神——完全な人間…………… 四九五

罪惡の觀念…………… 四九五—四九六

神神と人間との限界…………… 四九五

死と不死…………… 四九五

「神神の嫉み」…………… 四九六

ヒンダロスに於けるオルフィズムの影響…………… 四九六—四九八

他界に於ける賞罰…………… 四九六—四九八

再生の觀念…………… 四九八—五〇〇

オリュムポスの宗教とオルフィズムとの融合と對立…………… 五〇〇—五〇一

劇詩人の宗教觀…………… 五〇一—五〇三

希臘悲劇…………… 五〇一—五〇三

神事——神事能…………… 五〇一—五〇三

劇の起原に關する二つの學說…………… 五〇一—五〇三

歳神起原說(マレエ)…………… 五〇一

葬原起原說(リフヂエイ)…………… 五〇一

或英雄の死或は災厄…………… 五〇三—五〇四

悲劇の段階…………… 五〇三—五〇四

抗爭…………… 五〇三

災厄…………… 五〇三

使者…………… 五〇三

哀悼…………… 五〇三—五〇四

神顯…………… 五〇三

激變——サテュロイの劇…………… 五〇三

オリュムポスの精神の體現…………… 五〇三—五〇四

一 アッティカの宗教…………… 五〇三

二 觀衆の心理…………… 五〇三—五〇四

三 ヘルシア戰爭の結果…………… 五〇三

アイスキュロス…………… 五〇三—五〇四

一生の閉歴とその宗教思想…………… 五〇三

「ヘルシア人」…………… 五〇三—五〇四

戴イオニュッスを中心とする九篇の劇…………… 五〇三

宗教的道念…………… 五〇三

借上(Bank)…………… 五〇三

「因果應報」——神の正義 (dharma)…………… 五〇三—五〇四

オレスティア…………… 五〇三

「テエバイに對抗する七人」…………… 五〇三

巨神戰史——「プロメエテウス繫縛」…………… 五〇三

ヅエウス…………… 五〇三—五〇四

『王たちの王』——『永遠の時の主宰者』……………五〇二

『すべてもの』——オルフィズムとの関係……………五〇

アイスキュロスの他界観念……………五二—五二四

冥府——ホメエロス以来の観念……………五二

オルフィズムの影響否定……………五二

「エウメニデアス」と「ハムレット」……………五二—五二四

復讐の観念……………五二—五二四

ゾエウスの屬性……………五二—五二四

ソフォクレエス……………五二—五二四

オリュムポスの精神……………五二—五二四

現存する戯曲……………五二—五二四

ネメシスの應報を取扱つたもの……………五二—五二四

テエバイの王統に関するもの……………五二—五二四

「エエレクトラ」……………五二—五二四

アイスキュロスとの比較……………五二—五二四

ソフォクレエスの藝術……………五二—五二四

表現或は風格……………五二—五二四

コロオナに於けるオイディプス……………五二—五二四

藝術の極致……………五二—五二四

藝術上の發達……………五二—五二四

Art & Nature……………五二—五二四

“The Sophoclean”……………五二—五二四

ソフォクレエスの宗教思想……………五二—五二四

藝術との一致……………五二—五二四

無意識の宗教……………五二—五二四

傳統的な宗教に對する敬虔な態度……………五二—五二四

融和或は解決を豫想せしめるもの……………五二—五二四

ネメシス……………五二—五二四

デアネイラ……………五二—五二四

フィロクテエテエス……………五二—五二四

アチャの解釋……………五二—五二四

ソフォクレエスの他界観念……………五二—五二四

エレウシスの密儀……………五二—五二四

アイスキュロスとの比較……………五二—五二四

他界の幸福……………五二—五二四

「アンティゴネエ」……………五二—五二四

「フィロクテエテエス」に於けるヘエラクレエス……………五二—五二四

死人の崇り……………五二—五二四

オルフィズムの影響否定……………五二—五二四

オリュムポスの精神に於けるすべてのものの融和……………五二—五二四

アラウニングとソフォクレエス……………五二—五二四

シエイクスピアとソフォクレエス……………五二—五二四

個別的な宗教と普遍的な宗教……………五二—五二四

ソフォクレエスの普遍性……………五二—五二四

「詩學」——『普遍的なもの』……………五二—五二四

ソフォクレエスの言……………五二—五二四

ソフォクレエスの完全……………五三二  
 藝術上の完全と宗教上の完全……………五三三  
 完全の意義……………五三三  
 觀念——Art……………五三二—五三三  
 理性主義と文化主義の理想的典型……………五三三  
 宗教的——藝術的……………五三三  
 宗教的雰圍氣——'piety'……………五三三  
 ビンダロス、アイスキュロス、ソフォクレエスとオリュムボスの宗教……………五三二—五三三  
 オリュムボスの精神とオリュムボスの宗教……………五三三

第十六章 宗教 (四)

希臘哲學(ソオクラテエス以前)の概観……………五三〇—五六五  
 三大事變と希臘人の思想生活……………五三〇  
 ペルシア戦争の結果……………五三〇  
 オリュムボスの宗教の確立……………五三〇  
 批評的精神の導入……………五三〇  
 ミレトスの陷落——哲人學者達の移住……………五三〇  
 オリュムボスの宗教に對する批評的考察の端緒……………五三〇  
 ミレトス學派——物界考察……………五三〇—五三二  
 タレエス……………五三二  
 アナクシマンドロス……………五三二  
 アナクシメネエス……………五三二

神——物界の生起或は運動の動因……………五三一  
 タレエス……………五三一  
 クセノファネエス……………五三二  
 ヘエラクレイトス……………五三二—五三三  
 既成宗教の否定……………五三三  
 火と流轉……………五三二—五三七  
 根本的存在者——火對立或は争闘……………五三二  
 神即火——パアナエットの解釋……………五三三  
 ロゴス即火——ジェイムズ・アダムの解釋……………五三三  
 ロゴス即神……………五三三  
 對立と争闘……………五三三—五三七  
 生滅流轉の起原……………五三三—五三七  
 調和と均衡の原因……………五三三—五三七  
 ヘエラクレイトスの殘した問題……………五三七  
 パルメニデエス……………五三七—五三八  
 「真理の道」……………五三七—五三八  
 「在るもの」の肯定に依る「在らざるもの」の否定……………五三七  
 在りといふ道……………五三八  
 存在者……………五三八—五三九  
 實驗的存在……………五三八—五三九  
 アナクシマンドロス、ピュタゴラス學徒、アトム論者……………五三九—五四〇  
 クセノファネエス……………五四〇  
 パルメニデエスは神或は精神的存在に言及してゐない……………五四〇



「在るもの」に於ける充實「パアネット」……………五五〇

パルメニテエスと今日の物質論者……………五五〇

パルメニテエスとプラトオン……………五五〇

オルフィズム及びピユタゴラス學徒の影響……………五五二

詩の形を用ゐたる事……………五五二

「信仰(或は私見)の道」……………五五二

『人間の信仰』……………五五二

世界觀……………五五二

萬物を支配する神——生成の女神……………五五二

愛(Eros)……………五五二

パルメニテエスの最後に到達した思想……………五五二

反オルフィズム……………五五二

反ヘエラクレイトス……………五五二

パルメニテエスに對する批評……………五五二

波多野博士……………五五二

ジエイムズ・アダム……………五五二

オリユムボスの宗教とオルフィズムのいづれにも隔絶してゐる事……………五五二

ヘエラクレイトスとパルメニテエスに對する關係……………五五二

折衷論者……………五五二

メリッソス……………五五二

グエエノオン……………五五二

エムベドクレエス……………五五二

ヘエラクレイトスとパルメニテエスに對する關係……………五五二

「愛」と「憎」——生成流轉の現象……………五五三

「愛」と「憎」に依つて規定せられる「圏」……………五五三

神——概念の神……………五五三

クセノファネエスとの關係……………五五三

「長壽諸神」——多神教……………五五三

アナクサゴラス……………五五三

エムベドクレエスとの關係……………五五三

實體不變——パルメニテエス……………五五三

すべてのもの……………五五三

すべて……………五五三

離合——エムベドクレエス……………五五三

もの——種子……………五五三

ノウス (Nous)……………五五三

ものとの關係——思想上の飛躍——精神的實在……………五五三

プラトオンの批評……………五五三

「ファイドオン」……………五五三

アナクサゴラスの效績……………五五三

アリストテレエスの批評……………五五三

物界考察——日蝕の説明……………五五三

理神論……………五五三

アトム論者……………五五三

レウキッポスとデモクリトス……………五五三

アトム——パルメニテエスの「在るもの」との比較……………五五三

「在らざるもの」の存在——「虚空」…………… 五六五  
 アトム論の重さ——パルメテウス…………… 五六六—五六七  
 靈魂の問題…………… 五六七—五六八  
 エムペドクレウスとピュタゴラス學徒に共通の所説…………… 五六七  
 細やかで、圓く、かつ滑らかなアトム…………… 五六七  
 「火」を構成する所のアトム…………… 五六七  
 「流出物」とその作用…………… 五六七—五六八  
 デイオゲネース〔アホルロニアの〕…………… 五六八—五六九  
 宇宙の實體——「空氣」…………… 五六八  
 「靈魂」と「叡智」〔「空氣」の屬性〕…………… 五六九  
 「空氣」は神なり…………… 五六九  
 「空氣」は靈魂なり…………… 五六九  
 エムペドクレウスとアナクサゴラスの折衷…………… 五六九  
 ソフィストの運動…………… 五六九—五六〇  
 ペロポンネッス戦争直前の精神文化——ソフィスト…………… 五六〇  
 プラトオンの批評…………… 五六〇—五六一  
 アリストテレスの定義…………… 五六一  
 'Sophistry'…………… 五六一  
 ジオオジグロウト…………… 五六一  
 陪審制度の設定と民権伸長…………… 五六二  
 教養の必要…………… 五六二  
 啓蒙時代…………… 五六二  
 ソフィストの徒の活躍…………… 五六二—五六三

「技術」の教師——啓蒙思想家…………… 五六三  
 傳統的な宗教に對する懐疑的批判的な立場…………… 五六三  
 修辭學の發達——表現形式に對する思想傾向の一致…………… 五六三—五六四  
 プロオタゴラス…………… 五六四—五六五  
 アエモクリトスとヘラクレイトスに對する關係…………… 五六五  
 典型的なソフィスト…………… 五六五  
 「人はすべてのものの尺度である」…………… 五六五—五六六  
 「クラテュロス」…………… 五六六—五六七  
 「テアイテトス」…………… 五六七  
 人——知覺の主體…………… 五六七  
 プラトオンの批評…………… 五六七  
 人が尺度——眞實は相對的…………… 五六七  
 ペイタアとプロオタゴラス…………… 五六七—五六八  
 神の存在——不可知論…………… 五六八—五六九  
 シモニテエスの逸事…………… 五六九  
 ゴルギアス…………… 五六九—五六〇  
 懐疑論者…………… 五六〇  
 修辭學と主智的傾向…………… 五六〇  
 三つの命題…………… 五六〇  
 一 何物も存在せず…………… 五六〇  
 二 知る事能はず…………… 五六〇  
 三 傳達する事能はず…………… 五六〇  
 エレア派とジュエノオン等に由來する虛無主義…………… 五六〇—五六一

ゾラトオンの批評…………… 五八一  
 「ファイドロス」…………… 五八一  
 辯論の思想的背景…………… 五八一  
 宗教に對する態度…………… 五八二  
 プロテイコス…………… 五八二—五八三  
 宗教觀——キケロ…………… 五八二—五八三  
 人間に利益ある物象の擬人化…………… 五八三  
 比較宗教學との一致…………… 五八三  
 プロテイコスの言…………… 五八三  
 プロテイコスの理解と信仰…………… 五八三—五八四  
 『畏るべき』の濫用について「プロオタゴラス」…………… 五八四  
 クリテイアスに依る神神の由來…………… 五八四—五八五  
 ヒッピアス…………… 五八五—五八六  
 自然(Nature)と法律(Nomoi)…………… 五八五—五八七  
 アルケラオス…………… 五八五—五八六  
 法律の重視…………… 五八六  
 ヘルラスの法律…………… 五八六  
 オリユムボスの精神に於ける自然の征服…………… 五八六  
 『法律は萬物の王なり』…………… 五八六  
 ソフィストの時代…………… 五八六—五八七  
 オリユムボスの精神の批判…………… 五八六  
 法律に對する批評——その宗教上の影響…………… 五八六—五八七

ヒッピアスに於ける自然と法律の對立…………… 五八七—五八八  
 「プロタゴラス」——「似たもの同志縁を有つ」理由…………… 五八七—五八八  
 クセノフォオン「追想録」——法律貶斥…………… 五八八  
 道徳上の準據——自然にして法律にあらず…………… 五八八  
 都市宗教…………… 五八八  
 プラトオンの批評…………… 五八九—五九〇  
 技術——法律——文化…………… 五九〇  
 自然尊崇と暴力肯定…………… 五九〇—五九一  
 自然尊崇と法律以前の狀態…………… 五九一  
 『正義は力なり』…………… 五九一  
 正、不正——自然と法律の背馳…………… 五九二  
 「國家論」——トラシユマコス…………… 五九二  
 「ゴルギアス」——カルリクレエス…………… 五九二  
 正義と約束…………… 五九二—五九三  
 ペロポンネソス戦争の前後に於けるアテエナイの時代的風潮…………… 五九三—五九四  
 トウウキユテイアエス——「ペロポンネソス戦史」…………… 五九三—五九四  
 スバルタに對する回答…………… 五九四—五九五  
 メロスに對する回答…………… 五九五—五九六  
 ソフィストの效績…………… 五九五  
 哲學と個人的特色の缺乏…………… 五九五  
 stepping-stones…………… 五九五  
 アテエナイ文化の崩壊とその後に来るもの…………… 五九六  
 一大天才の出現——ソオクラテエス…………… 五九六

紀元前五世紀後半期の希臘文學

トウウキユデアエス……………五九六—五九七

ソフィストとの關係……………五九六—五九七

ヘロドトスとの比較……………五九七—五九八

トウウキユデアエスの歴史……………五九八—五九九

エウリピデアエス……………五九九—六〇〇

生涯に纏はる傳説と誤聞……………六〇〇—六〇一

一生の閱歷……………六〇一—六〇二

その時代に容れられなかつた理由……………六〇二—六〇三

一 哲學的な思想家……………六〇三—六〇四

二 近代的な詩人……………六〇四—六〇五

三 深刻な批評家……………六〇五—六〇六

作品……………六〇六—六〇七

オリュムボスの神神に對する忌憚なき批評……………六〇七—六〇八

宗教思想……………六〇八—六〇九

「ヘエラクレエス狂亂」……………六〇九—六一〇

ヘエラクレエスの傳説……………六一〇—六一一

梗概……………六一一—六一二

ペロポンネソス戦争との關係……………六一二—六一三

宗教思想——オリュムボスの神神殊にヅエウスとヘエラに對する批評……………六一三—六一四

神神と人との關係——詩人の虛構……………六一四—六一五

神の存在……………六一五—六一六

「ヒッポリュトス」……………六一六—六一七

アフロアイテエ、アルテミス、及びボセイドオンに對する批評

梗概……………六一七—六一八

高尚な風格——後世への影響……………六一八—六一九

宗教上の問題……………六一九—六二〇

アフロアイテエの怨み……………六二〇—六二一

アルテミスの態度……………六二一—六二二

ボセイドオンの不親切……………六二二—六二三

神神の辯解……………六二三—六二四

法律——「ヘカメエ」の一節……………六二四—六二五

神神は法律に支配せられる——法律と自然の對立……………六二五—六二六

エウリピデアエスの解釋……………六二六—六二七

「イオオン」……………六二七—六二八

アポロオンの不正……………六二八—六二九

神の不義摘發……………六二九—六三〇

冷然たる情調……………六三〇—六三一

梗概……………六三一—六三二

脚色——他の劇詩人との比較……………六三二—六三三

「エレクトラ」と「オレステエス」……………六三三—六三四

因果應報——エウリピデアエスの解釋……………六三四—六三五

「必然」——神神以上の力……………六三五—六三六

オレステエスの罪……………六三六—六三七

アポロオンの託宣……………六三七—六三八

父の讐を報いる事……………六三八—六三九

目次

母殺しの罪……………六三九—六四〇  
父の讐を報いる事と母を殺す事……………六三八—六三九  
オリュムポスの宗教と父系制度の社會……………六三九—六四〇  
神の批判——父系制度の批判……………六三九—六四〇  
エウリピデエスに於ける神への求望……………六三九—六四〇  
哲學——抽象的な神……………六三九—六四〇  
人間に關係のある神……………六三九—六四〇  
母系制度の宗教への接近……………六三九—六四〇  
父系制度の宗教に依る判定——父の讐……………六三九—六四〇  
母系制度の宗教に依る判定——母殺し……………六三九—六四〇  
法律と自然……………六三九—六四〇  
オレエステエス斷罪……………六三九—六四〇  
エウリピデエスに於けるソフィストの思想と母神禮拜の宗教……………六三九—六四〇  
詩人としての直観……………六三九—六四〇  
エウリピデエスに於けるオルフィズム或はピュタゴラス教徒の學說の影響……………六三九—六四〇  
死後の世界に對する觀念……………六三九—六四〇  
『生は死にして死は生なり』……………六三九—六四〇  
「フリクソス」……………六三九—六四〇  
肉體牢獄……………六三九—六四〇  
アリストファネスの批評……………六三九—六四〇  
『生のかなたの生』……………六三九—六四〇  
「メエタイア」……………六三九—六四〇  
「ピッポリユトス」……………六三九—六四〇

宇宙と人間の由來……………六四〇—六四一  
「賢女メラニッペエ」……………六四〇—六四一  
オルフィック教徒及びエムベドクレエスの宇宙觀との比較……………六四〇—六四一

「祭女」

「離脱」と「神懸り」を體現するものとしてのディオニソスの宗教の讚美……………六四一—六四二  
梗概……………六四一—六四二  
作劇の時期と境遇……………六四一—六四二  
宗教的恍惚の目撃……………六四一—六四二  
宗教的信仰の理解……………六四一—六四二  
オリュムポスの宗教への復歸ではない事……………六四一—六四二  
ペイター對マレエ——ジエイムズアダムの説……………六四一—六四二  
その批評……………六四一—六四二  
轉向の由來する所……………六四一—六四二  
女性に對する關心……………六四一—六四二  
近代的な女性……………六四一—六四二  
戀愛……………六四一—六四二  
エフ・エル・ルウカス……………六四一—六四二  
アリストファネスの批評……………六四一—六四二  
エウリピデエスの近代性……………六四一—六四二  
エウリピデエスに於ける女性と母神崇拜の宗教……………六四一—六四二  
男性的原則に對立するものとしての女性的原則……………六四一—六四二  
下層階級の人民の理解……………六四一—六四二  
都市國家の宗教に對する民間の宗教……………六四一—六四二

目次

三六

藝術上の特色……………六二—六三

神事劇の形式……………六三

思想と祭式の一致——母神教……………六三

劇の形式に現はれた宗教思想……………六三

文化の影響……………六三—六四

合唱部の變遷と發達……………六四

エウリピアエスの合唱部……………六四

臺詞と脚色……………六四

藝術上の天才……………六五

文學總論 第二分冊

——古代文學に於ける宗教的背景——

### 第十三章 宗教 (一)

文學論に於いて宗教を論ずるのは多少處を得ないことのやうに思はれるかも知れないが、私共はやがて中世に於ける文學思想の發達を辿らうとするのである。アリストテレエスの「詩學」と「修辭學」を典型とする希臘の文學論はロンギノスに至つて殆んどその到達し得る限を極めた。キケロ、ホラアティウス、クキンティリアアヌス等に依つて代表せられる羅馬の文學論は大體に於いて希臘の文學論を繼承敷衍したものである。文學を、外より——即ち、普遍的、客觀的な批評の立場より考察する時、アリストテレエスは殆んど完全なものである。アリストテレエスに依つて取残された問題は後の修辭學者に依つて畧論及し盡された。若しこの上に残つてゐるものがあるとするれば、内より——即ち個人的、主觀的な創造の立場より考察する場合に於ける文學論である。ロンギノスの風格の論に於いてアリストテ

レエスの流を汲む修辭學が既に一步を内なる世界に踏み入れた事はこれ迄に述べた通りである。羅馬が瓦解すると共にこの修辭學の系統も亦からうじて形骸を保つだけのものとなり、同時に今までは思想の表面に現はれたことのない一つの勢力が殆んど不可抗の力を以て一切の思想を支配するやうになつた。この勢力を一言にして言ひ現はすとすれば宗教であると言はなければならぬ。

宗教が何であるかといふ問題は今ここに決定する必要のないことであるかも知れない。私どもが基督教と言はずに宗教と言ふ時には尠くとも希臘、小亞細亞、多島海及び埃及に行き互つてゐた古代文化の一面をも含むものである。それは食物と生命に執着する原始民族の情緒生活より生れた文化の様式であり、祭式 (ritual) に依つて表現せられることを特徴とする。情緒生活より生れたものであること、——情緒生活の投射せられたものであることに於いて宗教の起原は藝術の起原に結び付いてゐるが、そこに生れたものや投射せられたもの——神或は神靈——に對する情緒は、表現の極致——美學者の所謂「美」——に對する藝術的情緒より區別せらるべきものであるのみならず、多くの場合、正反對のものである。

宗教的情緒の特質は禁遏の情念である。原始民族の間には禁忌 (taboo) の觀念として認められてゐる所のもの、文化の發達した時代の宗教に於いては敬虔の情となつて現はれる所のものである。すべての藝術的なもの、——文學、美術、その他、感覺に依る鑑賞の具體的對象となり得る一切のもの、——を否定する觀念と情操の組織的體現が宗教であると言ふことも出来る。これに反して藝術的情緒は人間の意志の自由を肯定し、何物にも拘束せられない情意の姿を表現しようとする。原始文化に於いて宗教と藝術の提携を見ることは事實である。然しながら、イル・ヨオ・ヒルンの言つてゐるやうに、それは原始人の物質世界に對する spiritual といふよりも寧ろ animistic な概念に起因すると共に、魂とか神性を具へたものとかに對する物質的な概念にも起因する。従つて、原始藝術の根柢にある宗教的要素はこの藝術を特に宗教的なものとして發達せしめ得るほど高尚なものではない。文化の發達した時代に於ける宗教觀念は、その性質上餘りに高尚であり、又純粹に知的或は道德的であることに依り、藝術的表現に於ける感覺的要素と結合することが困難である。(c) エイチ・ジェイ・シイ・グリヤスは十七世紀の英文學に於ける思潮



交流を研究した書物の中に、文藝復興期以來の文學が、宗教改革以來の宗教、殊にカルヴィニズムやピューリタニズムに依つて局限せられたことをさまざまの事例について論證したのであるが、グリヤソンの言ふやうに、この對立は單に十七世紀に限らず、宗教と藝術が比較的良好な調和を有ちつづけてゐたやうに思はれる中世に於いてすら、この對立の根柢に横はる所のものは調和でなく、克服であり、併も極めて不安なる克服であつた。

"Now the Church in the Middle Ages had taken the arts under her wing. Sculpture, music, painting, poetry, the drama—— there is none of them that does not owe more to the Church than to any other institution, even the Court; it could hardly be otherwise in an age when the Church intellectually dominated civilization, and felt the need of responding, so far as she might, to every instinct of human nature, of compromising where she could not control. Yet it may be doubted if she was ever quite at ease and of one mind as to their place and function. At times the more consistent, puritan temper of an other-worldly religion, of early Christianity, made itself felt. The Cistercians forbade decorative churches, elaborate services, illuminated manuscripts. The counter-reformation of a later date had a

puritan aspect as well as that which was manifested in baroque art and the sentimentalities of Jesuit art and poetry and ritual. When put on her mettle, the Christian Church has always distrusted, and must always distrust the arts, for in them the free spirit of man will endeavour to express itself uncurbed and in its entirety."<sup>(1)</sup>

『さて中世に於ける教會は藝術をその翼の下に受容れた。彫刻、音楽、繪畫、詩、戯曲——その一つとして如何なる他の制定機關、宮廷と雖、尙、それよりも教會に負うてゐないものはない。教會が知的に文明を支配し、その能ふ限り、人性のあらゆる本能に應へ、その制御することの出来ない所では妥協することの必要を感じた時代にはそれより以外の状態には到底なり得なかつたのである。併しながら、教會が藝術の占める位置と任務について全く安心し、一致してゐたかどうかといふことは疑ふことが出来る。時時、或超現世的な宗教の、初代基督教の、もつと堅實な、清教的な氣質が感ぜられた。シスタアシャン教派(シットオ教團)は裝飾的な教會堂と精巧な勤行と彩飾した寫本を禁じた。それより後に現はれた反對改革(新教徒に對する舊教徒の反對的運動)は、バロック美術とジェジュイット美術の感傷癖と詩と儀禮に現はされたものと共に、或清教的な一面を有つてゐた。一旦奮起する時、基督教會は常に藝術を疑つたのであり、又、常に疑はなければならぬのである。何となれば、藝術に於いて

人間の自由なる精神は拘束せられない、完全な状態のままにそれ自らを表現しようと努力するからである。』

このやうに、藝術が宗教に依つて局限せられることは殆んど疑を容れない。然しながら、又一方より考へると、その結果として生ずる藝術的情緒の内容は必しも藝術にとつて致命的なものであるといふことは出来ないものである。藝術が自由なる精神の自由なる表現を目的とする事は眞理であるとしても、表現せられ得る爲には何等かの局限が加へられなければならない。精神が精神として表現せられることは到底不可能である。精神は肉體に局限せられてゐる。そのやうに、藝術的情緒を局限する所のものが宗教である時には、そのやうな局限が加へられない時とは違つた藝術的内容に合致する所の藝術的表現が結果せられる。『或嚴格な宗教が人心を支配する所では、それは藝術的生活を窒息せしめるか、尠くとも致命的に之を局限する傾向がある。』“where a stern religion maintains its hold over the mind, it easily tends to stifle, or at least seriously to limit, aesthetic life.” (a) とし、ホルマンの斷

定は、それ故に、宗教の立場より考へた時には確かに一面の眞理であるが、藝術の立場より言へば尙考察の餘地を残してゐる。藝術的生活は宗教に依つて局限せられるけれども、窒息したり、致命的な傷手を負ふたりするとは限らない。寧ろ局限を加へられることに依り、その内容は一層深刻なものとなり、その表現は更に複雑なものとなる。例へば中世神學の局限の下に生れたダンテの「神曲」[*La Divina Commedia*] とビュウリタニズムの局限の下に生れたミルトンの「失樂園」[*Paradise Lost*] とはその著しい實例である。

“The definite antagonism of the sensuous and the spiritual world—the latter being regarded as something more and other than an intelligible system or better understanding of phenomena—meant the disintegration of ancient thought, and the genesis of what on the great scale of world-history may fairly be called the modern mind.” (a)

「感覺の世界と精神の世界——後者は明解し得る體系とか現象の十分な理解とかいふよりも以上のものであり、それとは又別のものであると考へられてゐる——との確定的な對

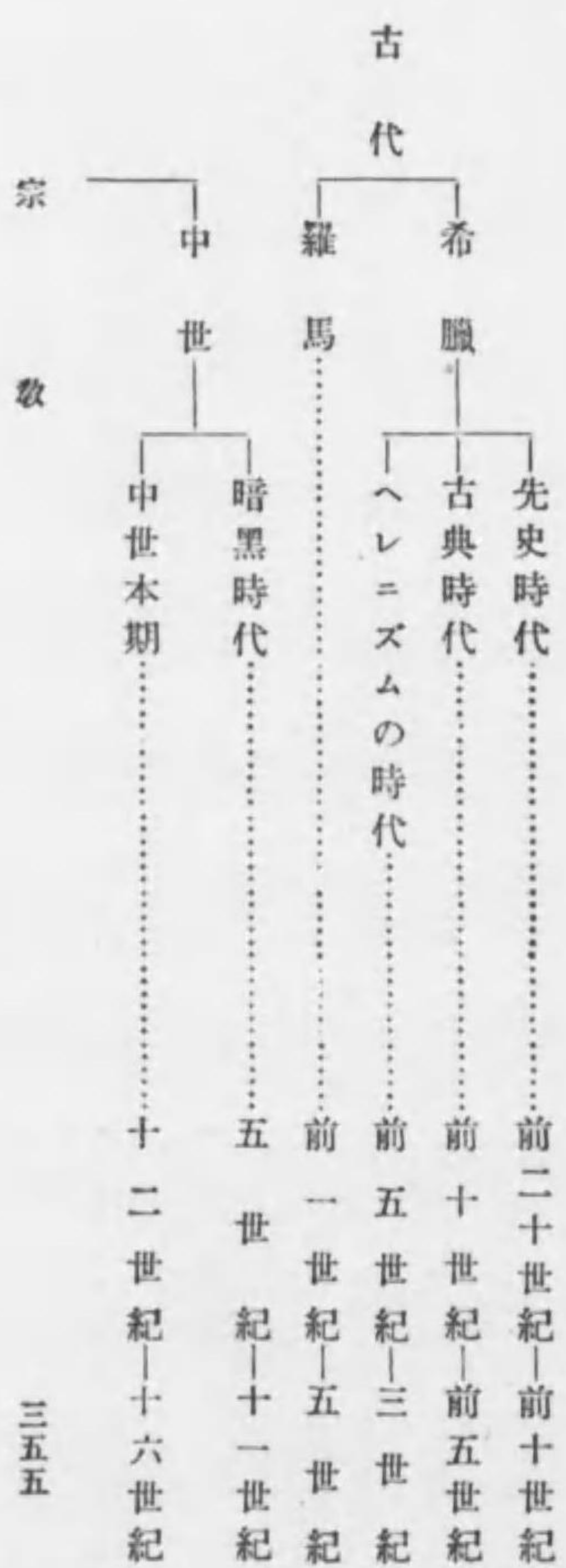
抗は、古代思想の崩壊と、大規模の世界史に於いて立派に近代心と稱へ得るものの發生を意味した。」

と、バアナード・ボウサンクエットがその「美學史」(A History of Aesthetic)の中に述べてゐるやうに、世界思想史に於ける中世はやがて近代の第一期と考へ得べき理由がある。廣く、古代に對して近代と言ふ時には尠くとも文藝復興期以後の時代を含むのであるが、文藝復興期は又或意味に於いて中世に對する反動であると共に、更に重大な意味に於いて中世の繼承である。中世と文藝復興期の關係は古代と中世の關係よりも密接であり、文藝復興期と近世の關係はそれよりも更に密接である。その密接な關係を保たしめてゐるものは何であるかと言へばそれは一切の思索に於ける精神的要素——中世に於いては宗教に依つて殆んど絶對無限の支配を受けた所のもの——である。

附記

歴史上の用語は明瞭であることを必要とする。例へば近代と近世といふやうな言葉は

屢同じ意義に用ゐられてゐるが、この書物の中ではそれを明かに區別したいと思ふ。すなはち、先づ第一に古代と近代とを分ち、更に近代を中世と近世とに區分する。文藝復興期はその間に介在する。「その解釋は如何に曖昧であるにせよ、中世は、當初明確に古代文明と近代文明の間にある時代を意味したものであつた。」(The Middle Age, however lax the interpretation might be, distinctly meant at first the time between ancient and modern civilization.) (ケヤの言つてゐるやうに「中世」The Middle Age)といふ言葉は古代と近代の間にある時代といふ意味より出たものであらう。唯、私は本文の中に述べたやうな解釋に依り、名義はとにかく、事實に於いて近代の第一期であると考へる。次に表示する通である。



近代—文藝復興期……………十四世紀—十七世紀  
 近世……………十七世紀—現代

文藝復興期に於ける人心の解放は宗教の規範より個人の意志を擺脫することを得せしめたけれども宗教に依つて加へられた局限は永くその痕迹をとどめた。近世に入り、啓蒙思想の普及と科學の進歩は、一面に於いて理性の獨立を確保し、物質文明の全盛期を開發したのであるが、ロマンティシズムの文學と哲學は精神文化に於いて中世以來の諸問題を追求して來た。そののみならず、羅馬加特力教會の力が衰へた近世の社會にも、尙、其文明の背後に嚴然たる宗教的傳統が意識せられてゐることは直ちに認め得る所の事實であらう。「ファウスト」「Faust」と共に「神曲」を考へるのは必しも謂れなきわざであるとは思はれない。

“Alles Vergänglichhe  
 Ist nur ein Gleichnis;

Das Unzulängliche,  
 Hier wird's Ereignis;  
 Das Unbeschreibliche,  
 Hier ist's getan;  
 Das Ewig-Weibliche  
 Zieht uns hinan.” (K)

『一切の無常なるものは  
 只影像たるに過ぎず。  
 曾て及ばざりしもの、  
 ここには既に行はれたり。  
 名狀すべからざるもの、  
 ここには既に遂げられたり。  
 永遠に女性なるもの』

われらを引いて行かむ。』<sup>(3)</sup>

——森鷗外博士譯

カアル・フォッスラフはその著「中世文化」(Medieval Culture)の第一章にこの一節を引用した後、『グレットヘンとビートルスは手を握る。兩者に於いてわれわれを捉へ、われわれを星にまで高める所のものは愛しみ深き献身、純潔なる女らしさである。』(Gretchen and Beatrice clasp hands. In both it is loving self-devotion, pure womanliness, which grips us and uplifts us to the stars.)<sup>(4)</sup>と言つてゐる。『然しながら、唯この窮極的な、又象徴的な意義に於いてのみ二人の女性は一致する。他のところでは彼等の途は遠く離れてゐる。』(But only in this final and symbolic significance do the two women meet. Elsewhere their ways run wide apart.)<sup>(5)</sup>といふフォッスラフの但し書きは常に注意しなければならぬ。それと共に彼の所謂『窮極的な又象徴的な意義に於いて』(『内面的な血族關係』(the inner kinship)にまで結合せられてゐるのは、グレットヘンとビートルスにばかりではなく、中世以後、文藝復興期と近世を通じての女性

に於いて絶えず認め得ることである。「アダム・ベイト」(Adam Beite)に於けるダイナ・モリスにせよ、「サイラス・マアナ」(Sylas Marna)に於ける拾ひ兒のエビーにせよ、ジョージ・エリオットの小説に描かれた女性はいづれもこの『血族關係』を示してゐる。ビバのうた、

“God's in His heaven—

All's right with the world!”<sup>(6)</sup>

『神そらにしろしめす、

すべて世は事もなし。』<sup>(7)</sup>

——上田敏博士譯

にしても、ジェイムズ・リーの妻の獨白に、

“Make the low nature better by your throes!”

Give earth yourself, go up for gain above.” (411)

『思の痛み、苦みに卑しきこころ清めたる』

なれ自らを地に捧げ、酬は高き天あまに求めよ。』 (413)

——上田敏博士譯

とある一節にしても、ブラウニングに於ける愛と忍従の思想は中世以後のものである。エエ・エム・ド・ザギューはエリオットの小説を讀へて「聖書のやうに美しいものであると言ひ、ダイナ・モリスがリスベスを訪ねるところは「路得記」『The Book of Ruth』を書いた人の手に成つたと言つても然るべきものであると言つてゐるが、このやうな比較を許し得るといふことからして、基督教と近世文學との間に存在する密接な關係を暗示する。<sup>(412)</sup>それはやがて文學に於ける中世と近世の關係であるといふことが出来るであらう。

古代文學——この場合には特に紀元前五世紀の希臘の悲劇——に描かれた女性は、中世以後の女性に對する著しい對照を與へる。Eichoyia——“stoutheartedness, pluck in the noblest sense of the word”<sup>(414)</sup>——はその性格の根幹を成すものであり、一度敢然として立つた時には流石の英雄達でも屢顔色を失つた位のものである。メエデイアはその二人の子供を自ら戮殺して夫の變心に報いる。クリュタイムネエストラは女のイフイゲネイアを生贄にしたことに對する復讐として、事後十年の時を待ち、夫がトロイアより歸つた時、これも自ら手を下して慘殺する。アンティゴネエのポリュネイケエスに於ける、エレクトラのオレステエスに對する、姉としての愛は確かに女らしい一面を有つてゐるけれども、その性格の一面には男を凌ぐ程の英雄しさを具へてゐた。エイイイ・ヘイグがソフォクレエスの戯曲を論じた一節は私がここに述べてゐることの一つの典據とも看做し得るであらう。

“His leading characters are mostly of a strong and forceful type, vehement in passion, and immovable in courage, like those of Aeschylus; but with a softer side to their character, which brings

them nearer to the human level. Conspicuous in this class are the heroic maidens, Electra and Antigone. Stern devotion to duty is the basis of their character. Where conscience and justice are concerned, they are firm and unshaken as a rock. Electra shows no traces of compunction, even when her mother is being slain, but bids Orestes 'strike again'; she would 'throw the body of Aegisthus to the dogs, the only burial he deserves.' Both of them, too, are easily roused to indignation, have no tolerance for natures weaker than themselves, and pour unmerited scorn and contempt on their more timid sisters. But they are capable of tenderness no less profound. It was Electra who tended Orestes when he was a babe 'with sweet labour' even as a mother; and it is Antigone whose nature is 'to love rather than to hate', and who gladly sacrifices her life for the sake of her brother. (44)

『彼の主要な人物は、イスキラスのそのやうに、大抵強い烈しい型に屬するもので、感情は激烈、勇氣は牢乎として動かないものであるが、その性格には優しい一面があり、それがイスキラスの人物よりも人間の標準に近いものとしてゐる。この類の中、著しいものはあの英雄的な處女、エレクトラとアンティゴネである。義務に對する峻嚴な献身は彼等の性格の基礎を成してゐる。良心と正義の關係する所では、彼等は嚴のやうに確乎不拔である。エレクトラは其母が斬殺せられてゐる時にすら悔恨の色を示さず、『もう一度刺せ』と

オレスティイズに命ずる。彼女はイジサスの死骸を犬に投じ、その値する唯一の葬に付せしめようとする。彼等は共にたやすく憤慨の情を興し、彼等自身よりも弱い性質のものを容赦せず、その臆病な妹たちの上に不當な侮辱と輕蔑を浴せかける。然しながら彼等はこれに劣らず深い優しい心をも有つことが出来る。オレスティイズが赤兒であつた時、母のやうな楽しい勞苦をもつていたのはつたのはエレクトラである。その性質は、憎むよりも愛するものであり、又喜んで弟のためにその命を捧げたものはアンティゴネである。』

希臘文學に現はれた女性が中世以後の女性に最も接近した時には、いつもこの「母のやうな」或は「姉としての」性格の現はれを見る。そこには希臘民族の中に發達した宗教思想が反映せられてゐるやうに思はれるのであるが、この問題については後に考察する。希臘文化が絶頂に達した時代、即ち紀元前五世紀の文學或は美術に描かれてゐる女性の特徴は何であるかと言へば、その男性的な一面に依つて現はされたものであると答へざるを得ない。『最高の發達を遂げた時の希臘の命と美は本質的に男性的、又活動的なものであつた。シニレエが歌つたやうなブラクシテレエ風の姿態は衰頹期のものである。』(The life and beauty of Greece at their

highest development were essentially masculine and active; those Praxitelean shapes of which Shelley sang belong to the period of falling strength." (註)といふジイ・エム・サアジェントの言葉は、エレクトトラやアンテイ・ゴネエのことを考へる場合にも首肯し得べきものであらう。

中世以來の女性と希臘盛期の女性とは古代文化と近代文化に於ける精神的要素の相違の點を闡明する所の一つの秘鑰である。「女は女である」と言つて了へばそれまでのことで、希臘であらうが、中世であらうが、女に變つたことはない。ジョン・ア・ディントン・シモンズやジュイ・ダブルユウ・マッケイルに依つて詳細に論ぜられてゐるホメエロスの女性を殊更に論じないのは、「イリアス」「オデラセイア」に描かれた女性がキルケエ、カリユブソオのやうに、ホメエロス以前、アテナイに集中せられた希臘文化の興隆以前の文化の痕迹をとどめてゐるものであるか、或はア・ンドロマケエ、ベエネロベエのやうに、あらゆる時代に共通な女性の典型を示したものであつたからである。トロイアのヘレエナに至つては女性といふよりも、女神アフロディテエのやうに、女性に於ける性的魅力を抽出して理想化したもので

あり、その意味に於いて一つの普遍的な存在である。ヘレエナは人間を超越してゐる。従つて、希臘をも超越してゐる。ヘレエナに於いて希臘的なものは希臘の人間といふよりも寧ろ希臘の神に屬する。それ故に、若し希臘盛期の女性に於ける理想的な姿を求めるとすれば、私どもはやはりアンテイ・ゴネエやエレクトトラを數へなければならぬ。そこには、ギョエテの謂ふ「永遠に女性的なもの」を發見しない。「オデラセイア」に於いて垣間見るノオシカアの可憐な姿をソフォクレエスやエウリピデエスの戯曲の中に發見することは出來ないのである。何故であらう。私どもはそこに宗教の影響を認める。希臘の宗教と中世の宗教がそれぞれ藝術的情緒を局限した結果、一方にはアンテイ・ゴネエを生じ、一方にはベアトリイツエを生じたのであると思ふ。兩者の相違は宗教の相違である。アンテイ・ゴネエに於ける男性的要素はアテナイの市の宗教であつたオリュムポス諸神を祀る宗教、殊にヅエウスとバルラス・アテナイに歸依する宗教に由來するところのものであり、ベアトリイツエに於ける女性的要素は基督と聖母瑪利亞に歸依する中世の基督教に影響せられたものである。希臘の宗教に女性的なものが



存在しなかつたかと言へば、それは確かに存在してゐた。唯その女性的なものはオリュムポスの神に依つて壓倒せられ、その宗教圏外に放逐せられ、或は片隅に押し込められてゐたのである。紀元前五世紀以後、オリュムポスの神が力を失ひ、その神性が論議せられるやうになると共に、これらの敗残者は再び力を得て終には基督教に於ける女性的なものに合致するやうになつた。中世の基督教はこの意味に於ける多くの希臘的なものを含んでゐる。然しながら、それは希臘盛期に於けるオリュムポス諸神の宗教には反對なものであり、アテネナイの文化の表面には現はれなかつた所のものである。古代文化が希臘文化であり、希臘文化がアテネナイの文化であるとすれば、私どもは結局この一方の宗教的要素を考察することなしに古代に於けるあらゆる思想潮流を論じ得ることになるであらう。羅馬頽廢期より中世に入らうとして、卒然、私どもの眼前に現はれる一つの勢力が宗教であり、その宗教は基督教と稱へられてゐるけれども、その實、希臘思想の他の一面に結び付いてゐることを發見する時、私どもはもう一度古に溯つてその一面がどのやうな發達を遂げたものであるかといふことを研究することの必要を感ず

る。それには先づ一般に謂ふ所の希臘神話を精査することに依り、その宗教的意義を明白にすることが捷徑であらう。

一般に知られてゐる希臘の宗教は希臘多神教である。希臘の詩人たち、殊にホメロスに依つて想像せられたこの宗教の神話體系が如何に美はしく、又朗らかなものであつたかといふ事は今更事新しく論ずる迄もない事であらう。紀元前五世紀の文學と美術は尙その上に光輝ある表現を與へた。フェイディアスが黄金と象牙を用ゐて完成したと傳へられるオリュムピアのゼウスはこの神の原始觀念である天空を當時の藝術に依つて具象化したものであると言はれてゐる。見上げるばかりの巨像はやがて無邊際の際蒼穹を暗示したであらう。慈顔温容さながらに日ざし遍き晴天の微笑を傳へると共に、眉宇のあたり、森嚴の氣の漂ふ所には倏忽にして雷霆轟き驟雨天軸を傾ける時の天空の威力をも偲ばしめたであらう。アイスキュロスとソフォクレスの悲劇に現はれた宗教も亦オリュムポスの神を信仰の對象とするものであるが、アテネナイの宗教となつてより後

は女神アテエナが次第に重大な地位を占めて来る。それと共に倫理的考察或は神學的考察が深められて、あのオイディプスを中心とするラプダゴスの一門とアガメムノオンを中心とするアトレウスの一門の運命につきまといふ *divine justice* (divine justice) を反映するものとなり、又一方には藝術的表現の價値が次第に自覺せられて、オリュムボスの神神ですら、信仰のためといふよりも寧ろ藝術上の目的のために用ゐられるやうになつた。この傾向はエウリピデエスや喜劇詩人アリストファネスになる、更にオリュムボスの神神に對する批判と、批判の批判を含むやうになる。哲學も亦、宗教思想の發達に伴つてさまざまに制限せられた。パルメニデエス、ピュタゴラス、ヘエラクレイトスなどの後、希臘の宗教はプラトオンとアリステレエスに依つて大成せられた哲學の中を潛り、エビクウロスの學派とストア學派の頃になると、やうやく多神教より一神教に近づき、後の基督教に合流する多くの思想的要素が認められる。希臘の宗教神話には本來このやうな思想の發達を起因するやうなものが含まれてゐたのであるか。或はその他に原因があつたのであるか。

オリュムボスの神神はオリュムボスの山の巔に住む。『風に依つて撼かされず、雨に濡れることもなく、雪もそこには近付かず、いと清き大氣は雲もなくそのほとりに廣がり、白き光その上に漾ふ。』*Not by winds is it shaken, nor ever wet with rain, nor doth the snow come nigh thereto, but most clear air is spread about it cloudless, and the white light floats over it.* (45) と「オデッセイア」の中に描かれてゐるオリュムボスは「イリアス」の中に屢言及せられてゐる『雪を頂くオリュムボス』(*Olympos áyváwqon, "snow-clad Olympus"*)や深い雲の中にとざされたオリュムボスとは趣を異にしてゐるが、彼はテッサリアにある實在の山を描いたものであり、此は天上遙かなる處に想像せられた理想の住家である。「イリアス」と「オデッセイア」の間にすら、これだけの相違があることは注意すべき點である。更に注意すべきことはオリュムボスの神神がすべて天上にその宮を有つてゐるといふ事、ポセイドオンやハイデエスでも時には天上の神集ひに加はり、そこに滞在したといふ事である。オリュムボスは天に屬する——その神神も亦天の神神である。オリュムボス諸神の事蹟はすべて明瞭であり、或場合には餘りに明瞭であることに依つて神神とは思へない——寧ろ

人間に近いものであるやうに思はれる。その人間といふのも、自ら解し難いさまざまの恐怖或は苦惱に迫め虐められてゐる人間の方には遠くて、それよりも明瞭な理知によつて統一せられ、行動敏速にすべてを取りさばく萬物の靈長としての人間に近いものである。

然しながら、希臘の神神はこれらの明るく朗らかな神神に盡きてゐるのではなく、よく調べて見ると、この外にもまだ無數の暗い、寂しい神神や精靈の存在することを發見する。ホメエロスの描いた神神の中でもその前に存在してゐたといふタイタネス (Titans) のことになる。と決して明瞭な存在であるとは言へない。創世の始にウウラノス〔天〕とゲエ〔地〕があり、その間に生れたのがクロノスとレアを頭に仰ぐタイタネスの族であり、クロノスの子がゼウスとヘラに統率せられるが、ゼウスとヘラはオリュムボスの神神であつたといふ事は一般に希臘神話の傳へる所であるが、タイタアン或はタイタネスといふ言葉の意味からして實は明瞭には分つてゐないのである。——[“the Titans, a word of uncertain meaning.”] “ヘイチ・ジェイ・ロウズは言つてゐる。(七巻)——天と地より生れたものであるといふことに至つては一層朦

朧として捕捉することが出来ない。オリュムボスの神神がクロノスとレアより生れたといふことはヘシオドスの「神統記」(Theogony) に由來する説であるが「イリアス」第十四卷、二〇一行以下にはオオケアノスとテエテュスが神神の親とせられてゐる。彼等の形態は又更に茫漠たるものである。イヤベトスやテュフォオンは唯徒らに膂力暴力のあるものであつたことが分るばかりで、その外には何等特徴とすべきものを想像することが出来ない。ヘカトンケイロスには百臂の巨人、キユククロオプスは一つ目の巨人で、共に腕力拔群の怪物。これらのタイタネスはいづれも皆、暗い、悲しい運命に付き纏はれてゐた。いつの世よりも知れぬ暗やみの世界の中に盲目的に荒れ狂ふた後、オリュムボスの神神に依つて奈落の底に蹴り落されたのである。ペエリオンをオプサの上に積み重ねてオリュムボスを攀ち登り、再度の戦を試みたけれどもゼウスの雷電にうち拉がれて永遠に葬られて了つた。タイタネスは斯うして再興の望を失つたのであるが、オリュムボスの神神の支配する世界の中にすらこの寂しい仲間の中から生き残つたやうに思はれる無數の奇怪な姿のあることを發見する。その中にはアルカディアの牧

神であつたバアンやデイオニウソスのぐるりをとりかこむサテュロイ、セイレエノイなどのやうに、顔だけは人間でも脚は羊か山羊の脚を有つたものもあり、又ケンタウロイと言つて胸から上は人間、胴體と脚は馬の姿になつてゐるものもある。メドゥウサの髪は蛇であり、ハルピュイアイ、セイレエネスは人面鳥身、トリトオンは人面魚身、その上に馬の脚を有つてゐる。ミノタウロスは牛首人身の妖怪である。これらの怪物はそもそも何を意味するものであらう。その暗い、宿命的な約束はサテュロイ、セイレエノイのやうに歡樂の神につき纏ふものの場合にすら免れ難いものである。彼等の歡笑はオリュムポスの神神のそれのやうに朗らかなものではない。シュウリンクスを抱きとめたと思つたのはつかの間の夢、手に捉へたのは江の蘆、その蘆を吹くパンのうたのやうに、求めて求め難い何物かを絶えず追求しながら、酒と亂舞と哄笑の中にその思をまぎらせてゐるのである。ベルセウスに殺されたメドゥウサ、テエセウスに平げられたミノタウロス等の事を考へると、彼等がオリュムポスの神神の世に生き残つたのは、神神に依つて保護せられてゐるこれらの英雄に功名を成さしめるためであつたやうにも思はれる。

何と考へても彼等はオリュムポスの神神と同族のものであるとは思はれない。オリュムポスの神神よりも前に存在してゐたものか、オリュムポスの神神を中心とするものとは多少異つた宗教に屬するものが偶その間にまぎれ込んだのであらうとは誰の心にも浮ぶことであるが、さてその宗教がどのやうなものであつたかといふ事になると、明瞭な解答を與へることは困難である。サロモン・レイナックなどはその中に山神地靈を祀るアニミズムの殘存したものや一定の動物或は植物を祖先として禮拜するトオテミズムの痕迹をとどめたもの、又、フレイザーなどの謂ふ模倣的魔術(Imitative Magic)の形を傳へたものがあると言つてゐる。これらは希臘に限らず殆んどすべての民族が共通に有つてゐた原始宗教の様式である。オリュムポスの神神でも多くはこれらの原始宗教より發達したと思はれるのであるが、それ以外の神神や精靈は尙更のこと、この古い様式の名残をとどめてゐるに相違ない。唯、この場合の原始宗教が原始的であるといふのは比較的に言つたまでのことで、オリュムポス諸神の宗教の存在する以前、原始人の宗教に近いものがあつたことは事實であるけれども、その頃の小亞細亞或は多島海の文

明は決して野蠻未開の状態にあつたのではなく、建築や工藝美術に於いてはアテ、エナイの盛時にも優るものを有つてゐた。従つてレイナックのやうにアニミズムである、トオラムである、と一一明瞭に断定することも出来ないのである。

"Whence the gods severally sprang, whether or no they had all existed from eternity, what forms they bore — these are questions of which the Greeks knew nothing until the other day, so to speak. For Homer and Hesiod were the first to compose Theogonies, and give the gods their epithets, to allot them their several offices and occupations, and describe their forms; and they lived but four hundred years before my time, as I believe." (11+1)

「神神が各何處から生れ出でたものであるか、彼等は永遠の昔より存在してゐたものか否か、如何なる形を彼等は有つてゐたか——これらは希臘人が言はば、つひ先頃まで殆んど何も知らなかつた問題である。何となればホウマアとヘシオッドは神統記を編み、神神に名稱を與へ、又各の任務と職掌を定め、又彼等の形態を描いた最初の者であつた。併も、この二人は私の時代に先んずること四百年に過ぎない頃に生存してゐた者であると信ずる。」

と、ヘロドトスはその歴史の第二卷に言つてゐる。これに依つて見ると、ヘロドトスは尠くともその希臘の宗教に關する知識に於いてはホメエロスより以前に溯ることが出来なかつたのである。ヘロドトスは紀元前四九〇—四八〇年の頃に生れ、四二四年に世を去つたと傳へられてゐる。それから四百年前と言へば畧八世紀の頃にホメエロス、ヘシオドスは存生であつたと思つてゐたのであらう。今日の學說でも十世紀と七世紀の間になつて居り、ホメエロスはヘシオドスより一世紀乃至半世紀前に存生であつたと考へられてゐるから、大して推定を誤つてゐたとも思はれない。唯、ホメエロス、ヘシオドスに依つて傳へられた神神の外に神神が存在しなかつたやうに記してゐることは注意すべきである。それはあだかも日本の神代のことを記述する者が「古事記」と「日本書紀」に記されてゐる神神の外に神神は無かつたと言ふのと同じやうな心もちであらう。ホメエロス以前にも神神があり、ホメエロスの神神と雖その前に存在してゐたものの痕迹をとどめてゐることを明瞭に證明したのは、一八七〇年より一八九一年までの間にハインリッヒ・シュライマンとギルヘルム・ド・エルブフェルトがヒッサリククの

舊址とミュケエナイ、ティリュンスの瑩域より發掘した遺物や遺跡について論證した所のもの、及びアアサ・ジョン・エヴァンズが一八九三年以降一九〇〇年までの間にクレエテエより發掘した古文明の遺跡に依つて明白にせられたものである。これに依つて私どもはホメエロス以前にミュケエナイを中心とする文明(Mycenaean Civilization)があり、それよりも更に溯つてクレエテエを中心とする文明(Minoan Civilization)があつたことを知つた。クレエテエ文明の初期(Early Minoan Age)は紀元前二千年代の中頃で、埃及の初代王統の時代に當り、その頃から既にナイル峽谷とクレエテエとの間には交通が行はれたやうである。クレエテエ文明が完成の域に達したと言はれてゐる中期(Middle Minoan Age)は畧二〇〇〇年より一八五〇年迄の間で、埃及では有名な第十二代の王統の時代であつた。クレエテエ文明の最後の時代(Late Minoan Age)は埃及に於けるヒクソスの時代と新帝國の時代の初期に一致する。中期の文明は希臘にも影響を與へ、その後引續いて希臘とクレエテエとの間に交渉があつたことは一八七六年シュライマンがミュケエナイとティリュンスより發掘したさまざまな遺物に依つて知ることが出来る。即ち、一般に

ミュケエナイの文明と稱へられてゐるものは二〇〇〇年以後希臘のアルゴリスに榮えたクレエテエ文明の分派であり、一一〇〇年、クレエテエの方はまだその文明の絶頂にあつた頃、新に北方より移住して來たドリア族に依つて後を斷られたものである。ドリア族の移住する前にアルゴリスに住んでゐた民族はアカイア族であり、アカイア族は又ベラスゴイと稱へる原住民族を驅逐してそのあとになほつたものである。

「イリアス」に於ける希臘人はアカイア人(Achaiwoi)といふ總稱の下に知られてゐる。アカイア族がドリア族の移住までミュケエナイに住んでゐた民族であるとすれば、その文明はミュケエナイの文明であり、アガメムノオンの代表するペロップスの王統も亦これに關係があると思はれるであらう。シュライマンはミュケエナイの文明の時代とホメエロスの時代とを同一のものであると考へ、ミュケエナイより發掘せられた堅穴の墓の中にアガメムノオンとカッサンドラの墓があると斷定した。これほど適確な一致を認めないまでも、ホメエロスの詩の中にミュケエナイの文明を偲ばせる器物、美術品——例へば「イリアス」第十八卷に出でゐる「ア

キルレウスの盾——のあること、又「オデラセイア」第四卷に於いてテレマコスとメネラオスが會見する時の居室の状態がテイリュونسで發掘せられた建築の様式に一致することなどに依り、兩者の間に多少の關係があるといふことは何人も疑を容れない所であらう。それにも係はらず、ホメエロスのアカイア人を以て直ちにミュケエナイ文明の時代にアルゴリスに住んでゐた希臘人であると考へるのには早計である。私どもは共通な點と共に相違する點をも考へなければならぬ。希臘には殆んど産出しない黄金がホメエロスの詩の中に屢現はれることは事實であるが、ミュケエナイ文明の時代には全く知られてゐない鐵がそれよりも屢言及せられてゐる。「クレエテエとミュケエナイに於いて武器などを作る爲に用ゐられた金屬は主として青銅であり、ミュケエナイでは夥しい黄金の器物が發掘せられた。「イリアス」第七卷、一八〇行]には「黄金に富むミュケエナイの王」*βασιλεύς πολυχρῶτος Μυκηναίων*”といふ句が發見せられる。「アキルレウスの盾」は左右を囲ませた楕圓形に近いもので、8字形と稱へられてゐるクレエテエのものであると考へることが出来るけれども、その他の場合にホメエロスの詩の中に言及せられてゐる

る盾は圓いものであり、又、ミュケエナイの武人は麻の戦衣を着てゐるのに對してホメエロスのそれは金屬製の甲冑を着てゐる。戦車も亦様式と構造を異にしてゐる。ミュケエナイの葬式はすべて土葬であり、ホメエロスでは主として火葬になつてゐる。最も相違してゐるのは、今私どもが直接に問題としてゐる兩者の宗教であるが、このことは後に考察する。とにかく、これらの相違の點を仔細に研究した結果、キリヤム、リッヂエイはミュケエナイに後期ミュウケナイがあり、アカイア族に前期アカイア族のあることを唱へ、それに依つてホメエロスのアカイア族とミュケエナイ文明の時代のアカイア族を區別しようとして試みた。在來の説に従へば、ホメエロスのアカイア族は即ちミュケエナイ文明の繼承者であるが、リッヂエイに依ればそれは全く異つた民族である所のケルト民族の一つの分派であり、ミュケエナイ文明の晩年に北方より移動してアルゴリスに定住するやうになつたものである。ホメエロスの詩にミュケエナイ文明を反映するものがあるのは、アカイア族の定住以後にも、その前に存在してゐたベラスゴイのミュケエナイ文明が尙その痕迹をとどめてゐたからである。C. F. D.

私は今ここにリッヂエイの説を検討しようとは思はない。私どもが當面の問題とする所の希臘神話について言へば、それがアカイア族の宗教思想に基いて形成せられたものであり、簡單にホメエロスの宗教と稱へ得るものである事はリッヂエイに依つて明白にせられた。然しながらリッヂエイの所謂アカイア族が南下してアルゴリスに定住するに及び、その宗教は既に存在してゐたミュケエナイの宗教の上に重つた。ここに希臘の宗教を構成する二つの重大な要素がある。私どもは先づミュケエナイの宗教、又その本來の姿であるクレエテエの宗教がどのやうなものであつたかといふことを明らかにした上、次に、ホメエロスに依つて傳へられたヘルレエネスの宗教、即ちオリュムボスの神を信仰の對象とするものが之と異なる所を考へ、更に又、兩者の交渉、及び希臘の精神文化に及ぼしたこの二つの勢力の消長に就いて考察を進めたいと思ふ。希臘多神教の宗教的意義はその上で決定せらるべきである。

## 附記

- 一 Yrjö Hirn, 'The Sacred Shrine', chap. I ('Catholic Art'), p. 5.
- 二 H. J. C. Grierson, 'Cross Currents in English Literature of the XVIIIth Century', chap. I ('Re-naissance and Reformation'), pp. 18—19.
- 三 Yrjö Hirn, op. cit., loc. cit. p. 4.
- 四 Bernard Bosanquet, 'A History of Aesthetic', chap. V, 118—119.
- 五 W. P. Ker, 'The Dark Ages', chap. I, p. 1.
- 六 Goethe, 'Faust', Zweiter Teil, 最後の八行。
- 七 鷗外全集[初版]第十卷。八五二—八五三頁。
- 八 Karl Vossler, 'Medieval Culture' [English translation of 'Die Göttliche Komödie'], vol. I, p. 3.
- 九 Ibid., loc. cit.
- 十 Robert Browning, 'Pippa Passes', I.
- 十一 上田敏著[海潮音]。「上田敏全集」第一卷。一三四頁。
- 十二 Robert Browning, 'James Lee's Wife', VII, [in 'Dramatis Personae']。
- 十三 上田敏著[海潮音]。「上田敏全集」第一卷。一三三頁。
- 十四 Cf. Le Vicomte E.-M. de Vogüé, 'The Russian Novel', [English translation of 'Le Roman russe']。



'Le Pages choisi' ['Le Realisme en Angleterre et en Russie'], pp. 183—184.

十五 J. A. Symonds, 'Greek Poets', chap. XIV ['Greek Tragedy and Euripides'].

十六 A. E. Haigh, 'The Tragic Drama of Greeks', chap. III ['Sophocles'], pp. 158—159.

十七 G. M. Sargeant, 'Classical Studies' ['Faust and Helen of Troy'], p. 69.

十八 'The Odyssey of Homer', translated by S. H. Butcher and A. Lang, p. 93.

['The Odyssey', bk. XXIV, ll. 525—526.]

十九 H. J. Rose, 'A Handbook of Greek Mythology', p. 21.

二十 Salomon Reinach, 'Orpheus', chap. III.

二十一 'The History of Herodotus', bk. II, chap. 53. English translation by George Rawlinson.

二十二 Cf. Sir William Ridgeway, 'The Early Age of Greece', vol. I, chap. III, pp. 682—684.

## 第十四章 宗教 (二)

エブズに依つて發掘せられた遺物の中にはクレテエの宗教を例證するものが尠くない。その中、宗教的に見て最も重大なもの、即ち、宗教の中心にあるものより考へて行くと、先づ第一にクノッソスの王宮より發掘せられた印形入指輪(指輪 net ring)の圖様——粘土に捺印したもの——を數へなければならぬ。その真中に嶺高く聳ゆる山があり、絶頂には、クレテエの女の着る裾飾のある袴をつけ、上半身は、これもクレテエの風俗であるが、裸體のままの一人の女神、髪を吹きなびかせながら、傲然として右向に立つてゐる。足もとには二頭の犂猛な獅子が、さながら紋章の圖様に見る如く、左右に立つてこれを衛つてゐる。女神の左の手は、すと前にさし伸べ、笏か槍かと思はれるものを持つてゐる。背後にはミュケエナイ型と稱られてゐる、奇體な圓柱と牛角より轉化した裝飾のある建築物がある。之

はこの女神の宮である。前には一人の信徒が、女神の威に打たれ、恍惚として立つてゐる……〔挿畫参照〕。この圖様は「神神の母」*'Mother of the Gods'*、或は「野に生ふるもの



瓶の上にも描かれてゐる。

ジェイン・ハリソンはその著「希臘宗教研究序説」(*Prolegomena to the Study of Greek Religion*, pp. 264-265)の中に「刻畫と彩畫のものを例示し

てゐるが、いづれも中央に手をさし伸ばした女神、その兩側には紋章風に列んだ獅子があり、その上「鹿」「刻畫」「孔雀」「牡牛」「魚」「彩畫」等にとりまかれてゐる。ミュケエナイではこの女神の姿が一基の柱に依つて現はされてゐるけれども、護衛の獅子は尙その姿をとどめてゐる。ミュケエナイの西北の隅に立つてゐる獅子門(Lion Gate)は冠木の上の巨きな三角形の浮彫に依つてそのやうに稱へられてゐるのであるが、この浮彫の圖様には、やはり二頭の獅子が左右から向き合つて各その前脚を低い祭壇のやうなものの上に載せて居り、壇の上には柱が立つてゐる。柱に依つて神を現はすことは原始時代より傳へられた遺風で、一種の咒物崇拜(Fetichism)であるが、日本でも神神を數へる時に幾柱と言つたことは周知の事實である。この場合、柱の方が女神の姿よりも原始的なものであつたといふことは出来ない。エル・アル・ファアネルの言つてゐるやうに、この宗教の社の祭式は多分神像を用ゐないもので、女神の姿は他の目的の爲には用ゐられたけれども、正式の禮拜に於ける神體として立てられたものではなかつたのであらう。この柱の外に岩石、*Lithra*〔双叉の斧〕*swastica*〔卍〕状の紋、十字架の形なども一種の神體として尊崇せられた。

この女神に従つてゐる動物は獅子ばかりではなく、時には鶴であり、時には蛇である。エヴンズに従へば、鶴はその天の性質を現はし、蛇は地の性質を示すといふことであるが、いづれにせよ、地より生れたものを支配する神の力を示したものであるに相違ない。然しながらこの宗教に属する動物中、最も重大なものは牡牛である。私どもはこの女神の背後に社の裝飾として用ゐられた牛角の形を認めた。この形は社と例の柱の描かれてゐるところには到る處に發見せられる。クノッソスの王宮の壁畫や美術品工藝品などには精巧な技術を用ゐて牡牛の象を描いたり、彫刻したりしたものがあつた。又、それらの材料に依つてクレエテエ文明の時代に行はれた行事が大概は牡牛を中心とするものであり、牡牛の捕獲、牡牛の犠牲、又牡牛と人間の競技等が全都の民を熱狂せしめてゐたことが分る。ハルブヘエルに依り、クレエテエの南の海岸にあるフアイストスのハギア・トリアダより發掘せられた石棺 (sarcophagos) の両面に描かれた彩畫は有名なものであるが、その中心になつてゐるものは牡牛の犠牲であり、殺された牛の血を注ぐことに依り、その mana 「勢威」——メラネシア群島の土人の言葉に由來する人類學者の用語である。"mana,

that primitive word which comprises force, vitality, prestige, holiness, and power of magic, and

which may belong equally to a lion, a chief, a medicine-

man, or a battle axe," 〇〇とギルバート・マレーは説

明してゐる。』を受け、又これに依つて生成の奇

蹟の行はれることを示したものと思はれる。

〔挿畫参照〕牡牛はその力と大きさと勢ひに依り、

mana に充溢する生物の代表的なものと考へら

れたのであらう。〔牡牛の mana は殊にその角に

集つてゐると考へられた。〕この石棺の畫は明

らかに女神の aniconic form である所の柱の前

で行はれた犠牲の光景を描いたものであり、又、

その柱には例の牛角の裝飾が施されてある所

より見ると、牡牛そのものは本來神に捧げられ

たもので、神ではなかつたのであるが、後には牡牛も亦 mana の根原としての女神の



前



後

神性を願ち有つ所のものと考へられた。クレエテエの王ミノスは牡牛の化身と考へられ、或場合には牡牛の面を被つてゐたと思はれる。それがミノタウロスである。埃及の大神と同じやうに、獸の面を被ることとはやがてその獸の *emim* に満ちた神になることであつた。



(一)



(二)

この女神は又、時とすると一人の少年、或は若い戦士を伴つてゐる。ミュケエナイより發掘せられた印形入指輪の意匠は確かに女神と少年と更に泣きくづをれてゐる一人の女を描いたものであり、「挿畫(一)參照」ゾブヘイオの墳墓から發掘した指輪も亦同様の意匠を現はしたものである。「挿畫(二)參照」エヴンズの言ふ所に依ると、この少年は早く世を去つて女神の下に仕へてゐる若い戀人或は寵兒——アッティス或はアドオニスに相當するもの——である。「三」ゾブヘイオの指輪には女神の上の方に蛹の形が描かれてゐる。エヴンズがモレアの西岸で發見して「ネストオルの指輪」と稱へてゐる精巧な指輪の上にも女神の上に蛹と蝶が描かれてあり、ミュケエナイ

の第三堅穴の墓からは夥しい数の蛹の形をした装身具や蝶の模様のある秤が發掘せられた。これらは皆この女神の死者を蘇生せしめる力を示したものであらう。少年は母なる女神に依つて生れ、或時を経過した後、母のもとにかへり、再び命を享けて蘇生する。彼も亦女神の分身である。「動物としては牡牛である。人間としてはマイノスである。動物でもあり、人間でもあり、神でもある所のものとしてはミノトオルである。』*“As animal, he is the bull; as man, he is Minos; as animal, man and god as well, he is the Minotaur.”* (c) とギェスタアヴ・グロオツは断定してゐる。牡牛とミノスとミノタウロスをこの少年のさまざまの現はれと見るのは極めて手際よくこれらの事實を統一したものと考へられるが、一一の關係について確證があるわけではない。私どもは唯グロオツの断定に同意したいと思ふやうな事實が發掘物の各處に散在することを認むべきであらう。

極めて簡單ではあるが、以上述べた所に依つてクレエテエとミュケエナイに行はれた宗教の一般を知ることが出来たと思ふ。それは明らかに一柱の女神を中心とする宗教であり、少年や牡牛やミノタウロスなどはその分身である。この宗

教はクレエテエとミユケエナイに行はれたのみならず、エウフラテエスよりアドリアタイコに至る殆んどすべての諸國、殊に埃及、小亞細亞、シリア、及び多島海の島に於いて遍く行はれた。イシスとオシリス、アスタルテとアドオニス、キュベレエとアッティス等はいづれも母神とその分身を現はしたものである。如何にしてこのやうな宗教が生じたのであらう。女神は生命の本原である。然しながら、生命の本原である所の女神は何處から生れたのであらう。

"It is a canon of religious study that all gods reflect the social state, past or present, of their worshippers." (M)

『すべての神はその崇拜者の過去或は現在に於ける社會状態を反映するといふことは宗教研究の一つの法則である。』

といふギルバート・マレエの言葉に従へば、この問題を解決するものはクレエテエの社會状態でなければならぬ。

クレエテエの社會について私どもの知り得る所は極めて尠い。然しながら、發掘物や廢址の構造に依つて考へると、クレエテエの社會に於ける女の地位が重大なものであつた事は疑を容れないのである。宗教祭式と公の行事は主として女の手に依つて行はれた。その日常生活は家庭にあつて機織裁縫に従事することであつたかも知れないが、クノッソスの宮殿にすらハレム (haron) に相當するものを發見しないことは著しい事實である。斯ういふ風に女が重大なものとなつてゐる社會は必ずその由來する所を有つてゐる。即ち結婚及び血統關係に於ける女の地位が社會的に意義を有つてゐたと考へなければならぬ。例へば原始民族の間には一婦多夫 (Polyandry) の状態がある。マクレナン、モオガン、パッハオウフェン等に依つて始められたこの方面の研究を逐一精査する迄もなく、最近、プロニスラウ・マリノフスキイが「原始人の心理に於ける父」(The Father in Primitive Psychology) と題する論文の中に報告してゐる事實に依つて見ても、この類の社會状態が今日尙存在することを否定することは出来ない。マリノフスキイはニウ・グキニイの東北に位する珊瑚礁、トロブリアンダ群島に於ける家族制度を觀察考究した結果、

この群島に住む土人は名義上の父を有つてゐるけれども、父より生れた者であるといふ概念を全く有つてゐないといふことを、土人自身の口供、風習、信仰に基いて明確に證明してゐる。即ち、トロブリアード人の思想に従へば人類は母より生れたものであり、父より生れたものではない。父がなくても子供は生れる——従つて、すべての人間は母の家族に屬するものであり、父は唯家庭の保護者或は養育者であるに過ぎない。血縁より言へば父は家族以外の者であり、母の子は母の家族——その兩親兄弟などの者である。斯ういふ思想は雜婚ではなくても雜婚に近い状態より生れたものであると推定せざるを得ない。そのやうな状態に於いて一人の子供が生れる時、その母を認めることは容易であるけれども父を明示することは不可能である。性交と出産とは全然關係のないものと考へられる。女は子供を生むといふこと、又、子供には母があるといふこと、この二つの事實以外に生成の現象を説明することが出来ないのである。そこで、人類の起原に溯る時にも夫を有たない母に相當するものを考へる。

"Mankind originated, according to native tradition, by the emergence from underground of men and women, a couple, always a brother and a sister, coming out in a given spot. According to some traditions, we see only women appearing first. Some of my commentators insisted upon this: 'you see, we are so many on the earth because many women came first. Had there been many men, we would be few.' Now, whether accompanied by her brother or not, the original woman is always imagined to bear children without a husband and without any other partner." (\*)

『土人の傳説に従へば、人類は、地下より、常に姉と弟である、二人宛の男女が、或一定の場處に生れ出づることに依つて起原を發した。或傳説に従へば、女ばかりが最初に現はれることを見る。私の説明者の或者はこの點を固執した。『多くの女が最初にやつて來たから、われわれはこんなに多く地上にゐるのです。多くの男がゐたのであれば、われわれは尠いでせう。』さて、弟を伴つてゐるにせよ、ゐないにせよ、この原始の女は常に夫なしに、又その他の如何なる男の配偶もなしに、子供を生むと想像せられた。』

とマリノフスキイは言つてゐる。同じ著者が『原始人の心理に於ける神話』(Myth in the Primitive Psychology)と題する論文の中に述べてゐる所に従へばこの場合の弟

は守護者であり、姉は血統の傳達を職責とする。(“…… brother and sister in which the former is the indispensable guardian, and the second, equally indispensable, is responsible for the transmitter of the line.”) 彼等が地下より生れたものであることは後に述べる地の神神 (of *Pharos*) の宗教と共に考察せらるべきものである。

クレエテエの文明を形成したものは原始民族ではない。或方面に於いては希臘盛期のものですら、遙かに及ばない所に到達してゐた。それにも係らず、社會制度の性質に於いてこのオオストラリアの母系制度 (matrilinear system) に近いものを反映してゐると考へることは出来ないであらうか。ヘロドロスの歴史に裏海のほとりに住む蠻人の風習を述べた箇所[第一卷、二〇六章]は、唯その行が禽獸に等しいといふだけで雜婚であるとは明記せられてゐないけれども、リビュアの奥地マカイのあたりに住むギンダネスの女達が關係した男の數だけの踝飾 (anklets) をつけて得意になつてゐることを述べた一節[第四卷、一七六章]は明らかに一婦多夫の風習の存在してゐたことを證明する。ヘロドロスの時代にすら尙この事實があつたとすればそれよりも數百年以前の地中海沿岸にこの事實が存在しなかつ

たとは言へないであらう。ヘロドロスは又、小亞細亞のリュキア (Lycia) の住民のことを述べて、

“The Lycians are in good truth anciently from Crete; which land, in former days, was wholly peopled with barbarians.” (x)

「リシアンズは本當に太古クリイトから來たものであり、あの島には昔は全く希臘人以外の民が群つてゐた。」

と言つて居り、更にリュキアの民の風俗が母系制度であることを説明してゐる。

“Their customs are partly Cretan, partly Carian. They have, however, one singular custom in which they differ from every nation in the world. They take the mother's and not the father's name. Ask a Lycian who he is, and he answers by giving his own name, that of his mother, and so on in the female line. Moreover if a free woman marry a man who is a slave, their children are full citi-

zens ; but if a free man marry a foreign woman, or live with a concubine, even though he be the first person in the State, the children forfeit all the rights of citizenship." (\*)

【彼等の習慣は一部分はクリイトのものであり、一部分はケイリア(ケイリア人は原住民)のものである。彼等は然しながら、世界に於けるあらゆる他の國民から異つた一つの特別な習慣を有つてゐる。彼等は母の名を稱へ、父の名を稱へない。リシア人に、汝は誰であるかを尋ねて見よ、彼は自分の名母の名更に進んで母方の名を言ふことに依つて答へるのであらう。尙その上、若し一人の自由民である女が奴隷である男に結婚したならば、その子供達は十分の権利を有つた市民である。然しながら、若し一人の自由民である男が外國の女と結婚するか或は妾と生活すれば、たとひその人は國家に於ける第一位の人物であつても、その子供達はすべての市民権を失ふ。】

ニコラオス・ダマスケエノスも亦『リシアの民は男よりも女を尙び、母の名を稱へ、又其遺産を男の子に残さず、女の子に残す。』“The Lycians honour their women rather than their men and are called after their mothers, and they leave their inheritances to their daughters and

not to their sons.” (†) と言つて居り、ブルウタルコスも亦リュキアのクサントスの住民が母姓を稱へることに言及してゐる。(‡) ヘラクレイデス・ポンタイコスに至つてはリュキアの民が昔から女の支配の下にあつたことを述べてゐるが、これなどは母系制度(matrilinear system)より、一步を進めて母治制度(matrarchy)の存在してゐたことを認めたものと考へ得るであらう。母治制度或は女治制度(matrarchy)と母系制度(matrilinear system, Mutterrecht)とは區別しなければならぬ。一例を言へば、プラトオンに依ると、クレエテエの民はその故郷の島のことをいふ時に「父なる國」(Patrie)と言はず、「母なる國」(Matrie)と言つてゐたといふことであり、「國家論」(五七五D)「ブルウタルコスも亦た同様の事實を傳へてゐる」「列傳」(テセウス)「九」。クレエテエの人には國と母とが自然に結合すべき理由があつたのであらう。それにも係らず、クレエテエにはミノスといふ男の國王があつたことも亦事實である。唯、その國王の「母」——即ち母神——に對する關係は、曩に述べたやうに、宗教的には「母神」の分身として、親子の關係にあるものであり、又一方、トロブリアンドの土人に於ける「守護者」のやうに政治上の權力だけを保有するものであつたと思は



れる。之に反して、アリアドネエは「極めて神聖なる女王」であり、直接に「母神」の力を反映するものと考へられた。これらの事實はやがてクレエテエに於ける社會制度が一婦多夫の状態にあつたか、或は尠くともその状態を經過したものであり、例の「母神」はこのやうな状態にある人人の情緒より必然的に投射せられた宗教的崇拜の對象であつたことを證明する。

## 附記

カナリア群島より亞弗利加の北岸、多島海、小亞細亞、シリア、及び埃及に於ける母系制度の徵證を列擧することは容易であるが、煩雜を避けてここには省略する。尙この制度が日本にも存在した事を考へ、日本の神話と太平洋群島の神話がこれに依つてどのやうに一致するかといふことを研究して見るのも興味ある問題であるが、これは又、餘りに研究の範圍を擴めることになるので、この場合には言及をさし控へる。

このやうに考へて來ると、クレエテエの宗教は母系制度の社會より必然的に生れた「母神」を中心とするものであり、又其「母神」は生命の根原——「大地」——を意味

する所のものである。これに對してホメエロス以後、希臘人——ヘルレエネス——の宗教と考へられたオリュムポス諸神の宗教はどのやうな性質をもつたものであらう。ヘルレエネスはベラスゴイ、アカイア族、ドリリア族といふやうな民族の名稱ではなく、それらのものが統一せられた時の希臘人一般に與へられた名稱である。従つて、理論的にはホメエロス以前のものを含み得るわけであるが、實際はアカイア族の侵寇以後、それ以前に存在してゐたものは全く押退けられて了はないまでも下積のやうなものとせられ、ヘルレエネスの中心にはアカイア族の思想が統制力を揮ふこととなつた。何故ドリリア族でなくしてアカイア族が重大なものと考へられたかといふに、それは、ペイシストラトス〔紀元前五六〇——五二七〕に依り、パンアテナイアの祭に於けるホメエロスの詩の吟誦が制定せられ、ホメエロスの詩に現はれた思想は、やがて希臘人の思想、ヘルレエネスの思想であると認められたことが有力なる原因を成したと思はれる。ペルシア戦争〔畧紀元前五〇〇〕以後、アテエナイの興隆に伴ひ、希臘諸族の結束は一層鞏固なものとなり、ヘルレエネスに對するすべての民族を外國人 (Συρραγοι) として敵視するやうになると、

ホメエロスに對する尊敬はやがてこの結束を精神的に實現するものとなつた。そこで、ホメエロスの詩に於けるアカイア族の宗教がヘルレエネスの宗教として認められた。それはオリュムボスの神を祀る宗教であり、その最も發達した状態に於いてアテエナイの宗教となつた所のものである。フェイデアスがあのヅエウスの巨像を作ることになり、同僚のバナイノスよりどのやうな典型のヅエウスを選ぶつもりであるかと尋ねられた時、イリアス〔第一卷五二八行より五三〇行までの一節、〕クロノスの子は斯く語りぬ、かくてその黒き眉を傾けぬ、アムプロオジアの香馨はしき髪は王の不滅のかうべよりゆらぎ落ちぬ。かくて彼は大いなるオリュムボスを摺伏せしめぬ。』〔Kronion spake, and bowed his dark brow, and the ambrosial locks waved from the king's immortal head; and he made great Olympus quake.〕を以て答へたといふのは有名な話であるが、これを見てもホメエロスの宗教思想と後の希臘人の宗教思想が如何に密接な關係をもつてゐたかといふことが分る。オリュムボス諸神の宗教の一般的特徴に就いては既に述べた。ヅエウスを中心とすることに依り、男神を至上者とするものであることは最早説明を要しない。

であらう。この點をホメエロス以前、或はアカイア族以前に存在してゐた、クレエテエ、ミューケエナイ及び多島海に存在してゐたと思はれる宗教に比較して見ると、第一女神に對する男神といふ一つの點に於いて著しい對照を成してゐる。更に又、母神崇拜の背後に母系制度の社會が存在することを認め得たのと同じ理由に依り、オリュムボスの宗教の背後には父系制度 (patrilinear system) の社會があつたと推定することが出来る。『イリアス』第九卷、四四四行より四六一行までの間に出でゐる、アキルレウスの養父、ファイニクスの言葉は明らかに父系制度の存在を證明してゐる。

"So would I not be left alone of thee, dear son, not even if god himself should take on him to strip my years from me, and make me fresh and young as in the day when first I left Hellas the home of fair women, fleeing from strife against my father Amyntor son of Ormenos: for he was sore angered with me by reason of his lovely-haired concubine, whom he ever cherished and wronged his wife my mother. So she besought me continually by my knees to go in first unto the concubine, that the old man might be hateful to her. I hearkened to her and did the deed; but my sire was ware

thereof forthwith and cursed me mightily, and called the dire Erinyes to look that never should any dear son sprung of my body sit upon my knees : and the gods fulfilled his curse, even Zeus of the underworld and dread Persephone. [Then took I counsel to slay him with the keen sword : but some immortal stayed mine anger, bringing to my mind the people's voice and all the reproaches of men, lest I should be called a father-slayer amid the Achaians.]”

『されば愛する子よ、よしや神自らわれよりわが齡を剝ぎ奪り、われをわが父、オオメノスの子なるアミンターに對する争より遁れ、はじめて美女のふるさとヘラスをあとにせし日に於ける如く、生氣あり齡わかき者とすることを約し給ふとも、汝よりひとり取殘されてあらむとは思はず。如何となれば、かれはそのつねに慈しみ、わが母なるその妻に不法のしむけをせし、髮うるはしき妾のゆゑにいたくわれを憤りたればなり。かくて、母は絶えずわが膝にすがりて、老人がその女にとりて厭はしくなるために、われ先づかの妾の處に行かんことを願ひぬ。われは母の言を聞き入れ、その行をなしぬ。されど、わが父は直ちにそのことをさとりて、激しくわれを誚ひ、恐るべきイリイニイスを喚び出して、わが肉體より生れ出でたる如何なるめぐし兒もわが膝の上に坐ることなきやうに取りはからはしめ、神神すなはち冥府のヂ・ウスと畏るべきパアシフ・ニイはその誚を成就せしめぬ。』その時われは利き

劍にて彼を殺さんとはかれり。されど或不滅なるもの、わがナケイア族の中にて父殺しと稱へられざらんやうに、衆人の聲と人人の譴責のすべてをわが心に思ひ起させて、わが憤をしづめぬ。』

この一節の中、ファイニックスが父の名と共に祖父の名を擧げて“Amynor son of Ormenos” (Ἀμύνορος Ὀρμενίδας) と言つてゐるのは、明らかに父系制度の行はれてゐたことを證明するものであり、ヘロドトスがリュキアの民の風習を述べた處に『彼等は母の名を稱へ、父の名を稱へない』とあるのに對して、正反對の事實を示してゐる。ホメエロスに於ける英雄の名は大抵父の名と共に稱へられてゐるのみならず、アガメムノオンをアトレイデエス (Ἄτρεΐδης, son of Atreus) オデュッセウスをラエルテイアデエス (Λαερτιάδης, son of Laertes) と言ふやうに、父の名だけでその人を現はす場合がある。ファイニックスの父が妾を蓄へてゐた事は、一夫多婦 (Polygamy) の痕迹を認め得るけれども、別に正妻のあつたことより見れば、明らかに一夫一婦 (Monogamy) の制度の嚴存してゐたことが分る。アガメムノオンとクリュタ

イムネエストラ、オデユッセウスとベエネエロベエが同じ制度の下にある夫婦であつたことは言ふまでもない。フォイニックスの父が妾を蓄へることに依り、正妻に對する『不法のしむけをした』"ἀρπύγους ἐξορῶν"とあるのは一夫一婦の時代の感情を現はしたものである。エリニウスは復讐の神であるが、エウメニデスが——オレステエスに對するクリュタイムネストラのやうに——母の讐をかへすものであるのに對して父の讐をかへすことを任務とする。フォイニックスの父の誚は父系の斷絶を宣言するものであり、この制度の下にある社會では最も恐るべき災厄である。フォイニックスが父を殺さうとして果さなかつたのはアカイア族の間に父殺しの汚名を被ることを懼れたからである。尙、この一節には現はれてゐないけれども、フォイニックスがアキルレウスを養子にしたのは、父の誚に依り、實子を有つことが出来なくなつても、何かの方法で父系を絶やさないやうにすることが必要とせられたからであらう。四八一——四八二行に、フォイニックスがアキルレウスの實父ベレウスの愛を受けた時のことを述べて、『…父がその一人子、大なる財産の若き世嗣をいつくしむ如くわねをいつくしみぬ。』

"... cherished me as a father cherisheth his only son, his stripling heir of great possessions." と言つてゐるのは男系の相續が認められたことの確實な證據である。

フォイニックス、ベレウス、アキルレウスなどの故國はテッサリアのフタイエエであるから、この場合のヘルラスは狹義に解釋せられたもので、やはりフタイエエのことであると思はれる。して見ると、ヘルラスの民即ちヘルレエネスも亦一時その地方の民の特稱であつたものが次第に希臘人全體の總稱となつたものであらう。リッヂエイの言ふやうに、アカイア族がドナウの峽谷から南下した民族「ケルト民族」であるとするれば、このフタイエエの民となつた時始めて私どもの視域の中に入つて來る所のものである。このやうに考へると、オリュムボスが當初テッサリアの山であつたことは看過することの出来ない事實である。オリュムボス諸神の宗教はテッサリアに移住した新しい民族の社會制度を反映するものであり、ヅエウス自ら父系制度の社會に於ける父に對する情緒より必然的に投射せられたものとして、他の社會に於ける母神に對立する。

"The Greeks have been from very ancient times distinguished from the barbarians by superior sagacity and freedom from foolish simplicities." (11)

「希臘人は遠い昔から秀れた知力と、蒙昧の行に囚へられないことに依り外國人とは異つてゐた。」

とヘロドトスは記してゐる。父系制度——殊に一夫一婦の状態に於ける父系制度——が存在してゐたといふことそれ自身、アカイア族が「秀れた知力と、蒙昧の行に囚へられない」ものであつたことを證明する。尙、その上に、この事實を確證するものはオリュムポスの宗教に於ける擬人觀 (anthropomorphism) の思想である。超自然的なものや生死或は運命を支配するものの存在を信じないではないが、他の原始民族のやうに純然たる畏怖或は禁忌 (taboo) の感情に基いて形成せられたフエタイシズムやアニミズムに沈潜するのではなく、人間である彼等の理解力を満足せしめ得るやうな様式に於いて、神、及び神と人間との關係を説明しようとする。其結果、オリュムポスの神は人間の形體を具へ、人間の性質をもつたも

のとして想像せられた。その脈管には神の血 (ichor) が流れて居り、神饌 (ambrosia) を食し、神酒 (nectar) を飲むとは言へ、生活の資を必要とすることは人間と同様である。夜になれば眠らなければならず、腹が空けば食べなければならぬ。あかりがなければ物を見ることも出来ない。情慾の奴隷であることに於いても人間以外のものであるとは思はれない。神は屢苦痛と恥辱に遭遇する。「イリアス」第二十一卷、四〇〇——四二六行。夫婦喧嘩をすることもある。「イリアス」第一卷、五三〇——五七〇行。彼等は全知でもなければ全能でもない。「イリアス」第十三卷、一行以下。「オデュッセイア」第五卷、一——二九八行。「イリアス」第十八卷、三九四——四〇五行。運命の支配を免れる事も出来ない。「イリアス」第十三卷、三八二行以下。同第五卷、三三五、八五五以下。それにも係らず、彼等が文化史の上より見て、それまでに存在してゐたものよりも進歩した思想を體現したと考へられるのは何故であるか。それは宗教上の信仰を情緒的なものより知的なものに移し、渾沌を斥け、秩序を制定する一種の理性主義 (Rationalism) に適合するからである。人間を動物から區別する能力が理性であるとすれば、人間文化の高低は理性に依つて統

制せられる契機の多少に従つて規定せられる。希臘人はその信ずる所の神に人間性を賦與することに依り、原始文化よりも一層進歩した文化を有つことになつたと考へ得るであらう。オリュムポスの神はアカイア族の酋長或は貴族階級に於いて理想的であると考へられたすべての特質を現はしたものである。さまざまの缺點があるにせよ、ゼウスが至上者としての秀れた道念——尠くともゼウスを意想した民族の——を代表する一面を有つてゐる事は否定することが出来ない。第一に彼は正義の神であり、ネメシスによつて正邪を裁断する。第二には善良なものの保護者である。第三には慈愛あり、同情ある父であり、家長である。これらの特質は人間の社會に於ても父であり家長である者の特質である。ゼウスの弱點と缺點も亦、この觀點より考へるならば、避け難いものであるのみならず、そのやうな弱點なり缺點なりの存在する方が却つて自然であるやうに思はれたのであらう。オリュムポスの宗教が社會的宗教として發達したのは第一に父系制度の社會を反映するものであり、第二にはこのやうな理性主義に基いたものであつたからであると思ふ。家族に對して守護者である所の父は守護せら

れるものと外なる世界との間に立つてゐる。その職能は常に對社會的であり、政治的である。ちやうどそのやうに、ホメエロスの時代より希臘の家の中庭には「中庭のゼウス」(Zeus Epeios)の爲に設けられた所の祭壇があり、或一定の日に親族を集め、友人を招待して犠牲を捧げるのが常であつた。家族に直接に關係のある社會的結合は親族(Clan)であり、親族は又氏族(Phratria)に結合し、氏族は更に種族(Tribu)に結合する。希臘人はその一つ一つの結合を司る爲のゼウス或はゼウスに代るオリュムポスの神を有つてゐた。もとより一つの神の多様な所現に過ぎないのであるが、そこには彼等の社會組織を貫く宗教的感情が看取せられるであらう。紀元前五世紀に於ける希臘文化がすべて社會的文化であり、政治、藝術、競技に至るまで、一切の文化運動がこの意味に於ける希臘人の主神(Zeus Elysius)或はその下にある特殊の神の名に依つて行はれたといふことは決して由來する所がなかつたとは言へない。プラトオンはもとより、アリストテレスですら——一面に於いてはこの宗教の忌憚なき批評家であつたにも係らず、——その思想の根柢に横はつてゐたものは、このやうにして希臘人の間に養はれて來た社會

文學總論  
意識である。

四一〇

"It would be a long and laborious task to track out the varied relations between the religion and the philosophic ethic of Greece : the correlation is most discernible in the moral writings of Plato ; most difficult to trace in the *Ethics* of Aristotle, which is the first great secular treatise on the subject and is for the most part constructed without any obvious religious idea ; yet as Kant's *Ethics* reflects unmistakably the traits of Protestantism and of the Old Testament, so the bright and human philosophy of the Greek thinker, wherein social virtues and social graces are happily blent in his civic ideal, is toned by the atmosphere of the religion of the Greek Polis, that fellowship of families and kindreds." (410)

『希臘の宗教と哲學的倫理の間の多様な關係を辿ることは、長い、又骨の折れる仕事である。この相互關係はブレイトウの道徳に關する著作に於いて最も明らかに認められる。倫理といふ問題についての最初の偉大な非宗教的論文であり、大部分は如何なる明瞭な宗教觀念をもたないで構成せられた、アリストウトルの『倫理學』に於いてこれを辿ることが最も困難である。然しながら、カントの『倫理學』が紛れもなくプロテスタンティズムと舊約聖書

の特徴を反映するやうに、この希臘の思想家の明るく、かつ人間的な、その中には社會的道徳と社會的氣品が彼の市民としての理想に工合よく融合してゐる所の哲學は、希臘都市の宗教の雰圍氣、あの家族と近親の交誼に依つて調節せられたものである。』

といふフ、アネルの言葉は至言であると思ふ。これは、又、哲學に於いてさうであるのみならず、美術と文學に於いて更に著しい特質である。フェイデアースとスコオバスの彫像に於いて、ソフォクレエスの戯曲に於いて、私どもの發見する希臘藝術の特質は常にこの都市の宗教の雰圍氣につつまれてゐる。それは窮極に於いてオリュムポスの神を體現せしめた所の民族精神の所現であり、斯の如き精神の由來する所より考へるならば、藝術に於ける男性的原則 (male principle) の作用であるといふことも出來よう。その思想上の傾向が一種の理性主義である事は既に述べた通りである。この傾向は藝術的表現の上にも現はれた。この場合に於ける希臘精神——“Olympian spirit”——は一切の神祕とそれに伴ふ情緒を抑制し、明朗な秩序と擾れざる均齊を以て貫いた理想の世界を創造した所のものであ

る。レッシングの攻撃もさることながら、ベンケルマンの所謂『高貴なる純一と沈靜なる雄大』“eine edele Einfalt und stille Grösse”<sup>(+2)</sup>は確かにこのやうな理性主義の當然の歸結であつた。

オリュムポスの宗教は理性の確立であり、文化史上の一大進歩である。それは又、人性に於ける男性的原則の勝利である。然しながら、この宗教に依つて人類の社會より失はれたものは何も無かつたであらうか。宗教が宗教として存在する所のもの、『測り知ることの出来ない或ものの遍在を信する信仰』“the belief in the omnipresence of something which is inscrutable.”<sup>(+2)</sup> —— Spencer] 『無限なるもの』に對するあこがれ』“a longing to the Infinite.”<sup>(+2)</sup> —— Max Müller] 『靈的實在を信する信仰』“the belief in Spiritual Beings”<sup>(+2)</sup> —— Tylor] は今までに述べたやうな “Olympian spirit” に背馳する所のものである。オリュムポスの宗教が文化的であればあるだけ、その宗教としての存在は宗教それ自身の本質より遠いものとならざるを得ない。例へば、禁忌 (taboo) の觀念は宗教意識の存在する所には何等かの形に於いて必ずその重大な要素を成してゐるのであるが、理性的な宗教に於いては次第

にその影を潜めて来る。希臘の藝術が宗教に依つて拘束せられなかつたのは宗教の方に拘束すべき力がなかつたからではないか。擬人觀にしても、すべての宗教が共通に有つてゐる擬人觀と、オリュムポスの宗教に限つて特に發達した擬人觀とは、尠くとも其宗教的意義に於いて背馳したものである。フエティシズムやアニミズムに於いても一種の擬人觀があると言へば言へないことはない。何となれば、それらの場合に於ける信仰の對象は單なるフエティッシュでもなければ天地山川でもない。それらは皆人間のやうに感じ、考へ、行動するものとして意想せられたものである。ただ、そこに、宗教意識があり、無限なるものに對するあこがれがあり、靈的實在に對する敬虔の情があればこそ、具體的に表象せられたものが人間の形體に似てゐないことなどは問題とせられないのである。これに反してオリュムポスの神のやうに何處から何處までも紛れもない人間である場合には、人間に近いものであることの方が問題であり、宗教的に神であることは閑却せられてゐる。

オリュムポスの宗教がこの一面——即ち、理性的な、文化的な一面しか有たない



ものであつたならば最早宗教と稱へることの出来ないものである。それが宗教と稱へられ、社会的であるにせよ、一種の信仰を受け、神神が神神としての威嚴を維持することが出来たのはこの一面の外に、尙、微かではあるが、文化に克服せられない頃の原始宗教に存在する純真な宗教意識が餘波をとどめてゐたからである。その或ものはアカイア族の宗教より傳へられたものであり、又或ものはアカイア族に依つて克服せられた民族の宗教に由来する。ゼウスはアカイア族の神であると同時にヘラスゴイの神である。『然しながらゼウスの概念に於ける北方的要素は大體に於いて、それらの要素が混合したかも知れない所の如何なるペラスジアンス或はイイジイアンスの空の神をも克服して了つた、それで、ゼウスは黒い髪の毛を有つてゐるにも係らずダニユウブの上流より彼の三大聖所、ドドオナ、オリムパス、及びオリムビアにやつて來た、侵略的北方人の父治制度の神として専ら取扱ふことが出来る。』〔But the Northern elements in the conception of Zeus have on the whole triumphed over any Pelasgian or Aegean sky-god with which they may have mingled, and Zeus, in spite of his dark hair, may be mainly treated as the patriarchal god of the invading

Northmen, passing from the Upper Danube down by his three great sanctuaries, Dodona, Olympus, and Olympia.〕<sup>(+)</sup> — Gilbert Murray] アカイア族のゼウスはホメロスやフェイディアスのゼウスよりも遙かに原始的なものであつたに相違ない。然しながら、ホメロスやフェイディアスのゼウスのやうに、完全に人間化せられた場合にも、それが人間ではなく、ゼウスであると感ぜられた時には、いつもその背後にある大空の神としてのゼウスが理解せられてゐた。この傾向は希臘文化の衰頹期に入り、所謂“Olympian spirit”が全盛期の勢力を失ふやうになると共に愈々明瞭に意識せられて來た。エウリビデエスの斷章〔Fragment 941〕として傳へられてゐる言葉は擬人觀よりも寧ろアニミズムに近い思想を言現はしたものと考へ得るであらう。

“Thou seest you infinite Aether high above,  
Engirding Earth with soft, intangible arms,  
Hold this for Zeus; give this the name of God.”<sup>(+)</sup>

『汝はかなたに高く、はてしなき大氣の  
 やはらかなる、觸れ難き腕にて「地」をとり巻けるを見る、  
 これをしもヂュウスと思へ、これにしも神の名を與へよ。』

ヅエウス以外のオリュムポスの神神——アレエス、ヘルメエス、ポセイドオン等——は大抵皆アカイア族に由來するものではなく、アカイア族に依つて攝取せられた他の民族或は土着の民の神神であつたと思はれる。アポルロオンは多島海のデロスに社をもつて居り、レエトオより生れたといふことになつてゐるが、父の名は知られてゐない。トロイア戦争に於いては絶えずトロイア軍を助け、希臘軍を惱ましてゐる。これらの點より考へると、母系制度の國に於ける *κοῦρος* [母神の特別な寵愛を受けてゐる青年祭司]より轉化したものであるやうにも思はれる。(21)

## 附記

アポルロオンは小亞細亞にも多くの社をもつてゐた。アポルロオンの epithet である

*Αἰκτός* 或は *Αἰκετός* が「狼神」或は「光明神」といふことでなくして小亞細亞のリウキアより來たものであることを意味するとすれば、母系制度とアポルロオンとの接觸は愈確實なものとなる。(前出、三九五頁參照)ギラモギツトモ、レンドルフはアポルロオンの母のレエトオとリウキアの女神ラダ (*Lada*) とは同じものであり、アポルロオンが *Ἀραιός* (son of Leto) と稱へられてゐるのは母系制度の遺風を反映するものであると言つてゐる。(21)

然るに、それとは正反對の一面に於いてアポルロオンは又極北民族 (*Hypoboreans*) に關係をもつてゐる。極北民族の住んでゐた國は何處であるか分らない。唯ボレアス[北風]よりも北にあるといふことが知られてゐる。一年の中六箇月の間はこの極北民族のところへ行き、春暖の頃になつて希臘本土デルフォイの宮へ歸つて來る。これをアポルロオンの「神路」*“sacred roads”* と稱へる。神路はアポルロオンに關聯した人間——恐らく琥珀商人——の通つた路であつたかも知れない。パウサニアスとヘロドトスは極北民族よりデロスにあるアポルロオンの社に年年供物を送る習慣のあつたことを述べて居り、二つの異つた道程を擧げてゐる。こ

の供物は麥稈につつんだもので、その中には琥珀と林檎が入つてゐたといふ。琥珀は林檎の樹脂であると信ぜられたのであらう。林檎 (Apple) がアポロロンの語源であり、醫藥の力を有つたものであると考へられたところから醫藥の神としてのアポロロオンが成立する。これはレンデル・ハリスに依つて發見せられた事實である。<sup>(1111)</sup> ハリスはこの事實を辿つて北へ北へと進み、ブリジアの海岸にある林檎島アバルス (Abalus) が多分アポロロンの發祥の地であらうと言つてゐる。女神の中の主要なものに至つては尙更のことアカイア族以外の民族に由來するものが多い。彼等は皆、何等かの意味に於いて母系制度の社會に關係を有つて居り、或ものは又母神の屬性の一部分を體現してゐる。ヘエラはゼウスの配神であるが、アカイア族の女神ではない。『ヒイアラは無理に結婚させられた、この女神は古いペラスジアンスの神であり、移住して來たアケイアンスの神デュースがその國を征服する時、彼は土地の王女と結婚する。』<sup>(1112)</sup> "Hera has been forcibly married, she is an ancient Pelagian divinity, and when Zeus, the god of the immigrant Achaeans, conquers her land, he marries the native princess."<sup>(1113)</sup> とシュイン・ハリスンは説明してゐる。ホメ

エロスの中に屢、出て來るゼウスとヘエラの夫婦喧嘩はこの消息を反映する。ドドオナに於けるゼウスの配神は、ディオオネエであつた。そこには昔からゼウスの社と共に、ディオオネエの社があつた。ゼウスがアルゴリスに降りて來る時、ディオオネエはドドオナに残され、ゼウスはアルゴリスの女神ヘエラを配神としたのである。<sup>(1114)</sup> "Hymn to Argive Hera" といふ成句はそこに由來する。アルゴリスに於けるヘエラは「歳の精」["Yār-a, the year."—Jane Harrison. <sup>(1115)</sup> "The name of Hera seems probably to be an 'ablant' form of ēpa: cf. phrases like 'Hpa tēkēia."—Gilbert Murray. <sup>(1116)</sup> ] であつた。希臘では夏と秋とが一つの季節になつてゐたから、その歳には春夏秋冬の三季があつたわけである。「歳の精」としてのヘエラにもそれに相應する三つの時季が現はされてゐた。ペラスゴイに依り、アルゴリス或は遠いアルカディアに於いて禮拜せられたヘエラは第一に子供或は少女であり、第二に成人して妻となつた女であり、第三に寡婦である。これらの性質はそれぞれ *epi-* *thet* に示され、三種のヘエラを祀る社が存在したといふことがパウサニアスに依つて傳へられてゐる。このペラスゴイのヘエラが母系制度の社會より生れたも

のであり、クレエテエの母神、或は希臘のデエメテエル、或はその *κωρη* [處女神] である、ベルセフォオネエに關係を有つてゐることは容易に推定することが出来る。デエメテエルは *Gaia* 即ち「母なる大地」であると言はれてゐる。<sup>(17)</sup> アルテミスがクレエテエの母神と同じやうに野獸の神 (*Artemis*) と稱へられ、アポロオンと同じ地方に信徒を有ち、オリュムポスの宗教の中に入つてから後にもアポロオンとの双生の同胞關係を認められたことは明瞭な事實である。アフロディテエに至つては明らかに多島海の女神である。キュテエラ、キュブロス、パフラスに於けるアフロディテエの社は特に有名なものであつた。この女神も亦、季節の神であつたと思はれる。然しながら、その中でも青春より成熟に至るまでの季節「新妻」の季節を司るものとして禮拜せられた。従つて女性美の完全な姿を具へたものとして想像せられ、母神に於ける性愛と生成の一面がその重要な屬性として考へられるやうになつたのであらう。オリュムポスの精神に最も近い女神はアテエナである。その性質に於いて最も男性的な女神であるのみならず、文明と文化の主宰者であり、武勇拔群、トロイア戦争では軍神アレエスをすら打ち倒した

ことがある。アテエナはアテエナイの *κορη* であつたと思はれる。然しながらその本來の姿はホメエロスの詩を形成する理性的精神に依つて理想化せられ、終には處女としての美と實體を奪はれ、一種の抽象的な理想、アテエナイの精神ともいふべきものとして禮拜せられた。

これらの神、又其他の神をアカイア族の思想に基いて系統づけたのはヘエシオドスである。「神統記」に於ける神の系譜「勞働と光陰」[*Erga kai Hêrai, Works and Days*] に於ける五つの時代——黄金の時代、クロノスの時代、より銀の時代、ツエウスの時代、銅の時代、英雄、或は神雄の時代を経て鐵の時代に至る——等は、その結果として生れた。ヘエシオドスの視域にはホメエロスの詩篇に入つてゐるものよりも古い、原始的な神が包括せられてゐた。それと共に、ヘエシオドス自身の不幸な境遇は其世界觀に著しい影響を與へ、多くの抽象的な神を存在せしめることに依り、正義、幸運、因果應報 (*Dike, Tyche, Nemesis*) 等の理法を明らかにしようとした。創世の始にカオス「虚空」が存在したといふことから既に一つの假定であるに過ぎない。ウウラノス「蒼穹」と雖、ゼウスの主要な屬性より抽出せられ

た假定的原型である。クロノスは實際祭式を有つてゐた神神のひとつであるけれども「神統記」に見るやうな重大な地位を占めるものではなく、母系制度の社會に於ける母神の子であり、*kurop* である。之に反してゲエとレアは確かに母神として祀られた。「クレテエの「母神」とゲエ、レア、テエミス、ディオニユスの母のセメレエなどはその本質に於いて往往區別することが出来ない。」結局、ヘシオドスの神神の中、ゼウス以外のものは盡く抽象的觀念であるか、さもなければ母神或は母神の支配する世界に於ける原始的な神神であるといふことになる。

このやうに考へて來ると、一般には希臘多神教と稱へられてゐる希臘の宗教も本來はさまざまの地方に於いて禮拜せられた一つの神の集合であり、オリュムボスの宗教は父系制度の宗教に依つて母系制度の宗教を併合統一しようとしたものであることが分る。オリュムボスの征服は母神に對する父神の征服であつたと言ひ得るであらう。然しながら、このやうにして宗教思想の根柢より母神崇拜の要因を奪つて了ふことは征服の事實が確認せられた時ですら餘程困難であつたに相違ない。パウサニアスの傳へる所に依ると、昔、ドドオナの森の「鴿の祭女」

‘Dove-Priestess’ は祭式の始に次のやうな連禱 (Litaney) を唱へたといふ。

‘Zeus was, Zeus is, Zeus shall be, O great Zeus.

Earth sends up fruits, so praise we Earth the Mother.’ *οἰαὲ*

【「ゼウス在りき、ゼウス在り、ゼウス在るべし、あはれ、大なるゼウスよ。地は生りものをおくり出す、さればわれらは「母なる大地」を讃ふるなり。」】

第一行と第二行との間に連絡はない。唯この場合に信仰の對象となつてゐるものがゼウスと共に「母なる大地」であつたことは極めて意義深いことである。今一つの實例はデルフォイに發見せられる。アイスキュロスの「エウメニデエス」の中に傳へられてゐるアポロロオンの祭女は次のやうに述べてゐる。

‘First, in this prayer, of all gods I name

The prophet-mother Earth; and Themis next,

Second who sat——for so with truth is said——  
 On this her mother's shrine oracular.  
 Then by her grace, who unconstrained allowed,  
 There sat thereon another child of Earth——  
 Titanian Phoebe. She, in after time,  
 Gave o'er the throne, as birthright to a god,  
 Phoebus, who in his own bears Phoebe's name." (11-12)

「この祈の中にはすべての神神の中に先づ  
 豫言者なる御母「大地」の名を唱へ、次には、「番目に」  
 ——真をもて人はしか言ふ——この、母の  
 託宣の社に座を占めたるシイミス、  
 さて次にはその恵に依り、異議もなく許されて、  
 そこに座を占めし地の今ひとりの子、  
 タイタンなるファイイビイを喚ぶ。彼は後、  
 生得の権利としておとこ神、ファイイバスに

座をゆづり、その神はファイイビイの名を唱へたり。」

すなはちデルフォイにはフォイボス〔アポロロン〕が祀られるよりも前にフォ  
 イベエ〔アルテミス〕が祀られ、その前にはテエミスが祀られ、テエミスの前には「大地」  
 が祀られたのである。ドドオナ或はデルフォイに於いて祀られた神はゼウス  
 であり、アポロロンであつたけれども、祭を営むものは女性であつた。その直接  
 に奉仕するものは神神の「母」であつたかも知れない。

クロノスは母のゲエと謀つてウウラノスを殺した。ゼウスをクロノスより  
 救つたのはやはりその母のレアである。「神統記」にすら母神の地位が重大な意義  
 を有つてゐることは注意すべき點である。母系制度はオリュムボスの宗教に依  
 つて滅ぼされたやうに思はれるけれども、そのオリュムボスの宗教ですら、母系制  
 度の背景がなければ宗教としての存在を保つことが出来なかつた。ジエイン・ハ  
 リスンがその著「シイミス」『Themis』の中に十分に論證してゐるやうに、オリュムボ  
 スの神神はいづれも——完全に神格を具へてゐないにも係らず、すべての神神の

背後にあり、又彼等の外(或は上)にあり、神神に神神としての威嚴を保有せしめる所の——女神テエミスに依り、僅かに宗教的信仰を維持することが出来たのである。テエミスは「大地」ゲエと一つのものであり、「掟」——即ち禁忌(Taboo)の合理的發現——を司る。

オリュムポスの宗教に於ける一つの缺陷は他界觀念の稀薄なことである。これはその理性主義より言へば當然の結果であるが、それと共に、宗教に於ける理性主義の破綻を示したものと考へざるを得ない。ホメエロスは靈魂と肉體の間に明瞭な區別を設けてゐない。大體に於いて、個人の「我」と同一視せられてゐるものは肉體であつて靈魂ではない。人世を去れば肉體と共にその人の「我」も亦消散する。靈魂はオオケアノスの流を越えて冥府(Hades)に入り、アスフォデルの花青き原——エエリュジョン(Elysium)——に生きるのではなく、單に存在するのである。靈魂は生きてゐる頃の姿を有つてゐるけれども、意志もなく、自覺もない。それは唯、影のやうな存在であり、生命あるものから見れば極めて悲しむべき状態にあるものとせられた。「オデュッセイア」[第十一卷四八八行以下]に出てゐるアキ

ルレウスの言葉は有名なものである。

“Nay, speak not comfortably of death, oh great Odysseus. Rather would I live on ground as the hireling of another, with a landless man who had no great livelihood, than bear away among all the dead that be departed.”

「いとよ、偉大なるオディッシウスよ、慰めて死のことを言ふ勿れ。世を去りしすべての死者の間に人を治めむよりは、暮しのたづき豊かならぬ地領もなき人と共に、他人の雇はれ者として地上にあらむことをこそ願へ。」

この言葉は、然しながら、靈魂になつたアキルレウスの情懷であるといふよりも、現世にある人人がそのやうな状態にあるアキルレウスの心もちを想像した時の情懷を述べたものと考へる方が妥當である。「我」の意識を有たない靈魂が自分とその僚友を識別するといふことはあり得ないことであらう。それはとにかく、この一節を見ても分るやうに、ホメエロスには死後の望とか永生或は復活の思想と

いふやうなものを認めることが出来ない。『地上に呼吸し、這はへるすべてのものの中、人より憐れむべきはなし。』“there is nothing more pitious than a man among all things that breathe and creep upon the earth.”〔イリアス第十七卷四四六——四四七行〕といふヅエウス自身の言葉は、一寸見ると佛教の思想に共通なものであるやうに思はれるかも知れないが、佛教には來世の望がある。ホメエロスの希臘人にとつては地上明界の短い歳月が過去現在未來を通じて最も幸福な時期である。それ以上には望もなく歡もない。それ故に人間位憐れむべき者はないのである。この點、ヘシオドスの思想は餘程合理的である。彼が英雄の中、特に恵まれた者の行くべき處として考へた「恵まれた者の島」(μακάριον νησος, the island of the blessed)には、尠くとも地上に於いて幸福とせられる状態があり、その反對に、ヅエウスに叛いたタイタネスの没落した處として述べられてゐる「奈落」(Tartaros)には神神でさへ堪え難いものとする苦患の状態がある。ヘシオドスの思想の根柢にある賞罰の觀念は神話を解釋する場合にも其特徴を示してゐた。然しながら、それすら全然現世を超越するものでなかつたことは「恵まれた者の島」がこの世の涯にあるもの

と想像せられ、奈落は地下にあるものと考へられたことを見ても分る。

オリュムポスの宗教に對する批評は紀元前六世紀の詩人哲學者クセノフアネエスに依つて既に明瞭に發言せられた。

“One god, the greatest among gods and men, neither in form like unto mortals nor in thought……”

“He sees all over, thinks all over, and hears all over.”

“But mortals deem that the gods are begotten as they are, and have clothes like theirs, and voice and form.”

“Yes, and if oxen and horses or lions had hands, and could paint with their hands, and produce works of art as men do, horses would paint the forms of the gods like horses, and oxen like oxen, and make their bodies in the image of their several kinds.”

『神神と人の間に最大なる、一人の神形に於いても想に於ても人間に似たらず……』  
『彼は全身見、全身思ひ、全身聽く。』



『されど人間は神を人間のあるが如くに生れ、彼等の如き衣服を有ち、聲と形を有てりと思へり。』

『然り、かつ若し牛と馬と獅子にして手を有ち、その手にて畫き、人の爲す如き美術品を産出することを得たらむには、馬は馬の如く、牛は牛の如く、神の形を畫き、彼等の肉體をさまざまの種類の像に作るならむ。』

これは明らかにオリュムボスの宗教に於ける擬人觀を批評したものであるが、曩にも述べたやうに、擬人觀そのものは人間の宗教である限り、免れ難いとせなければならぬ。馬と牛に宗教的意識があれば馬の神、牛の神を有つ事になるといふのも、寧ろ當然の理であり、それがために人間が人間に似た神を有つことの愚を證することにはならない。クセノフアネスはオリュムボスの宗教の弱點を指摘することが出来なかつた。何となれば彼の文化主義はオリュムボスの宗教と同じやうに希臘思想の限られた一面に局限せられたものであつたからである。彼は一種の汎神論に到達してゐたと思はれる。宇宙にはすべての神神の上に位する唯一つの神があり、その神は宇宙と同一物である。〔“He sees all over, thinks all over,

and hears all over.”といふことを言ひ換へるならば、“he is wholly sight, wholly intelligence, wholly hearing—that is to say, god and universe are identical.”(註)といふ事になる。〕この思想は希臘の哲學が宗教に對して示した一面の考察を代表する。クセノフアネス以後、ヘラクレイトスに依り、アナクサゴラスに依り、或ひはこの一つの「神」——或は「火」或は「ロゴス」——より多様な自然現象の生起する理由が説明せられ、或はこれを神と稱へる代に *νοῦς* (mind) と稱へて、後世の理神論 (Deism) に近い思想が獲得せられたとは言へ、彼等が純粹に宗教的な精神に到達することの出来ない一面を有つてゐたことは否定することが出来ない。彼等は皆宇宙の本原を一種或は數種の物質に歸し、必要に應じて、これに神性を賦與することを憚らなかつた。その哲學がヘレニズムの所産であることに於いては、彼等の攻撃するオリュムボスの宗教と同じ事である。希臘都市の宗教とプラトオン、アリストテレスの倫理説との關係は曩に引用したフアネルの言葉に徴しても知ることが出来る。パルメニデス以後、變幻絶え間なき現象の背後に存在する不變なる實在を立證しようとする所の努力と雖、尙クセノフアネス或はミレエトス學派の頃より希

臘哲學が追究して來た知的、客觀的考察の途を辿つてゐる。汎神論は理神論となり、觀念哲學となつても、希臘人が希臘人である限り、オリュムポスの精神は滅びないのである。

“This idealism, even in Plato, does not bear the modern subjective character; the forms of things are not products of thought either divine or human; they stand in plastic objectivity, as prototypes of things, over against the spirit which contemplates them.” (註三)

『ブレイトウに於いてすら、この觀念論は近代の主觀的特色を帯びてゐない。事物の形式は神的思想の所産でもなく、人間的な思想の所産でもない。彼等は事物の原型として、造形美術に見るやうな客觀性をもつて、彼等を靜觀する所の精神に對立してゐる。』

といふツェラーの言葉は常に顧みられなければならぬ。ピュタゴラスやプロオティノスの哲學を考察する時、或はアウグスティヌスの神學を研究する時にもこの方面の存在を閑却することは出来ないのである。唯、ここに注意すべきこと

はこの希臘哲學の主流に並行して流れる今一つの思想潮流があり、ピュタゴラス、エムペドクレエス、プラトオン等はその哲學の一面に於いてこの思想潮流に影響せられたといふことである。この思想潮流は明らかにオリュムポスの宗教に背馳する。これは父系制度の宗教に對する母系制度の宗教の確立であり、理性主義、文化尊重に對する神祕主義、自然崇拜 (Naturism) の對立である。

## 附記

- 一 L. R. Farnell, 'The Higher Aspects of Greek Religion,' I, pp. 10—12.
- 二 Gilbert Murray, 'Five Stages of Greek Religion,' I, p. 34.
- 三 Sir Arthur Evans, 'The Earlier Religion of Greece in the Light of Cretan Discoveries,' p. 31.
- 四 Gustave Glotz, 'The Egean Civilization,' [English translation of 'La Civilization égéenne'] p. 253.
- 五 Gilbert Murray, op. cit., II, p. 67.
- 六 Bronislaw Malinowski, 'The Father in Primitive Psychology,' p. 48.
- 七 Bronislaw Malinowski, 'Myth in Primitive Psychology,' p. 53.

- 八 'The History of Herodotus,' bk. I, chap. 173. English translation by George Rawlinson.
- 九 Ibid.
- 十 Cf. Sir William Ridgeway, 'The Early Age of Greece,' vol. I, p. 67.
- 十一 Cf. Ibid.
- 十二 'The History of Herodotus,' bk. I, chap. 60. English translation by George Rawlinson.
- 十三 R. L. Farnell, op. cit., IV, ['The Influence of the Civic System of Religion upon Religious Thought, Morality, and Law'], pp. 79—80.
- 十四 Cf. G. E. Lessing, 'Laokoon,' I.
- 十五 Herbert Spencer, 'First Principles' p. 37
- 十六 Max Müller, 'Introduction to Science of Religions,' p. 18.
- 十七 Edward B. Tylor, 'Primitive Culture,' vol. I, p. 424.
- 十八 Gilbert Murray, op. cit., II, p. 70.
- 十九 Euripides, Frag. 941. Cf. Edwyn Beven, 'Later Greek Religion,' p. 6.
- 二十 Cf. p. 6. Gilbert Murray, op. cit., II, p. 71. Also, Jane Harrison, 'Themis,' chap. IX, pp. 439—444.
- 二十一 Williamowitz-Möllendorf, 'Apollo' (Oxford Lecture, 1908). Cf. H. J. Rose, 'A Hand-

book of Greek Mythology,' p. 135.

- 十一十一 Cf. J. Rendel Harris, 'The Origin of the Cult of Apollo.' Also, Jane Harrison, 'Myths of Greece & Rome,' pp. 45—6.
- 十一十二 Jane Harrison, 'Myths of Greece & Rome,' pp. 18—19.
- 十一十三 Gilbert Murray, op. cit., II, p. 77.
- 十一十四 Jane Harrison, 'Myths of Greece & Rome,' p. 13.
- 十一十五 Gilbert Murray, op. cit., II, p. 78, foot-note.
- 十一十六 Cicero, 'Natura Deorum,' II, 67. Cf. G. F. Moore, 'History of Religions,' vol. I, p. 424.
- 十一十七 Pausanias, X, 12, 10. Cf. Jane Harrison, 'Prolegomena to the Study of Greek Religion,' chap. VI, p. 263.
- 十一十八 Aeschylus, 'The Furies,' II 1—9. English translation by E. D. A. Morshead.
- 十一十九 Xenophanes, Fragments, 23, 24, 14, and 15. Cf. John Burnet, 'Early Greek Philosophy,' p. 119.
- 十二十 C. H. Moore, 'The Religious Teachers of Greece,' IV, p. 119.
- 十二十一 Edouard Zeller, 'Outlines of the History of Greek Philosophy,' [English translation of 'Grundriss der Geschichte der Griechischen Philosophie' by Alleyne and Evelyn Abbott], p. 30.

## 第十五章 宗教 (三)

オルフィック教徒 (Orphic) と稱へる宗教團體は何時の頃より發生したものであるか、又何處で最初の結社を見るに至つたものであるか、精確には知ることが出来ない。希臘本土ではデルフォイ、テエバイ、アテエナイ、マグナ、グラエキアでは伊太利亞のクロトオナとシケリアのカマリイナ、及びシユラクウサが中心地であつたと思はれる。この教徒が著しい進出を示したのは紀元前六世紀、ペイシストラアトスの治下に於けるアテエナイであり、當時クロトオナより移住して來たオノマクリトスといふ詩人がその教説を編纂したと傳へられてゐる。オルフィック教徒は或一定の信仰體系と生活様式を有つてゐたことに於いて一般都市の宗教信徒とは異り、初代基督教會の信徒に多少共通な特質を具へてゐる。

教祖オルフェウスが傳説の中の人物であるか、或は歴史上の人物であるか、とい

ふことも亦明瞭には知られてゐない。ジエイン・ハリスンは傳説の背後にある歴史上の事實を指摘しようと試みたけれども、一般には確認せられてゐないやうである。傳ふる所に依れば、オルフェウスはオイアグロス〔或はアボルロン〕と歌神カルリオベエに依り、トラキアのヘブロスの川ほとりに生れた。成人の後、ディオニッソスの敬虔な信徒となり、魔術に通じ、あらゆる種類の智慧に秀でたが、その中でも比類なき手琴の妙手であり、彼が彈奏する時には禽獸草木も此に耳を傾け、川はその流を止めたといふ。森の精エウリュディケエを愛して妻としたが、ひそかに思を寄せてゐたアリストアイオスの兇手より遁れる時、毒蛇を踏んだのがもとで、エウリュディケエは長逝した。オルフェウスはその後を逐うて冥府に降り、手琴の魅力に依りハイデエスの心を緩め、明界に着くまではエウリュディケエの方を見返へらぬといふ條件のもとにその妻を伴つて歸ることを許されたが、明界に近づかうとした時、エウリュディケエの甕音を聞いて思はず後を見返ると共に妻の姿は永遠に失はれて了つた。これより後、オルフェウスは怏怏として樂しまず、一切の女色を斥け、孤獨の生涯に入つたので、トラキアの女人の怨を買ひ、ディオニッ

ソスの祭の夜、狂ひ立つた祭女の群の襲ふ所となり、彼の身體は寸断せられ、引振られた首はヘブロスの流に投ぜられたが、海に入り、對岸の小亞細亞に近いレスボスの島に漂着した。そこで、レスボスでは後にいたるまでオルフェウスの託宣を聞くことが出来たといふことである。以上は希臘神話の中にある物語であるが、もとよりこれがオルフェイク教徒に依つて信ぜられてゐた宗教の全部ではない。彼等はこのオルフェウスを樂人といふよりも寧ろ祭司と考へ、祭司といふよりもオルフェウスが信仰したと傳へられるディオニッソスの姿を變へたものと考へてゐた。オルフェイズムはディオニッソスの宗教が特殊の發達を遂げたものである。それならばディオニッソスとはどのやうな神であらう。

ディオニッソスはホメエロスの考へたオリュムポスの神神の一人ではない。「イリアス」の中に唯一回〔第六卷一三〇行以下〕トラキアの王リュクウルゴスが「狂亂のダイオナイッソスにかしづける母たち」〔the nursing-mothers of frenzied Dionysos〕を追逐したことに依り、ゾエウスの神罰を蒙つて盲になり、早世したといふ事が言及せられてゐる。「イリアス」第十四卷三二三——三二五行にも、

オニッソスのことが出てゐるが、これは後世の竄入と考へられてゐる。ディオニッソスがアカイア族の神でないことは疑を容れない。希臘に傳へられたのはトラキアを経て入つて來たものと思はれるが、本來は小亞細亞或ひは多島海の宗教に關係を有つてゐた神であらう。ディオニッソスの名の由來については「ニッソス」の解義に二三異説があるけれども、その母のセメレ〔希臘神話ではフォイニキアの王カドモスの女といふことになつてゐる〕は、フリュギアの女神ゼメロオ (*Zelko*) であるかトラキアの地神であるか、とにかく母神であるに相違ない。して見ると、ディオニッソスは大地である母神の *κορη* であり、デエメル *κορη* 即ちベルセフォオネエが男性として考へられたものである。葡萄を栽培する民族の間に崇拜せられた時には葡萄の神、酒の神、歡樂の神として祀られたけれども、その本質は地より生れいづるすべてのものである。ディオニッソスにかしづく所の祭女或は信女 (*Bacchae, Bassarides, Tyades, Potniades, etc.*) は、やがて母神であり、その祭式は母神と子神「大地」と地より生れるものとの關係を象徴する。エウリビデエスの「祭女」 (*Bakchae*) の中に描かれてゐる、バックカイの姿は適切にこの意

味に於ける母神を現はしたものと見ることが出来る。

"Some in their arms held kid, or wild-wolf's cub,  
Sucking it with her white milk; all the young mothers  
Who had left their new-born babes, and stood with breasts  
Full swelling: and they all put on their crowns  
Of ivy, oak, or flowering eglantine." (1)

『或ものは小山羊を、または野の狼の子を抱き、その白き乳を含ませたり。すべて若き母たち、新に生みしをさな兒をあとにせし者、みち溢るる乳房をもちて立ちゐたり。かれらはみなその頭に蔦や樅、または花咲ける野薔薇をつけたり。』

この場合の『小山羊』も『狼の子』もディオニッソスの一つの典型であり、『蔦』

『樅』『花咲ける野薔薇』もその通である。この女たちはディオニッソスに依り、一種の狂氣或は恍惚の状態に入つてゐる。それも、このやうにして「地より生れるもの」を養ひ育んでゐる中はまだ穩かであるが、熱狂が昂まり、感情が迫つて來ると、今度はこれらの動物を手摺みにして見る見る中に寸斷して了ふ。

"One ye might see a young and vigorous heifer  
Hold, lowing in her grasp, like prize of war.  
And some were tearing asunder the young calves;  
And ye might see the ribs or cloven hoofs  
Hurled wildly up and down, and mangled skins  
Were hanging from the ash boughs, dropping blood." (2)

『ひとりとは若く強き牝牛の、その手に摺まれて鳴けるを、見れば、戦の獲物の如く持ちゐたり。或ものは犢を二つに裂きゐたり。』

また、見る、肋骨や、分れし蹄の  
上下に狂ほしく投げらるるを、又切り刻みたる皮の  
血罨する秦皮の枝より垂れかかりたるを。」

この、一見、極めて野蠻な宗教がヘルレエネスの理性的精神に背馳するものであつたことは疑を容れない。ダイオニッソスが容易にオリュムポスの神神の中に列することが出来なかつたのも、他の神神とは異り、その本質上、馴致することの最も困難な神であつたからであらう。オリュムポスの神神は完全に人間化せられてゐる。ダイオニッソスも亦美しい青年として想像せられたが、それと共に、樹木と、獣の姿をとどめてゐる。祭女が危機に瀕した時、喚び求めるダイオニッソスは人間の形に囚はれない前の本來の姿、併も變幻絶え間なき生命の所現である。

“Appear! appear!”

Or as the stately steer!

Or many-headed dragon be!

Or the fire-breathing lion, terrible to see.” (ms)

【現はれよ、現はれよ、

うつくしき牡牛なりとも、

かうべ多き龍蛇なりとも、

また見るも恐しき、火を噴ける獅子。】

祭女の外、ダイオニッソスにはいつも附きものになつてゐるサテュロイがトラキアの山間にこの宗教を守つてゐた頑強な民族サトライ(Satyræ)の轉訛したものであり、半人半獣のあの奇怪な姿はアカイア族或は一般希臘人のこの民族に対する反感より生れたものであるといふジュエイン・ハリソンの説に従へば、民族性の上よりこの宗教の信徒と相容れないものがあつたと思はれる。「ジュエイン・ハリソンはケンタウロイなども同じやうな心理上の所産であると考へてゐる。」 それ

にも係はらず、ディオニュソスの宗教は次第に希臘全土にその勢力を擴め、同じやうにトラキアの神で、又早くよりオリュムポス諸神の中に數へられたアレエスが殆んど尊敬を受けなくなつてから後、次第に顯要な地位を占めるに至つた。ゼウス、アポロオンと共にデルフォイに合祀せられ、フエイディアスに依り、バルテノンの frieze [彫刻帶]に彫刻せられたオリュムポス諸神の間に姿を示すやうになつた時には、多少その神性が緩和せられたとも考へることが出来るけれども、後世に至るまでキタイロンの巔、バルナソスの峰にディオニュソスの熱狂的な祭禮が行はれたことも亦事實である。アッタイカに於いてディオニュソスとデエメテエル―ベルセフォオネエが合祀せられたことに就いては後に述べたいと思ふ。この宗教がアテエナイの藝術に寄與した功績の中、最も重大なものの一つは年二回、ガメリオオン[一月下旬]とエラフェポリオオン[三月]に行はれ、「田舎のディオニュシア」(Rural Dionysia)「都のディオニュシア」(City Dionysia)と稱へられたディオニュソスの祭から希臘の喜劇と悲劇とを發達せしめたことであらう。

ディオニュソスの宗教が勢力を得たのは唯單に狂氣の如く亂舞することが人心を收攬したからではない。そこにはオリュムポスの宗教に見出すことの出来ない宗教上の意義があつた。それは熱狂の行爲に依つて體驗せられる恍惚或は離脱の心境である。我を忘れることは人間より離れることであり、人間より離れることは自ら神になることである。ディオニュソスの信徒は神懸りの状態になることが出来た。それは他のあらゆる宗教に於いて信徒の希求し得る最大の惠福であるが、オリュムポスの宗教に於いては、その理性的精神に依り、到底希求することの出来ないものと考へられてゐた所のものである。

"This is the lot the gods have spun for miserable men, that they should live in pain ; yet themselves are sorrowless." (2)

「これは神神が苦痛の中に世を過すやうに、哀れなる人間のために紡ぎたる運命なり。さりながら神神自らには悲しみなし。」



と、アキルレウスは自ら手を下して惨殺したヘクトルの父ブリアモスを慰めてゐる。

“Dear son of Aegus, to the Gods alone  
Belongs it never to be old or die,  
But all things else melt with all-powerful Time.” (註)

『愛するイイジウスの子よ、神神にのみ  
老いず、死せざることは屬す。

その他のすべてのものは全能の「時」に渾融するなり。』

とソフォクレエスのオイディプスはテセウスに告げる。他の點ではオルフィク教徒と共通の思想を有つてゐたビンダロスですら『ヂュウスの如くあらむと求むる勿れ。』“Seek not to be as Zeus.” (註) 『神にならむと求むる勿れ。』“Seek not to become a God.” (註) と教へてゐる。ビンダロスに従へば、人間は現世のものであるから、現世

のことを希求することを以て足れりとせなければならぬ。(“The things of mortal best befit mortality.” (註) 不滅の命を求めるといふことそれ自身、人間としての本分を忘れたものである。『「こころよ、不滅の命を願ふこと勿れ。』“Desire not, my dear soul, a life immortal.” (註) といふ反省はオリュムポスの精神に於ける「節制」(σωφροσύνη)の所現とも見ることが出来る。』

ディオニュソスの宗教はこの思想に對する反逆である。人間は神になることが出来る。更に又、神になつたその刹那に於いて不滅の命を味ふことも出来る。オリュムポスの神神は死を経験しない神神であるが、ディオニュソスは死にかつ蘇生する。地より生れ出づるものは凋落の冬を経て、春、また命に立ちかへる。ディオニュソスの信徒も亦死ぬべき運命を有つた者ではあるが、死はやがて復活に到るための道程であるに過ぎない。肉體は滅びる。世界も亦滅びるであらう。然しながら、熱狂の状態に於いて體驗した永遠の命、靈の世界は滅びないのである。離脱、神憑り、神になる事、不滅の命、死と復活、永生、靈の世界。これらのものが、ディオニュソスの宗教に依つてその信徒に傳へられた宗教上の意義であ

り、教義である。

このやうに考へると、オルフェウスが即ちディオニッソスであるとせられたのは不可思議なことではない。オルフェウスのみならず、ディオニッソスの信徒はすべてディオニッソスになることが出来るのであり、オルフェウスはその代表的な者であるに過ぎない。離脱 (*Ekstasis*) と神懸り (*Divination*) はディオニッソスとオルフェウスとを結び付ける。單にディオニッソスとオルフェウスのみならず、ゼウスでも、アポロンでも、すべての神神は渾融して一つのものとなり、一つの神として宇宙に充滿する。

“One Zeus, one Hades, one Sun, one Dionysus, one god in all.” (4)

「一人のゼウス、一人のヘイダイイス、一つの太陽、一人のダイオナイサス、一切の中に一人の神。」

とある、オルフィック教徒の詩の斷章は明らかにこの思想を言現はしたものである。

今一つの斷章は、あらゆる方面よりオルフィズムに於けるゼウスの神性を説明しようとした。

“Zeus was the first, Zeus of the flashing lightning bolt the last; Zeus the head, Zeus the middle; from Zeus have all things been made. Zeus was the foundation of the earth and of the starry heaven; Zeus was male, Zeus was the bride immortal; Zeus the breath of all things, Zeus the rush of the flame unwearied; Zeus the source of the sea, Zeus the sun and the moon; Zeus the king, Zeus of the flashing lightning the beginning of all things. For he concealed all and again brought them forth from his sacred heart to the glad light, working wondrous things.” (41)

「ゼウスは始なりき、閃めく雷電のゼウスは終なりき。ゼウスは頭、ゼウスは中央、ゼウスよりすべての物は作られたり。ゼウスは地と星照る天の礎なりき。ゼウスは男なりき、ゼウスは永遠の花嫁なりき。ゼウスはすべての物の氣息、ゼウスはたゆみなき炎の迸出。ゼウスは海の源、ゼウスは太陽にして太陰。ゼウスは王、電光のゼウスはすべての物の起原。何となれば彼はすべてを隠し、又再び彼の神聖なる心より、不可思議なる事どもを行ひつつ、これをとり出したればなり。」

オルフィック教徒の間に行はれた宇宙觀 (Cosmology) はヘシオドスのそれに基づき、此汎神論的な神學を説明したものである。天地初發の時に存在したものはカオス〔虚空〕或は「空間」とクロノス (Chronos) 「時間」とアイテエル〔元質〕である。クロノスは卵の形をした世界 ("the world-egg") を作る。すると、この卵は生成の力に依つて二つに裂け、二つの殻は天と地を形成する。卵の中から生れ出たものはプロトゴノス〔第一に生れたるもの〕或はファネエス〔顯はれたるもの〕とエリカバイオス〔兩性の神〕一説に依ればこれらは皆一つのものである。ファネエスは「夜」と生成の母神を生み出す。神神と人間と萬物はファネエスより生れる。ファネエスは宇宙に遍在する光であり、命であり、叡智である。神統幾代かの後、ゼウスが到來する。ゼウスはファネエスを嘔み込んで了ふ。その結果、ゼウスはそれ自らファネエスであり、普遍的な神性の宿る所のものである。〔註〕後に引用した斷章は、この意味に於けるゼウスを説明したものと考へるならば、容易に理解し得るであらう。〔以上は主としてジイ・エフ・ムアの「宗教史」(History of Religion, vol.

I, p. 496.) に従つて記述したものである。オルフィック教徒の神統記や宇宙觀にはこの他にもさまざまの形の下に傳へられた。その詳細はエイ・ビイ・クックの「ゼウス」(Zeus, vol. II, Appendix G, pp. 1019—1054) に出てる。〕

ゼウスの子等の中、オルフィック教徒の神學に於いて最大なるものはダイオニッソスである。ヘルセフォネエに依るゼウスの子として現はれた時にはザグレウス (Zagreus) とも稱へられた。ゼウスはこのザグレウスを世嗣にするつもりで、これを青年祭司の群 [Kouretes 或は Korybantes] に護らせた。この青年達はザグレウスを真中に置き、盾と劍とをもつてその周圍に踊ることを常とした。タイタネスはザグレウスを亡きものにしうとして、さまざまの手遊びを捧げ、青年達の間からザグレウスを盗み出さうとする。終にザグレウスは誘拐せられ、タイタネスの中へ入つた時、彼等はザグレウスの上に襲ひかかり、その命を奪ひ、手足を引振つて了ふ。一説に依れば、タイタネスはザグレウスの手足を料理して食べて了つたといふことであり、又一説に依れば、この時アテエナがザグレウスの心臓を攝り、小函 (kistē, cista) の中に隠したといふ事になつてゐる。ゼウスは雷電に依つてタイタ

ネスを粉碎する。アテエナに依つて救はれたザグレウスの心臓は石膏像の中に移され、斯くしてデイオニュッスは再び世に現はれた。二説に依ればヅエウスはザグレウスの心臓を粉にしてカドモスの女セメレエに飲ませたといふ事であり、又一説には、ヅエウス自らこれを嚥んでセメレエに通じたとも言ふ。いづれにせよ、セメレエより生れたのは再生のデイオニュッスである。ザグレウスが寸断せられた——或は食べられた——時、其本質はタイタネスの中に入り、タイタネスが粉碎せられた時、その屍灰は風に運ばれたのであるが、尙ザグレウスの神性をとどめてゐた。これらの灰はすべての命あるものの中に入り、人間の中に入られた時には靈魂となつて残つた。二説に依れば人間はタイタネスの屍灰より作たものである。従つて、デイオニュッス〔ザグレウス〕とタイタネス——神と惡魔——の二重の性質を有つてゐる。オルフイク教徒の思想に於ける靈魂はこの意味に於ける神——デイオニュッス——に屬するものであり、肉體は惡魔——即ちタイタネス——に屬する。トミ人が死ぬると、其靈魂は肉體より脱け出して空中に浮遊するのであるが、結局、或る他の肉體に入つて再び世の中に生れる。(トミ)

オルフイク教徒は靈魂と肉體とを別のものであると考へ、靈魂は天に、肉體は地に由來すると信じてゐた。マグナ・グラエキアのペテリアで發見せられたオルフイク教徒の書牒、黄金の薄板に文字を刻みつけ、圓く巻いて、六角形の筒に收め、細い黄金の鎖をつけて死人の胸につけたものには、死後の行動について次のやうに教へてゐる。

“Thou shalt find on the left of the House of Hades a Well-spring,

And by the side thereof standing a white cypress.

To this Well-spring approach not near.

But thou shalt find another by the Lake of Memory,

Cold water flowing forth, and there are Guardians before it.

Say : ‘I am a child of Earth and of Starry Heaven ;

But my race is of Heaven (alone). This ye know yourselves.

And lo, I am parched with thirst and I perish. Give me quickly

The cold water flowing from the Lake of Memory.’

And of themselves they will give thee to drink from the holy Well-spring,  
And thereafter among the other Heroes thou shalt have lordship ……” (十)

『ヘイディイスの宮の左に泉ありて、  
側に白き糸杉の立てるを見出すならむ。

この泉には近寄るなかれ。  
されど記憶の湖のほとりに他の泉ありて、

冷やかなる水の溢れ出づるを見出すならむ、そこに看守の人あり。

言へ「われは地と星照る天の子なれど、

わが血すぢは天のみより出でたり。これは汝らの知る所なり。

見よ、われは水に渴きて滅びなむとす。すみやかにわれに與へよ、

記憶の湖より溢れ出づる冷やかなる水を。」

彼等は進んで聖なる泉より汝に飲ましむべし。

その後、汝は他の神雄と共に君臨すべし。』

『われは地と星照る天の子なれど、わが血すぢは天のみより出でたり。これは汝

らの知る所なり。』といふ告白は明らかに、靈魂と肉體の由來するところを示したものである。ヘシオドスはこれと同じことを神神について言つてゐる。

“Grant lovely song and celebrate the holy race of the deathless gods who are for ever, those  
that are born of Earth and starry Heaven.” (十一)

『うるはしき歌を與へよ、とこしへに在す滅びざる神神、地と星照る天より生れたる者の聖なる血すぢを讃へよ。』

と彼はムウサイに喚び求めてゐる。唯、ヘシオドスは神神について言つたのである、オルフィク教徒は自分たち人間について言つたのである。それならば、如何なる理由に依り靈魂は肉體の中へ入ることを必要とするか。

## 附記

この詩に言及せられてゐる二つの泉の中、最初のもの名は掲げられてゐないけれども

明らかに「忘却」*Lethe*の泉である。「記憶」の泉より水を飲むことは靈の世界に入り、不滅の命を得る爲の聖別式（consecration）であつた。

プラトオンの對話篇クラテュロスの中に言語の意味——物の名の性質——が考察せられてゐることは既に述べた。「第四章表象」一一四——一一七頁參照「クラテュロス」の中に論ぜられてゐる言葉の一つは *σώμα* 即ち肉體である。ソオクラテスはこれに三通の解釋があり得ることを述べてゐる。

“That may be variously interpreted; and yet more variously if a little permutation is allowed. For some say that the body is the grave (*σῆμα*) of the soul which may be thought to be buried in our present life; or again the index of the soul, because the soul gives indications to (*σημαίνει*) the body; probably the Orphic poets were the inventors of the name, and they were under the impression that the soul is suffering the punishment of sin, and that the body is an enclosure or prison in which the soul is incarcerated, kept safe (*σώμα, σώτηρα*), as the name *σώμα* implies, until the penalty is paid; according to this view, not even a letter of the word need be changed.” (49)

『それはさまざまに説明することが出来る。多少の入れかへが許されるとすれば尙その上にさまざまに説明することが出来る。何となれば或人は肉體を現世に埋没してゐると考へ得る所の靈魂の牢獄 (*σῆμα*) であると言ふ。或は又、靈魂は肉體に表示を與へる註。肉體を通してその言はんとすることを表示するとの理由に依り、靈魂を表示するものであると言ふ。オルフィック教徒の詩人たちが多分この名の創案者であつたと思はれるのであるが、彼等は靈魂が罪の刑罰を受けてゐるといふ事、又肉體は靈魂がその中に幽閉せられ、*σώμα* といふ名の意味するやうに應報の罰を受け終るまで安置せられてゐる (*σώμα, σώτηρα*) 所の包圍物即ち牢獄であるといふ事を考へてゐる。この見解に従へば、この言葉の一字をも變える必要がない。』

第二の解釋についてはここに取り上げて考へる必要を見ない。ソオクラテスは第三の解釋に賛成してゐるが、第一の解釋も亦、その思想に於いては第三の解釋に密接に關係してゐる。「ゴルギアス」*Gorgias*の中にプラトオンはこの第一の解釋、肉體牢獄 (*σώμα σῆμα*) の說について今一度説明を試みてゐる。

“But surely life according to your view is an awful thing; and indeed I think that Euripides may have been right in saying,

‘Who knows if life be not death and death life;’

and that we are very likely dead; I have heard a philosopher say that at this moment we are actually dead, and that the body (*σῶμα*) is our tomb (*σῆμα*), and that the part of the soul which is the seat of desires is liable to be tossed about by words and blown up and down.” (+2)

【然しながら、君の見解に依る人生は確かに厭なものだ。實際、私も亦、ユウリビディイスが

「生は死にして死は生にあらざるを誰か知らむ。」

と言つたのは正當であつたかも知れない、又、われわれは多分死んでゐるのだと思つてゐる。私は或哲學者がこの瞬間に於いてわれわれは事實死んでゐるのであり、肉體 (*σῶμα*) はわれわれの墓 (*σῆμα*) であり、慾望の所在する所の靈魂の一部は言葉に依つて翻弄せられ煽り立てられる、と言ふのを聞いたことがある。】

プラトオンとオルフィズムの關係については後に再説する。ここには唯、オルフィク教徒の信仰に於ける肉體が牢獄であり、靈魂がその中に入るのは或神秘的な罪

惡に對する刑罰を受けるためであつたといふことをプラトオンの所説の中から例證したいと思つたのである。従つて肉體の中にある間の靈魂は没落の天使或ひは天國よりの追放者にも比すべきもので、窮極は肉體より釋放せられ、天の世繼として靈界のものとなることを望んでゐる。靈魂の肉體に幽閉せられる期間は人の一生涯のものではなく、エムペドクレエスとプラトオンに従へば “thrice ten thousand seasons” であるが希臘の一年は三季であつたことを思へば一萬年である。

この間「輪廻」(*Κύκλος*) のなやみを負うて生より生へと轉住し、禽獸魚介草木の體內にも入らなければならぬ。幽界——即ち、死後の世界——は一種の淨罪界であり、生と生の間に介在する。如何にしてこの繫縛より免れ、一日も早く靈界のものとなることを得るかといふに、オルフィク教徒は「純潔」(*καθαρότης*) と「聖別」(*ἀγιότης*) に依つてこれを成し得ると信じた。オルフィク書牒のひとつには「潔きものよりわれは來れり、下つ界の人人の潔き女王よ。」“Out of the Pure I come, Pure Queen of Them Below” と始まるものがある。<sup>(+3)</sup> 純潔である爲にはオルフィク教徒に與へられた一定の生活様式に従はなければならぬ。肉食を禁ずる。豆を食ふてはならぬ。卵もい

けない。ヘロドトスに従へば、死人を毛織物に纏むことを禁じたといふことである。これらの禁制 (taboo) にはそれぞれ教義上の意義があつたと思ふ。然しながら、これらのものよりも更に重大な意義を有つてゐたのはオルフィック教徒の間に行はれた三つの行事である。その第一は「生食のまつり」(vivification) 第二は「箕を運ぶまつり」(krisopopoiá) 第三は「聖婚」(Iepá sviménē; The Sacred Marriage) である。

オルフィック教徒は肉食を禁じた。唯一つの除外例は「生食のまつり」と稱へられてゐる所のものである。この行事は深夜、人氣なき處——多くは森の中——で行はれ、ブルウタルコス及び初代教父の傳へる所に依れば、この時オルフィック教徒は生きた獸を寸断し、其肉を食べるのが慣であつた。この恐しい行事はディオニッソスの宗教とオルフィック教徒の信仰を結合する樞軸である。ディオニッソスの祭に祭女に依つて引裂かれる獸がディオニッソスそれ自身であることは、母神と子神の關係より見れば疑ふことの出来ない事實である。オルフェウスがディオニッソスであることは既に述べた通であるが、そのオルフェウスも亦、祭女の寸断する所となつた。ザグレウス[即ちオルフィック教徒のディオニッソス]

はテイタネスに裂かれ、又食べられたといふことになつてゐる。テイタネスはこの行事を行ふ教徒自らその野蠻な風習であることを認めた時、神話的に命名した自分達自身の姿であつたと思はれる。いづれにせよ、神を裂き、神を食べるといふことは原始時代より初代教父の時代に至るまで、この宗教を一貫する重大な教義であつた。何故そのやうなことをするのであらう。問題は簡單である。神を食べることに依り、自ら神になることがこの祭式の目的である。命のある中に食べるのは神の勢威 (mana) の失はれないことを望むからである。ハギア・トリアダで発見せられた石棺の畫はクレエテエの昔、既にこの思想の存在してゐた事を證明してゐる。〔第十四章「宗教」二二三八六頁参照〕トラキアでは山羊、クレエテエでは牡牛、紀元四世紀の頃シナイ山に遁世の生活を送つたニイルス聖人の記す所に依れば、當時シナイのあたりに居住してゐたアラビアの遊牧民は駱駝を裂いて食べたといふことである。オルフェウスの傳説——或はイテュス[イテュロス]の傳説——に依つて想像せられるやうに、トラキアでは時とすると人間或は人間の子供を同じやうに取扱つたことがあつたといふことすら推定し得べき理由がある。



「大英博物館に收藏せられる瓶書の一つには明らかに一人のトラキア人が子供の肉を噛み破つてゐる所を書き、側にはディオニュソス——或はザクレウス——が立つてその有様を眺めてゐる。」この祭式が慘鼻の極を盡すものであつたことは否定することが出来ない。それはオルフィク教徒自身誰よりもよく自覺してゐたことであると思ふ。併も尙この行事を棄絶することが出来なかつたのは、このやうな行事に依つてのみ體驗せられ得る宗教上の意義を棄絶する事が出来なかつたからである。その洗練せられた状態に於いて到達した所のものが今日尙世界の基督教徒により最も神聖な儀式として行はれてゐる「聖餐」(Holy Sacrament)の禮典に共通するものを有つてゐないとは恐らく何人も斷言することが出来ないであらう。

「主イエス賣さるる夜、パンを取り、祝して之を擘き、いひけるは、取りて食せよ、これはなんぢらの爲に擘かるわが體なり、食して後、また杯をとり前の如くして曰ひけるは、この杯はわが血にして、立つる所の新約なり、なんぢらもかく行ひて飲むごとくにわれを憶えよ。」(Mt. 26)

この場合、パンと葡萄酒を獸の肉と血に代へることが出来るものとすれば「聖餐」と「生肉のまつり」は教義的に一致する。

## 附記

私は基督教がオルフィズムであると言つてゐるのではない。基督教にはオルフィズム以外にも成立の要素があることは論ずるまでもない事である。然しながら、基督教に於けるオルフィズムの存在が餘りに度外視せられてゐることも亦認めざるを得ない。基督教とオルフィズムの間に比較を許されるのはこの一つの問題に限らないのであるが、他の問題は後に適當な機會を待つて考案することにする。

「箕を運ぶまつり」の箕 (Mivos) は日本の箕と同じやうな形をしたもので、本來はやはり穀物と糠殻を篩ひ分ける爲に用ゐたものである。ディオニュソスを祀る人人の間に入つて來た時にはその用途を失つたのであるが、その代り果物を入れる爲の容器として用ゐられた。彼等がこの道具を持つてゐたといふ事實は、彼等が葡萄の栽培に従事するまでに農作を生業とするものであつたことを證明する。

ジエイン・ハリスンに従へば箕は穀物を篩ひ分けるものであり、善惡を篩ひ分けるもの、即ち祓はらひはらひ (purification) の象徴と考へられたといふことであるが、若しその通であるとするれば尙更のこと、農作に用ゐた頃の記憶が残つてゐたのである。その外に豊稔の象徴であり、一種の cornucopia としての意義を有つてゐたことは疑を容れない。この意味に於ける箕を描いたものの中には、果物とその葉の間に往 *phallos* の形をしたものが置かれてあることを發見する。

ザグレウスが引き裂かれた後、新に幼児としてよみがへつた時、第一に置かれた處は箕の中である。この場合の幼児をリクニテエス (*Arcton*) 或はデイ・オニエス・リクニテエスと稱へ、リクニテエスにかしづく祭女をテュイアデス (*Quidde*) と稱へた。箕、即ち、リクニテエスは、リクニテエスの爲には搖籃であり、テュイアデスは幼児リクニテエスの母である。リクニテエスは又リクニテエスの中に入れる果物であり、テュイアデスは果物を育てる母なる大地であると考へ得るであらう。

このやうな教義を背景にしてオルフイック教徒の間に行はれた一つの行事、箕を運ぶまつり (*Arctophoria*) は成立する。この祭は「生肉のまつり」とは反對にデイ・オニエ

ソスの誕生を記念するものであつた。深夜、森の中。樹木の間には幕が引き



めぐらされてある。教徒一同、息を殺して何事かを待ち設けてゐると、卒然としてデイ・オニエス・ソスの誕生を報ずる聲が聞え、幕の中から片手に松火を持った二人の男が現はれる。見ると二人の間にはリクニテエスに入られた幼児リクニテエスが運ばれてゐる——。ケイムブリッヂのファイツキリヤム博物館に收藏せられてゐる石棺の畫のひとつはこのやうに解釋することが出来る。〔挿畫参照〕その他の場合、例へばオルフイック教徒の入團式の時にも、これとは異なる様式の「箕を運ぶまつり」が行はれたやうである。新入團者は蔽ひものを着せかけられ、何か型通りの儀式を行ふ。其間、果物と例の *phallos* の形をしたものを入れたリクニテエスが教徒の一人に依り、蔽ひものをかけた新入團者の頭の上に運ばれるのである。この場合の行事も亦、誕生を意味したものであらう。基督教

徒の場合と同じやうに、オルフィック教徒の一人になるといふことはやがてその人にとつての新しい誕生であつた。同様の理由に依り、この行事は結婚式の時にも行はれた。

「聖婚」について私どもの知り得る事は極めて尠い。その多くはアレクサンドリアの長老であつたクレメエスのやうな初代教父の記事を根據とするのであるが、元來これらの教父は基督教以外の宗教思想を攻撃する爲に筆を執つたのであるから、行事の内容を暴露することを憚らなかつたけれども、その精神を正しく傳へたと考へることは出来ないのである。オルフィック教徒はその入團式の最後に「婚禮の床」或は「部屋」(khoron)と稱へられる處へ導かれた。そこでゼウスの象徴である蛇一説に依れば黄金で作つた蛇を胸から裾まで通す。これに依つて新に教徒となつた者はゼウスと結婚したと考へられた。

## 附記

この場合のゼウスは男女いづれの性をもとることが出来る。曩に引用したオルフィック教徒の詩の中に「ゼウスは永遠の花嫁なりき。」「Zeus was the bride immortal」とあるのはこの「聖婚」の行事より出たものであらう。

この儀式はフリュギアに行はれたサバデオス (Sabaeon) の密儀より出たものであらう。傳ふる所に依れば、ゼウスは蛇になつてヘルセフォオネエに通じた。二人の間に生れたのがサバデオスと稱へるディオニュソスである。この宗教の特徴としてゼウスは屢サバデオスの父とも子とも考へられたのであるから、この場合の蛇はサバデオス、即ちディオニュソスにもなり得るわけである。クレメエスは、これもフリュギアに行はれたアッティスとキュベレエの密儀に與るものの「しるし」(signa)を引用してゐる——「われは鼓より食せり。われは鍔より飲みたり。われは聖なる皿を運びたり。われは婚禮の部屋に忍び入りたり。』(I ate from the drum; I drank from the cymbal; I carried the sacred dish; I stole into the

bridal chamber." (1141) この最後の「しるし」は「聖婚」に言及したものであらう。

## 附記

この「しるし」はエレウシスの密儀に於ける「しるし」に酷似してゐる。唯、エレウシスでは「聖婚」が言及せられてゐない。その代り一種の劇として演ぜられたのである。

この行事は又オルフィック教徒の他界觀念に結びついてゐる。ペルセフォオネエがハイデエスの花嫁になり、幽界の女王になつたやうに、オルフィック教徒の靈魂は死後、ペルセフォオネエと結婚して幽界の王になる。女であればハイデエスの花嫁になり、ペルセフォオネエと同じ運命に準ずるわけである。この場合の對手はペルセフォオネエ、ハイデエス、ゾエウス、或はダイオニユスのいづれの姿をもとることが出来る。とにかく、靈魂は「死」の花婿——或は花嫁——となることに依り、神になり、靈界に君臨する。従つて、冥府の家にも「婚禮の床」或は「家」があり、「聖婚」の行事があつた。

「我、多くの人の聲の如く、多くの水の音の如く、大なる雷の如き聲を聞けり、曰く、ハレルヤ、夫れ、主たる全能の神は王なり、われら喜び樂しみて神を崇めん、そは羔の婚姻の期すでに至り、その婦すでに自ら備をなし畢りたれば也。婦は深くして光ある細布を衣ることを許さる、この細布は聖徒の義なり。天使われに曰ひけるは羔の婚姻の筵に招かれたる者は福なり」と書き記せ。又曰ふ、これ神の眞の言なり。」 (1141)

「ヨハネ黙示録」の一節はさながらオルフィズムに於ける「聖婚」の行事を叙べたものであるやうに思はれる。

これらの行事は又古くよりエレウシスに於いて行はれた密儀との關係を想起せしめるであらう。ダイオニユスの宗教と相並んで古代に於ける宗教思想の重大な契機を成してゐるデエメテエルの宗教を考察して置くことは、この思想の發達を辿る上に必要なことであると信ずる。

アテナイの西北十四哩、豊穰な沃野とサラミス島を望む海の間に古いエレウシスの町が在る。ホメエロスの讚歌と稱へられてゐるものの中に歌はれたデエメテエルの物語は希臘神話に於いて熟知せられてゐる。「小著」詩の起原の中に多

少詳細に述べて置いた。』あの歌の中、デエメエテエルが一人女のベルセフ・オネエを奪はれ、悲嘆の極、瘠せ衰へた老女の姿になつてエレウシスの王ケレオスの家にたどりつき、ケレオスの末子デモフ・オオンの乳母となる、とある一節は、一篇の本旨、エレウシスに於けるデエメエテエル崇拜の縁起を述べたところである。デエメエテエルはデモフ・オオンを育てた。然しながら、よのつねの乳母とは異り、晝はアムプロオジアで洗ひ、夜は火の中に埋めて育てた。この様子を見たケレオスの妻メタネイラが恐怖の聲をあげたので、デエメエテエルは怒つて本身を示し、向後デモフ・オオンを養育しない事、然しながら一度でもわが手にかかつた者であるから相當の名譽を授けるが、エレウシスはわが爲に立派な社と祭壇を建立すべき事、そこで行はるべき祭事についてわれ自らその方法を教へるであらうといふ事を告げた。ゾエウスとの和議が成立し、デエメエテエルがオリュムポスへ歸ることとなつた時、前に約束した祭式と神事とを教へてエレウシスを後にした。『地上の人人の中これらの密儀を見たる者は幸なるかな。されど秘儀を許さず、密儀に與らざりしものは一度死するや、闇と物かげの中にて、かかる樂しきこと

どもを享くべき運命を有つこと絶えてなし。』“Happy is he among men upon earth who has seen these mysteries; but he who is uninitiate and who has no part in them, never has lot of like good things once he is dead, down in the darkness and gloom.” (1143) とこの讃歌を作つた詩人は言葉を添へてゐる。

この讃歌は紀元前七世紀か六世紀の始に作られたものであると考へられてゐるが、その中に言及せられてゐるエレウシスの密儀はその前より行はれてゐたものであるに相違ない。ホメエロスとヘシオドスに言及せられてゐない事は偶この密儀がアカイア族よりも古くから存在してゐたベラスゴイの宗教に屬するものであつたことを證明する。それが「大地」殊に穀物の母としての母神デエメテエルを祀るものであつたことは言ふまでもない。穀物の凋落と復活はベルセフ・オネエの降下 (καθοδος) と上昇 (ἀνοδος) に反映せられてゐる。デエメエテエルがケレオスの家にたどり着いた時、默然として石の上に坐つたといふことは、凋落の季節に於ける農耕の民の悲しみを現はしたものであり、ケレオスの女、イアムベエが戯れごとを言つて慰めたとあるのは、その實、性交に關係のある所作を示した

ので、生成の爲の咒術のやうなものであつた。詩人は婉曲に言及したのであるが、アレクサンドリアのクレエメエスなどは極めて無遠慮にこの事實を指摘してゐる。「クレエメエスに依れば、この時、デエメエテエルを慰めたのはイヤムベエでなく、オルフィク教徒の地下の神、パウポオである。」<sup>(20)</sup> このやうに本來は穀物の生成に關係ある祭式であつたことは疑を容れないのであるが、年を閲するに従ひ、凋落と復活の思想が重大な要素となり、他界觀念が深められ、デイオニッソスの宗教に結合し、オルフィズムをとり入れて、終に希臘の宗教に於ける神祕思想を體現する所のものとなつた。それがエレウシスに於ける密儀であり、紀元前七世紀にはアテエナイでも盛大な行事の一つとなつた程に重視せられた。その一般を畧叙すれば次の通りである。

毎年、アンテステリオオン〔二月——三月〕にはアテエナイの郊外、アグライに小密儀 (*Lesser Mysteries*) と稱へる行事が行はれた。その年の密儀に與りたいと思ふ者はエレウシスの舊家、ケリユウケスとエウモルビダイの家人より、罪の淨めに似た儀式を受けた後、先づこの準備的密儀に參與する。本當の密儀、大密儀 (*Greater Mys-*

*teries*) はポエドロミオオン〔九月下浣〕の十三日より八日か九日に涉つて行はれた。十三日にはエレウシスよりアテエナイに聖物 (*agalma*) が運ばれ、十四日にはアクロポリスの麓にあるエレウシスの別社に收められる。十五日には參會者一同アテエナイのストア、ポイキレエ〔彩廊〕に集まり、エレウシスの祭官より不淨の人と外國人はこの行事に與ることが出來ないとの宣言を聽く。十六日には海水浴の儀式がある。『海へ行け、密儀を受くる者』<sup>(21)</sup> (*hude puros, "To the sea, ye Mystae"*) といふ聲に應じて誰も皆海へ飛び込む。一人一人の者は生きた豚をかかへて居り、これを逐うて泳ぐ事時には六哩に及んだといふから、大分骨の折れる仕事であつた。無論この海水浴も亦一種の祓ひ或は淨め (*purification*) の式であつた。その後二日をアテエナイに過し、十九日には愈エレウシスに向つて出發する。この時は會衆いづれも白の衣裝、聖物 (*agalma*) は青年祭司に護られ、行列をととのへて進む。この時、デイオニッソスの別名であるイヤッコスの像が運ばれ、誰も皆大聲にイヤッコスの名を唱へるのが常であつた。ケフィッソスの川に架する橋に來た時には詬罵の限をつくして平生の鬱憤を晴らすといふやうなことがあり、かくしてエレウシ

スに到着數日の間さまさまの儀式に與かる。密儀の内容は祕密とせられたが、例の暴露文學その他の文獻に依り、畧その有様を想像することが出来る。先づ第一に「初穂の手向け」(the offering of the first fruits)があり、ついで一定の法式に従ひ、型通の密儀を行ふ。クレエメエスに従へば、この法式——「しるし」——は次の告白に要約せられてゐた。「われは斷食せり。われは飲みもの (kurewa) を飲みたり。われは箱より取れり。わが業を成したる上籠に入れ、又籠より箱に入れたり。」(I fasted; I drank the draught; I took from the chest; having done my task, I placed in the basket, and from the basket into the chest.)<sup>(111)</sup> 即ち最初に斷食があり、次にキューケオオンを飲む。これは一種の聖餐式である。キューケオオンは大麥で作つた粥のやうなもので、デエメエテエルがケレオスの家に着いた時、葡萄酒は飲まなかつたけれども、イヤムベエの戯れごとに慰められて始めて口にしながらこれがこれと同じものであつたと傳へられてゐる。その次には祕中の祕とせられてゐる聖物 (sacra) を手に觸れ、これを箱より籠に、又籠より箱に移すのである。聖物が何であつたかといふことは分らない。その宗教的意義に於いて中世の基督教に於ける遺物 (relic) 禮拜に

近いものであつたことは容易に首肯し得るであらう。

この他、松火を持つて暗い路を歩み、最後に光明の中に入るやうになつてゐる行列の儀式があり、これは靈魂が幽界にさまよつた後、恵まれた者の國に入ることを象徴するものと考へられた。ペルセフォネエの掠奪、デエメエテエルの放浪、母子の再會等は一種の神事劇ともいふべき行事 (epicure) に依つて演ぜられた。この行事は又別にヅエウスとデエメエテエルの結婚を演ずることがあり、その場合のデエメエテエルはブリモと稱へられた。ブリモなるデエメエテエルはヅエウスの子ブリモスを生む。ブリモスはテッサリアの神であるが、この場合にはやはりデイオニッソスの一つの現はれと考へ得べき理由がある。従つてこの行事の意義はオルフィック教徒に於ける「聖婚」と「誕生」の行事のそれに一致する。ジェイン・ハリソンに従へば、實際エレウシスの密儀に於いても「箕を運ぶまつり」が行はれたのである。麥の穂を示すことも重大な儀式の一つであつた。これは穀神としてのデエメエテエルに特有な密儀の精神を傳へるものであつたと思はれるが、後には再生の象徴として用ゐられた。新に密儀に與る者が「降れよ、孕めよ」。(Give,

κῆρ, "rain! conceive")と叫んだといふ事、又二つの壺から地に水を濺いだといふ事などは古くからあつた豊穰の咒術が餘波をとどめたものであらう。

この密儀の宗教的意義が何であるかといふことについては明確な説明を求めることが困難である。恐らく、これと言つて擧示することの出来るやうな教は傳へられなかつたであらう。『秘義を授けられるものは何事をも學ぶわけではない、唯、彼等は心を動かされ、一種の心もちを有つやうにせられる。』"The initiates are not to learn anything, but they are to be affected and put into a certain frame of mind." (114) とアリストテレエスは言つてゐる。唯、この密儀に參與した者が一種の神秘的な心もちに満され、「純潔」と「聖別」に依つて到達し得べき不滅の生命を體驗することが出来たことは確實である。『これらのものを見て、さてその後、地下に行く者は幸なるかな。彼は命の終と、その、ヅエウスに依りて與へられたる始を知るなり。』"Happy he who has seen these things, and then goes beneath the earth. For he knows the end of life and its Zeus-given beginning." (114) とピンドロスは言つて居り、『これらの祭式を見て、さてその後、にヘイデ、アイスの館に入る者は三度恵まれたる者なり、そは、彼等のみそ

こに命を有つ。他のすべてのものは憂き目のみを有つなり。』"Thrice blessed are they who have seen these rites and then go to the house of Hades, for they alone have life there; but all others have only woe." (114) とソフォクレエスも言つてゐる。二人の證言は期せずして曩に引用した讚歌の詩人の言葉に一致する。彼等は皆、エレウシスの密儀に依つて傳へられた所のものが永生の望であり、死後の幸福であることを斷言したのである。

エレウシスの密儀はこの類の祭事の中、最も重大なものであつた。これに似たその他のもの——例へばサモトラケエに行はれたカペイロイの祭事——についてはここに詳述する必要がないと思ふ。オルフィック教徒を通じて垣間見た宗教思想とエレウシスの密儀はいづれも母神教である。オリュムポスの宗教が天の神を祀るものであるのに對して地の神或は地下の神 (cf. *χθονος*) を祀る。併も、その靈的内容に於いては遙かに深遠であり、又、切實である。その窮極に於いて到達したものが何であつたかといふことを考へるに先立ち、ここには先づこの宗教思想が希臘人一般の思想にどのやうな影響を與へたかといふことを述べて置きたい



と思ふ。

ヘロドトスの歴史第二卷八十一節に、オルフィック教徒に言及した所は當時一般の人がこの教について有つてゐた理解を反映する。ヘロドトスは埃及の宗教について述べ、その祭式について次のやうに言つてゐる。

"Here their practice resembles the rites called Orphic and Bacchic, but which are in reality Egyptian and Pythagorean." (117)

「ここで人人の行ふ事は、オルフィック或はバキックと稱へられてゐるが、實際は埃及のものであり、ピサゴラスの學徒のものである所の祭式に似てゐる。」

オルフィック教徒の祭式とバッコス即ちダイオニュッソスの祭式を一つに見たのは理由のあることである。埃及の宗教が本原であるといふのも、イシスとオシリスの宗教が母神と子神の宗教を代表する典型的な實例である事を思へば根據

のない説であるとは言へない。ピュタゴラスの學徒を本原としたのはその教説の一部にオルフィズムと同一視せられるものがあつたからであらう。オルフィック教徒はピュタゴラスの學徒ではなく、ピュタゴラスより生れたものでもない。寧ろ反對にピュタゴラスの方がオルフィズムに影響せられたのである。彼がイオニアのサモスより移住したクロトオナは既にオルフィック教徒の本據であつた。そこに、一種の宗教生活と哲學攷究を目的とする盟社を作り、後には政治上の勢力をも占めるやうになつたのであるが、この盟社は紀元前五世紀の後半期に起つた革命に依つて破壊せられた。然しながらその教徒の中の殘存者は教祖の遺志を繼いで、南部伊太利亞とシケリアはもとより希臘本土にも教説を擴め、ピュタゴラス學徒の存在は漸次閑却することの出来ないものとなつた。五世紀の末葉、テュバイに住んでゐたフィロラオスはこの教説の體系を明らかにした最初の哲學者である。エバメイノンダスの師であつたリュシスも亦逃亡者の一人であつた。シケリアではタレントゥムのアルキキュタスに依つてこの教徒は再び勢を得たが、その死後述を絶つに至つた。ボルフェュリオスやイヤムピコスに依つて傳へ

られたピュタゴラスの神話めいた逸事などは私どもの考察に資する所が尠い。その教説の中、オルフィック教徒の思想に直接交渉があつたやうに思はれるものは、宗教生活に關する方面である。『ピュタゴラス風の生活様式』(Ποθητικὸς ἔπος τοῦ Πλάτωνα) とプラトオンが稱へた所のものは禁慾に近い生活に依つて罪惡より免れ、靈魂の救を達成することを目的とする。ピュタゴラス學徒は食物と日常の行爲に關する一種の禁忌(Taboo)を守つた。その基くところが輪廻の思想であり、人間と禽獸草木の間に存在する血縁的關係であるといふことなどはオルフィックによほど接近してゐる。靈魂が空中に浮遊するといふことも亦兩者に共通な思想である。アリストテレエスに従へば、ピュタゴラス學徒の或者は靈魂を空中の微塵であると考へ、或者はこれらの微塵を動かす所のものであると考へた。従つて、肉體牢獄の説なども教説の一部を成してゐる。このやうに斷片的な思想を綜合して考へると、ピュタゴラス學徒の宗教思想はオルフィック教徒のそれと殆んど同一であつたと思はれる。唯、彼等はオルフィック教徒の行事を踏襲しなかつた。彼等の信仰する神が、ディオニュッスではなく、デロスのアポロロンであつた

といふことは單なる神話的要素であるとは思はれない。ピュタゴラス學徒も亦、行事に代るべき何等かの儀禮を有つてゐたとは思はれるが、それは「生食のみつり」[糞を運ぶのみつり]或は「聖婚」のやうに直接に民族の宗教より發達したものでなく、彼等の所謂内觀(ἑσπερία)の生活を助ける爲の法則として規定せられたものであつたに相違ない。一例を言へば學徒の一人となつた者には沈黙と服従の義務が課せられた。一切の論議を封じ、省察と默想に依り、ただひたすらに眞理を追求せよといふのである。その最高の理想は「神に従ふこと」(ἀκολουθεῖν τῷ θεῷ)であつた。

茲にピュタゴラス學徒をオルフィック教徒より區別する重大な點がある。ピュタゴラス學徒は行事を経ずしてオルフィックズムを取入れた。靈魂の存在は行事に於ける離脱(ἐκστασις)の體驗に依つて認識せられたとすれば、行事を體驗しない靈魂存在説は認識の本質を失ふことになる。ピュタゴラス學徒は靜觀或は哲學を以て之に代へた。

"In Ionia, (as we have seen,) *philosophia* meant something like 'curiosity,' and from that use of it the common Athenian sense of 'culture,' as we find it in Isocrates, seems to have derived. On the other hand, wherever we can trace the influence of Pythagoras, the word has a far deeper meaning. Philosophy is itself a 'purification' and a way of escape from the 'wheel.'" (註+)

【既に見たやうに】アイオニアに於いて、*philosophia* (哲學) は「好奇心」に似たやうなものを意味した、さうしてさういふ風に用ゐることに、イソクラテイズに發見する如き「教養」といふアゼンスでの意義は由來したものであるやうに思はれる。之に反して、われわれがピサゴラスの影響を辿り得るところでは何處でも、この言葉はそれよりも遙かに深い意味を有つてゐる。哲學はそれ自身一つの「淨め」であり、「輪廻」より免れたるための道である。】

とジョン・パネットは言つてゐる。哲學を以て生活——この場合には宗教生活——の一様式としたのはピュタゴラス學徒より始まると言ふことが出來よう。然しながらオルフイック教徒が熱烈な行事を行ふ時、純一な情緒を通して體驗した

ものと、ピュタゴラス學徒が自己の思想を内觀する事に依つて到達したものと相違する點がなければならぬ。オルフイズムとは正反對の思想系統に屬するオリュムボスの精神が入つて來るのはこの一點の間隙を境とする。オルフイズムは賛成であるが、其行事は野蠻である、或は不合理であると思惟する時、既に調和を愛し均齊を尙ぶ希臘人の文化的精神、その理性主義が思想の一部を支配し始める。それと共にオルフイズムに依つて開かれた神秘の扉は半ば鎖されてゐる。

ピュタゴラス學徒の哲學思想はこの分岐の點より出發したものであるやうに思はれる。その倫理上の理想は秩序あり、調和ある生活を形成することであり、その宇宙論も亦秩序と調和に依つて統一せられてゐる。萬物の原理は「數」である。「奇數」と「偶數」の關係は「限定するもの」と「限定せられざるもの」との關係である。「奇數」は二分することに限定を與へ、偶數は無限に二分せられる。この關係は又、一切の現象の對立性を貫徹する。さうして此關係を成立させてゐるものは調和 (*harmonia*) である。注意すべきことは彼等の所謂「數」が概念ではなくして實體であり、それまでの哲學者が考へた原質、火とか空氣とかに相當するものであつたといふことで

ある。更に又、注意すべきことはピュタゴラス學徒は——眞に宗教的意識に依つて支配せられてゐたのであればさうであるべきやうに——「限定せられざるもの」「無限なるもの」に「あこがれを有つたのではなく、限定するもの」を尊重したといふことである。「限定するもの」はコスモスであり、「限定せられざるもの」はカオスである。「奇數」は吉、「偶數」は凶。それは「文化」或は「技術」(Art)と自然(Nature)との對立である。有名な「對立の系列」(anastrophe tou eurythou)はフィロラオスのやうな學徒の一人に依つて作られたものと考へられてゐるが、その一一の對立について相互の關係を見ることは多少この思想の基くところを明かにするであらう。

- (一) 「限定するもの」 「限定せられざるもの」
- (二) 奇數 偶數
- (三) 一 多
- (四) 右 左
- (五) 男 女
- (六) 靜 動

- (七) 直 曲
- (八) 明 暗
- (九) 善 惡
- (十) 正方形 長方形

ピュタゴラス學徒が音樂を重んじたといふこともこの立場より理解すべきである。彼等は醫藥に依つて肉體を淨化するやうに、音樂に依つて靈魂を淨化したとアリストクセノスは言つたさうであるが、もとよりそのやうに解釋すべき點もあつたであらう。MIND 「アリストテレエスの『詩學』に於ける kallogia の説はここにその起原をもつてゐる。MIND」然しながら、コリュバンテエスの舞樂に見る如き淨化作用は、ピュタゴラス學徒が最も高尚なものとするやうな内觀の餘地を残さない。彼等は音樂を考察する時にも、それが萬物の原理である所の「數」に還元し得べき事、又、彼等の尊重する秩序と調和が音樂に於いて代表的な典型を發見する事を認めた。言ひ換へるならば、彼等は音樂の暗示する無限性の爲に音樂を尊重したのではなく、音樂の「限定」が「無限」を統一することのために尊重した。故に淨化作用

——或は「淨め」(purification)——としての音楽は哲學と同じ意味を有つことになる。それはやがて節制や禁慾が日常生活に於ける「自然」を統一する状態に比較し得るであらう。

ピュタゴラス學徒についてオルフィズムに影響せられた希臘の哲學者はエムペドクレエスであつた。シケリアのアクラガスに生れ、政争の渦中に投じ、宏才博識、一世を風靡したことについてはここに叙説する必要がないと思ふ。アリストテレスがエムペドクレエスを以て修辭學の開祖と稱へた事、又其流風がソフィスト、ゴルギアスに依つて傳へられた事については修辭學の發達について述べた時に言及した。「第八章修辭二四四頁參照」それらの方面及び彼の主要な哲學説である四元素と愛憎の論については次の章に多少の説明を試みたいと思ふ。ここには「淨め」(καθαρισμοί, 'Purifications')と題する教訓詩の中に現はれた宗教思想について一言を費やす事とする。エムペドクレエスは一面に於いて道士 (medicine-man) のやうな性格を具へ、南伊太利亞のピュタゴラス學徒にも交際があつたといふことであるから、彼のオルフィズムはピュタゴラス學徒より傳へられたものであら

う。

"There is an oracle of Necessity, an ancient ordinance of gods, eternal and sealed fast by broad oaths, that whenever one of the daemons, whose portion is length of days, has sinfully polluted his hands with blood, or followed strife and forsworn himself, he must wander thrice ten thousand seasons from the abodes of the blessed, being born throughout the time in all manners of mortal forms, changing one toilsome path of life for another. For the mighty Air drives him into the Sea, and the Sea spews him forth on the dry Earth; Earth tosses him into the beams of the blazing Sun, and he flings him back to the eddies of Air. One takes him from the other, and all reject him. One of these I now am, an exile and a wanderer from the gods, for that I put my trust in insensate strife." (M+K)

「永劫不變にして、かつ、大なる誓言を以て封ぜられたる必然」の託宣、神神の古き定めありて、數日の長さを定命とする精靈のひとり、罪深くもその手を血に汚すか、或は争鬭に従ひ、誓を破る時には、常に、彼は三萬季節の間、惠まれし者の往家を離れてさすらひ、その間を通じて、「一つのくるしみ多き生涯の道をまたひとつの生涯の道へと變へながら、ありとあらゆるうつそみの姿に生れざるべからず。何となれば、大なる「空氣」は彼を「海」に逐ひ、「海」は乾きたる「陸地」

の上に吐き出す。「陸地」は彼をかがやかしき太陽の光の中に投じ、光は彼を「空氣」の渦巻の中に投げかへす。一<sup>じ</sup>は他より受けとり、すべては斥くるなり。おろかなる争闘を頼みしに依り、われも亦今はこれらのもの一人にして、神神よりのやらはれ人、またさすらひ人なり。」

この斷章は明らかに轉生 (transmigration) を説いたものである。「何となればわれは今までに少年なりき、少女なりき、灌木、小鳥、また海の中の獸せる魚なりき。」

For I have been ere now a boy and a girl, a bush and a bird and a dumb fish in the sea.” (31+32) と彼は他の一つの斷章の中に言つてゐる。このやうに人間はすべての命あるものとは血縁の關係を有つてゐるのであるから、生贄の獸を殺す時にすら、親が子を、子が親を殺してゐないとは限らぬ。三<sup>13</sup> これらの罪より免れるには「淨め」に依り、肉食を禁ずることにより、一身の清淨を保つことに依るより他はない。さうして、終に人間の中では豫言者、歌人、醫師、王侯として現はれ、最後には神神となり、この世の憂苦より遁れることが出来る。(31+32)

エムペドクレエスの宗教思想はオルフィズム或はピュタゴラス學徒のそれよ

り一步も先に出づることが出来なかつた。これらの斷章の中に彼の宇宙論を調和せしめようとした痕迹を發見することは出来る。——四元素の中に漂蕩する精靈のことを述べたところはその一例である。——然しながら、彼の宇宙論はその宗教思想の基礎觀念を構成してゐない。そのみならず、彼の宇宙論には宗教思想に於いて豫定せられてゐる「不滅の靈」を容れる處を發見することが出来ないのである。

私どもはここで暫く哲學者の群を去り、詩人の間にこの宗教思想の發達を辿りたいと思ふ。希臘詩人の中、オルフィズムに影響せられた者の第一に數へらるべき者はピンドロスである。斯う言へば、曩にピンドロスの詩を引用してオルフィク教徒に正反對の思想を代表せしめたことと撞着するやうに思はれるかも知れないが、私はオルフィズムがピンドロスの宗教思想であると言つてゐるのではない。ピンドロスの宗教思想にはオルフィズムに影響せられた方面があるといふことを言つてゐるのである。そこで、先づオルフィズムに影響せられない方面から考へ、次にオルフィズムに影響せられた方面を考へ、最後にピンドロスの宗教思

想に於けるこの二つの方面の對立について述べて置きたいと思ふ。

ビンダロスはオリュムボスの精神を代表する國民詩人の第一位を占める。彼の生涯が大體、ペルシア戦争と同時代であつたことを思へば、あの國難に直面して興起した希臘人の國民的情熱が、一人の詩人を動かしてその最も崇高な思想を表白せしめたことは訝しむに足りない。頌詩或は「勝ちうた」(epithymion)として知られてゐるビンダロスの詩は、この情熱に依つて制定せられた國民的競技——オリュムピア、ピュテイヤ、ネメア、及びイストミアの競技——に分離の關係を有つてゐる。オリュムピアの競技とネメアの競技はヅエウスの爲に行はれた。ピュテイヤの競技はアポロロンに關係を有つて居り、イストミアではポセイドオンのために競技を行ふといふことになつてゐた。これらの競技が希臘と希臘の植民地に於ける國民精神を振興する手段として用ゐられたことは言ふまでもない。競技者はもとより、觀衆の間にも外國人の參加を許さず、その代り、凡そ希臘人の住むところは如何なる邊境の孤島でも必ず選手を送り、これらの盛典に與ふことに依り、母國との結合を強固にすることが出來た。従つて、これらの競技も亦、希臘の神

神と希臘人のために制定せられた一種の神事、或はそれぞれの神に關係のある行事であり、競技者の勝利はやがて神の榮光を顯はす所のものと考へられた。斯ういふ風に考へると、ビンダロスの頌詩が一種の宗教詩であり、單に競技に勝つた者を讃へるといふことに止らず、悠遠なる過去の出來事より説き及ぼして世界に遍在する神の稜威が例へばアイギナの一人の少年の上にも現はれ、終にその赫灼たる偉業を成さしめたといふやうな莊重の調を奏でたのも理由のないことではない。ジョン・ペイレエに従へば、眞に「莊麗體」(the Grand style)と稱へ得るものはビンダロスに於いて最高の典型を發見するといふことであるが、日本文學に於ける祝詞は恐らくそれに劣らない大文學であらう。<sup>(三十九)</sup> 作られた時の事情と境遇に相違の點があるけれども、兩者共に神事の一部を成すものであり、神神と人間の關係を述べたものであることに於いて比較を許さるべきである。

それ故に、ビンダロスの宗教思想の中心にあるものはオリュムボスの宗教である。人間と神神の關係について彼は次のやうに言つてゐる。

"One race there is of men and one of gods, but from one mother draw we both our breath, yet, is the strength of us diverse altogether, for the race of man is as nought, but the brazen heaven bideth, a habitation steadfast unto everlasting."

Yet withal we somewhat in us like unto the immortal's bodily shape or mighty mind, albeit we know not what course hath Destiny marked out for us to run, neither in the daytime neither in the night."

『人間の一つの族あり、神の一つの族あり、一人の母よりわれらは共に息を引けり、さりながらわれらの力は隔絶す、何となれば人間の族は無きに等し、されど銅の天、永劫に撼がぬ住家は朽つることなければなり。』

されど尙、われらは不滅の神神の肉體の形或は偉大なる心に似たる或ものをわれらの衷に有てり、よしや宿命がわれらの走るために定めたる道すぢを、晝間も知らず、夜も知らずと

No. 1

神神は全知であり、全能である。人間と同じやうに「大地」より生れたものであり、人間に似たものを有つてはゐるが、それと共に人間よりも遙かに優れた力と知慧を具へてゐる。これに依つて見れば、ビンダロスの考へてゐた神神は大體に於い

てホメロス以來の擬人觀を繼承したものである。唯、このやうにして意想せられた神神が今までの宗教に見るやうに道德的に低劣なものであつたり、不合理な性格を具へてゐたりすることはオリュムポスの宗教に於いて敬虔なこの詩人にはたへ難いものと感ぜられた。そこで、彼の頌詩の中には神神に適はしからぬ事と思はれたものを殊更に削除した個所や、時には又、急に物語の流を轉回せしめてそれらの點に觸れないやうにした個所がある。オリュムピアの第一頌詩に競馬の勝利者ヒエロオンといふ青年の縁に依り、その昔、ポセイドオンの愛を享けて馬術に妙を得た英雄ペロップスのことを述べたところなどは、明らかにビンダロスの主張を示してゐる。ペロップスの父、リュダイアの王のタンタロスが神神を招いた時、ペロップスを殺し、その肉を饗應したが、當時、ベルセフォオネエを失つて悲傷のあまり物の見分がつかなくなつてゐたデエメテルの外の神神はこの事を知つて手を觸れなかつた。ゼエウスの憐れみに依り、蘇生して元の身に立ちかへつた時にも、ペロップスの身體にはデエメテルに食べられた肩の骨が失はれてゐたが、ゼエウスはその代に象牙の肩を作つて補綴した——。これが當時



一般に傳へられてゐた傳説である。ビンダロスはこれに對して『神神に關して  
恭しく語るは人にふさはしきことなり、されば咎を受くること尠し。タンタロス  
の子よ、汝につきて、われはわれよりさきに逝きし人人とは反對なることを言ふべ  
し……』“Meet is it for a man that concerning gods he speak honourably; for the reproach is less,  
of thee, son of Tantalos, I will speak contrariwise to them who have gone before me ……” (E+)  
と言つて居り、又『ありがたき神神のひとりをも食人種と稱ふことはわが能くし  
得ざる所なり』“to me it is impossible to call one of the blessed gods cannibal.” (E+1)とも言  
つてゐる。

ビンダロスのこのやうな修正は、然しながら、オリュムポスの精神に矛盾するも  
のではなく、オリュムポスの精神それ自身の發達を示すものである。ホメエロス  
の神神がその時代に於ける人間の理性に依つて擬人化せられたものであるやう  
に、ビンダロスはビンダロス自身の理性に従つて人間的な神神を考へたのである。  
ビンダロスが神神に於いてあり得べからざることと考へたのは、その實、人間に於  
いてあり得べからざることであつたのに過ぎない。彼が神神に於いてあるべき

ことと考へたものも亦、人間に於いて最も望ましく思はれたことであつた。要す  
るに、神神は神であるといふよりも完全な人間である。全知であり、全能であるの  
みならず、眞實であり、正義に與する所のものである。『眞』(Athena)は擬人化せられ、  
ヅエウスの女として取扱はれてゐる。『眞を司る女王、大なる徳の原なるものよ、わ  
が確かなる信仰を喰しき虚偽に跌かざるやうに護りたまへ。』“Queen of Truth, who  
art the beginning of great virtue, keep my good-faith from stumbling against rough falsehood.” (E+11)  
と彼はその斷章の中に祈つてゐる。アポロロオンの徳を讃へたところには『その  
心は虚偽に與らず』“in lies it hath no part.” (E+13)と言つてゐる。

ビンダロスの考へた人間の罪惡は主として人間が自己の力の限界——その不  
完全なる状態——を悟らず、全知全能なる神神と同じものにならうとする事であ  
る。これも亦、神と人との關係といふよりも、人と人との關係に於ける道德的觀念  
より生じたものと言ふべきであらう。不完全であることの第一の證據は死であ  
る。人間は死の運命を免れることが出来ない。人間でありながら、不死の神神と  
同じものにならうとするのはその分を知らない者である。『ヅエウスにならむと

求むる勿れ』といふ勸言は競技の勝利を得たものに對して、又、ビンダロス自身に對して幾度か繰り返へされてゐる「前出四四七頁參照」。『われはわが髪に花束をつけて歌はむとす。さはれ、不滅の神の嫉みが、この一日わが求めむとするいかなる樂しき事をも損ふことあらざれ。』*“I will set chaplets on my hair and sing. Now let no jealousy of immortals mar whatever sweet thing through a day's pursuit I follow.”* (E+H) と彼はその得意の絶頂に達した時にすら、それに依つて「神の嫉み」即ち不遜の罪に對する罰を蒙ることを恐れてゐる。このやうな「嫉み」を抱き得る神が人間の性質より抽象せられたものであることは説明を俟たないであらう。

これらはビンダロスに於けるオリュムボスの精神の所現である。彼に影響したオルフェウムはその他界觀念を示した所に見ることが出来る。オリュムピアの第二頌詩の一節は明らかに他界に於ける賞罰に言及したものである。

*“…… guilty souls pay penalty, for all the sins sinned in this realm of Zeus One judgeth under earth, pronouncing sentence by unloved constraint.*

*But evenly ever in sunlight night and day an unlaborious life the good receive, neither with violent hand vex they the earth nor the waters of the sea, in that new world ; but with the honoured of the gods, whosoever had pleasure in keeping of oaths, they possess a tearless life ; but the other part suffer pain too dire to look upon.*

*Then whosoever have been of good courage to the abiding steadfast thrice on either side of death and have refrained their soul from all iniquity, travel the road of Zeus unto the tower of Kronos : there round the islands of the blest the Ocean-breezes blow, and golden flowers are glowing, some from the land on trees of splendour, and some the water feedeth, with wreaths thereof they entwine their hands.”* (E+H)

『…… 罪ある靈は刑罰に服す、何となればゾエウスのこの王國にて犯せるすべての罪に對し、地下にて一人のもの「好ましからぬ必然の拘束に依り、宣言を下しつつ裁斷するなり。

されど、夜も晝も、かはらぬ日の光の中に善良なるものは苦しみなき生涯を受く。かの新なる世界に於いて、彼等は土をも海の水をも亂すことなし。誓を守れることを喜とせし者は誰もみな神の中の崇めらるるものと共に、涙なき生涯に入る。されどこれと反對なるものは見るも恐ろしき苦患になやむ。

この故に死の兩岸に三たび堅固なる行を守りて、不正なることより靈を免れしめたる者はゼウスゼウスの道に旅してクロノスの塔に到るなり。そこには恵まれし者の島島をめぐりて「わたつみわたつみのそよ風吹き、こがねの色の花、或ものはかがやかしき陸地の樹の上より、或ものは水、これを育やぶひて、照り匂ひたる、その花束を彼等は手に纏へり。』

また一つの斷章には再生——死者がある期間を冥府で過した後に再び人間として生れるといふオルフィック教徒の教説——について次のやうに言つてゐる。

“..... But from whomsoever Persephone accepteth atonement made for an ancient woe, their souls unto the light of the sun above she sendeth back again in the ninth year. And from those souls spring noble kings, and men swift and strong and in wisdom very great : and through the after-time they are called holy heroes among men.” (E+K)

『.....されど誰にてもあれ、その人よりパァシフ・ニイが古き罪咎に對して爲されたる償を受け納めたる者の靈魂を、女神は九年目に再び上なる日の光の中へ歸したまふ。それらの靈魂より貴き王たち、足疾く力強き人人、知慧いと秀れたる人人は生れ出づ。また後の世

を通じて彼等は人の中なる神雄と稱へらる。』

最後の一節はエムベドクレエスに於ける再生の觀念に酷似してゐる。實際、この一節の共通點に依つて、ビンダロスがオルフィズム或はピュタゴラス學徒に負ふところを有つてゐたことは疑を容れない。

これらの思想は明らかにオリュムポス以外のところより影響を受けたものである。靈魂の不滅、未來の賞罰、再生、及び窮極の幸福。ビンダロスの時代に於いてこれらの思想を言現はしたものはいづれも皆オルフィズムに由來する。ビンダロスも亦その影響の下にあつたと見るべきであらう。又一つの斷章にはビンダロスに於けるオリュムポスの宗教とオルフィズムとの興味ある融合が示されてゐる。

“..... By happy lot travel all unto an end that giveth them rest from toils. And the body indeed is subject unto the great power of death, but there remaineth yet alive a shadow of life ; for this only is from the gods ; and while the limbs stir, it sleepeth, but unto sleepers in dreams discovereth oftentimes

the judgment that draweth nigh for sorrow or for joy." (E+J)

「……幸福なる運命に依り、すべての人は勞苦よりの休息を與ふる終に向ひて旅し行くなり。肉體こそは死の大なる力を受くるものなれ、命のかけありて尙も生き残る。これのみぞ神より來れる。手足の動けるうちは眠れり、されど眠れる人には屢夢の中に悲哀を與へ、或は喜悅を與へんとして近付く裁斷を示すなり。」

「命のかけ」が「靈魂」であるといふことはホメエロスの思想である。「オデュッセイア」第十一卷、八三行。「同三十三卷、一〇四行」然しながらそれが「神神より」即ち「天より」來たものであるといふことはオルフィズムに由來するものであり、肉體が動いてゐる間、靈魂は眠つて居り、肉體が眠つてゐる時に靈魂が活躍するといふのは既に幾度か言及した肉體牢獄の説に關係がある。

ビンダロスに於けるオリュムポスの宗教とオルフィズムとは完全に調和してゐるといふことが出來ない。それは一種の對立である。然しながらこの對立は少しでもオルフィズムに影響せられたオルフィク教徒以外のすべての希臘人に

於いて免れ難いものであつたに相違ない。ピュタゴラス學徒のやうに、時にはオルフィク教徒と混同せられる程オルフィズムに近いものでもその思想の中にこれに對立する要素を具へてゐたことは既に述べた通りである。プラトオンの哲學を特徴づける所の重大な一面はこの對立の中から生れた。私どもはやがてその問題について考察したいと思ふのであるが、その前に劇詩人の宗教觀を一瞥して置く必要がある。

希臘劇がディオニュッソスの祭より發達したものであることは既に述べた。従つて劇そのものが神事の一部分であるといふ意識は劇詩人と一般觀衆の常に認めてゐたことである。この點、アイスキュロスやソフォクレエスの戯曲とビンダロスの頌詩は共通なものを有つてゐる。私はビンダロスの頌詩を祝詞に比較したが、希臘劇は又日本の神事に似た發達の徑路を辿つてゐる。希臘悲劇とディオニュッソスの神事の間にとのやうな關係が存在するかといふことを論ずるためには劇の起原に關する二つの學說に對して決定的な態度をとらなければならぬ。その一つはギルバート・マレエに依つて代表せられる歲神起原説であり、